客坊山遺跡群第２次発掘調査報告

1998

財団法人　東大阪市文化財協会

例　言

1．　本書は、東大阪市客坊町1065番地他において㈱日昭興産により計画された宅地造成工事に伴って実施した客坊山遺跡群第２次発掘調査報告書である。

2．　発掘調査は、株式会社日昭興産より委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が実施し、芋本隆裕・才原金弘を担当として昭和63年５月16日から同年10月14日までの間、現地調査を行なった。

3．　本書の執筆は、Ⅰ，Ⅱを芋本、Ⅲを才原、Ⅳを芋本・才原が担当し、執筆にあたっては四天王寺国際仏教大学名誉教授藤沢一夫氏に多くのご教示を得た。

4．　本書に掲載した図面・写真のうち、遺構実測図及び発掘現場写真は調査に参加した全員、遺物実測図は西川福美・栗田一巳・竹田円代が作成し、遺物写真は㈱ＧＦプロに委託して撮影した。

5．　発掘調査及び整理作業には、以下の補助員諸氏が従事した。
長島康裕、辰野直樹、柴田敦司、森下克弘、阪口徳一、廣瀬晴信、栄　富也、吉村達也、久井勇三、名倉祐子、浅尾友美子、渡辺安司

本文目次

I　調査に至る経過 …… 1

II　発掘調査の概要

1　調査の方法・地層 …… 4

2　遺構 …… 4

III　出土遺物

1　土器 …… 10

2　石器 …… 36

3　骨製品 …… 54

4　木製品 …… 54

5　金属製品 …… 63

6　土製品 …… 63

7　瓦 …… 69

IV　まとめ …… 75

挿図目次

第1図　生駒西麓東大阪市域の遺跡分布図（1/25000） …… 2

第2図　客坊山遺跡群第2次発掘調査地周辺図（1/5000） …… 3

第3図　A1地区基壇跡実測図（1/80） …… 5

第4図　C1地区・D地区石垣3実測図及びC1地区石段平面実測図（1/100） …… 7

第5図　C1地区穴蔵実測図（1/80） …… 8

第6図　客坊山遺跡群第2次発掘調査地平面実測図（1/200） …… 折込み

第7図　A1地区瓦溜1・2、A2地区石組溝・溝2出土土器実測図 …… 16

第8図　A2地区落ち込み2出土土器実測図 …… 17

第9図　B地区火葬土坑5・瓦溜・落ち込み5、C1地区焼土坑出土土器実測図 …… 18

第10図　C1地区穴蔵出土土器実測図 …… 19

第11図　C1地区土坑17、C2地区土坑11出土土器実測図 …… 21

第12図　C2地区土坑6・9・16出土土器実測図 …… 22

第13図　C2地区落ち込み4出土土器実測図 …… 24

第14図　C2地区土坑8・14・15、C1地区溝2出土土器実測図 …… 25

第15図　D地区土器溜出土土器実測図 …… 26

第16図　遺物包含層出土弥生土器・須恵器・土師器実測図 …… 28

第17図　遺物包含層出土黒色土器・土師器・須恵器実測図 …… 29

第18図　遺物包含層出土土師器実測図 …… 30

第19図　遺物包含層出土土師器実測図 …… 31

第20図　遺物包含層出土土師器実測図 ……32
第21図　遺物包含層出土土師器実測図 ……33
第22図　遺物包含層出土土師器実測図 ……34
第23図　遺物包含層出土土師器実測図 ……35
第24図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……37
第25図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……38
第26図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……39
第27図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……40
第28図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……41
第29図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……42
第30図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……43
第31図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……44
第32図　遺物包含層出土瓦器実測図 ……45
第33図　遺物包含層出土陶器実測図 ……46
第34図　遺物包含層出土須恵器実測図 ……47
第35図　遺物包含層出土須恵器・瓦器実測図 ……48
第36図　遺物包含層出土陶器実測図 ……49
第37図　遺物包含層出土陶器・須恵器実測図 ……50
第38図　遺物包含層出土磁器実測図 ……51
第39図　石器・骨製品実測図 ……52
第40図　石器実測図 ……53
第41図　石器実測図 ……54
第42図　木製品実測図 ……55
第43図　木製品実測図 ……56
第44図　銭貨拓影 ……59
第45図　金属製品実測図 ……60
第46図　金属製品実測図 ……61
第47図　金属製品実測図 ……62
第48図　土製品実測図 ……64
第49図　瓦拓影・実測図 ……65
第50図　瓦拓影・実測図 ……66
第51図　瓦拓影・実測図 ……67
第52図　瓦拓影・実測図 ……68
第53図　瓦拓影・実測図 ……69
第54図　瓦拓影・実測図 ……70

第55図　瓦実測図 ……71
第56図　瓦実測図 ……72

表・史料目次

表1　土坑計測値一覧表……9
史料1　客坊城関係の資料……74
史料2　文字瓦にヘラ描きされた文字（読み下しは藤沢一夫氏による）……76

図版目次

図版1　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　調査地より河内平野をのぞむ
2　調査地南半部と河内平野
図版2　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　A1地区基壇跡（南より）
2　同上（北より）
図版3　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　A1地区基壇跡（北より）
2　A1地区基壇跡北東角の石組暗渠（北西より）
図版4　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　A1地区石垣1・2、瓦組暗渠（北より）
2　A1地区石垣2（北より）
図版5　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　A2地区北部の瓦溜り（西より）
2　A2地区南半部の遺構（南より）
図版6　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　A2地区石組溝及び溝内瓦片出土状況（西より）
2　A2地区石組溝全景（西より）
図版7　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　A2地区遺構全景（北より）
2　A2地区落ち込み内の木製ミニチュア船出土状況
図版8　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　B地区遺構全景（南より）
2　C1地区遺構全景（南より）
図版9　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　B地区瓦組暗渠3と石列（東より）
2　同上（西より）
図版10　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　B地区石垣4・5（北西より）
2　B地区石垣6・8（西より）
図版11　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　C1地区穴蔵内焼土除去状況（南より）
2　C1地区穴蔵全景（南より）
図版12　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　C1地区穴蔵（東より）
2　C1地区穴蔵（西より）
図版13　客坊山遺跡群第2次調査遺構　1　C1地区土坑1～3（北より）

		2	C１地区焼土坑・柱穴他（北より）
図版14	客坊山遺跡群第２次調査遺構	1	C１地区石垣３と石段（北東より）
		2	D地区石垣３（北東より）
図版15	客坊山遺跡群第２次調査遺構	1	C１地区石垣３を切って築かれた棚田の石垣（西より）
		2	同上
図版16	客坊山遺跡群第２次調査遺構	1	C２地区遺構全景（北より）
		2	C２地区遺構全景（南東より）
図版17	客坊山遺跡群第２次調査遺構	1	D地区地山面全景（北より）
		2	D地区土器溜りの土師器小皿出土状況
図版18	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	A１地区瓦溜１出土瓦器香炉、A－２地区落ち込み２内出土瓦器椀・土師器皿
図版19	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	A２地区落ち込み２出土土師器皿、C２地区焼土坑出土土師器皿・穴蔵出土青磁碗
図版20	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	C１地区穴蔵出土備前焼甕・瓦器火舎・白磁皿・土師器皿、土坑17出土土師器皿
図版21	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	C１地区土坑17出土土師器皿・瓦器椀、C２地区土坑11出土土師器皿、土坑６・９出土瓦器椀、C１地区溝２出土瓦器壺、D地区土器溜出土瓦器皿
図版22	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	A２地区落ち込み２出土瓦器椀・火舎・摺鉢、土師器皿
		2	C１地区焼土坑出土瓦器摺鉢・羽釜・火舎、陶器（折り縁皿）、土師器皿
図版23	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	C１地区土坑17出土瓦器摺鉢、土師器皿・羽釜
		2	D地区土器溜出土土師器皿
図版24	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	遺物包含層出土弥生土器高杯、須恵器甕・高杯、黒色土器椀
図版25	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	遺物包含層出土土師器羽釜
図版26	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	遺物包含層出土土師器羽釜、瓦器羽釜・火舎・水滴・椀
図版27	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器椀
図版28	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器椀
図版29	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器椀
図版30	客坊山遺跡群第２次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器椀

図版31	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器椀
図版32	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器小椀
図版33	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土信楽焼擂鉢、備前焼擂鉢・甕、瀬戸美濃焼皿、常滑焼甕、瓦器擂鉢、須恵器捏鉢
図版34	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土白磁小碗・皿、青磁碗
		2	遺物包含層出土土師器皿
図版35	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土弥生土器壺・鉢・甕、土師器甑
		2	遺物包含層出土須恵器甕・提瓶・杯・蓋・脚
図版36	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土土師器羽釜
		2	遺物包含層出土土師器羽釜
図版37	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土土師器羽釜
		2	遺物包含層出土土師器羽釜
図版38	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土土師器羽釜
		2	遺物包含層出土土師器羽釜
図版39	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土土師器羽釜
		2	遺物包含層出土土師器羽釜
図版40	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土土師器羽釜
		2	遺物包含層出土瓦器羽釜
図版41	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器羽釜
		2	遺物包含層出土瓦器羽釜
図版42	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器羽釜
		2	遺物包含層出土瓦器羽釜・鍋
図版43	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器火舎
		2	遺物包含層出土瓦器火舎
図版44	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器香炉・蓋・深鉢
		2	遺物包含層出土瓦器火舎・深鉢・甕
図版45	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器深鉢・甕
		2	遺物包含層出土瓦器火舎、常滑焼甕
図版46	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土備前焼擂鉢、信楽焼捏鉢
		2	遺物包含層出土備前焼擂鉢、瓦器擂鉢、須恵器捏鉢
図版47	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土瓦器擂鉢、須恵器捏鉢
		2	遺物包含層出土瓦器擂鉢、須恵器捏鉢
図版48	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土須恵器捏鉢

		2	遺物包含層出土備前焼甕、瀬戸美濃焼折縁皿、陶器甕
図版49	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土常滑焼、須恵器甕
		2	遺物包含層出土青磁碗・皿、白磁碗
図版50	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土青磁碗・皿、白磁皿
		2	遺物包含層出土白磁碗・皿
図版51	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	遺物包含層出土青磁碗・白磁碗、青花皿
		2	硯・石鍋
図版52	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	有舌尖頭器・石斧・石槍・石庖丁・碁石・硯（表）
		2	同上（裏）
図版53	客坊山遺跡群第2次調査遺物	1	石器
		2	石器
図版54	客坊山遺跡群第2次調査遺物		木製品
図版55	客坊山遺跡群第2次調査遺物		銭貨
図版56	客坊山遺跡群第2次調査遺物		サイコロ、当て具、土製品
図版57	客坊山遺跡群第2次調査遺物		軒丸瓦
図版58	客坊山遺跡群第2次調査遺物		軒丸瓦
図版59	客坊山遺跡群第2次調査遺物		軒丸瓦・軒平瓦
図版60	客坊山遺跡群第2次調査遺物		軒平瓦
図版61	客坊山遺跡群第2次調査遺物		飾り瓦
図版62	客坊山遺跡群第2次調査遺物		飾り瓦・文字瓦

I　調査に至る経過

客坊山遺跡群は、生駒山の西麓、近鉄瓢箪山駅の東方約１㎞付近を中心に標高110～220mの急峻な尾根上に主として分布する古墳群と、標高75～110mの比較的傾斜の緩やかな段丘あるいは扇状地上に埋もれている平安～室町時代の寺院跡を主とする遺構群とによって構成されている。現在、尾根上の古墳群は山林の中に遺存する。段丘あるいは扇状地部分は現在棚田として利用されているが、近年は一部宅地化している。

遺跡として周知されるようになったのは、昭和43～45年に大阪府立花園高校地歴部による客坊山尾根の分布調査によって円墳とみられる古墳が16基発見されたことによる。発見された古墳群は、１基が前方後円形の墳丘をもつものであったが、大半は横穴式石室を内部主体とする円墳とみられ、南に隣接する山畑古墳群と同様の古墳時代後期の群集墳として周知されるようになった。しかしながら、この分布調査の際には石室実測が一部古墳で行われただけで、古墳個々の特徴や出土遺物等は不明のまま残され、またその後開発の手も及ばなかったため発掘調査が行われることもなかった。

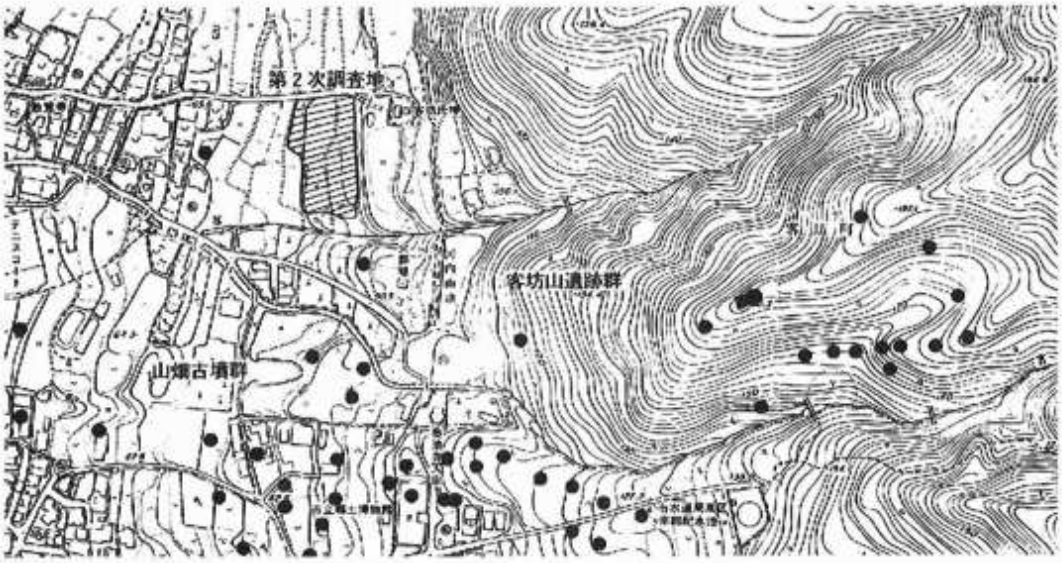
昭和60年になって河内町在住の小学生２人が客坊山中より拾った埴輪を東大阪市立郷土博物館に持って来た。２人が持って来た埴輪は、円筒埴輪で基部を欠くものの遺存状態が良好であって、古墳に樹立された状態にちかい出土状態ではないかと推測されるものであった。そして円筒埴輪そのものが鰭付きであり、野焼きで焼成されたことを示す黒斑や突出するタガ、方形の透し穴、外面タテハケメ調整など４世紀末頃の特徴をもつものであった。この埴輪を観察した郷土博物館では、ただちに出土地点を確認するため２人に案内を乞い、埴輪を採集した地点を訪ねた。その結果、埴輪出土地点は客坊尾根西端付近の標高約180m付近であり、かつて前方後円墳ではないかと指摘された客坊山３号墳の前方部裾付近であり、数日前の降雨によって表土の一部が流されて埴輪が出土したこと等を現地で確認した。こうして客坊山古墳群には小型であるが４世紀末頃の前方後円墳の存在が明らかになった。今日まで、東大阪市域で確認された古墳時代前期の前方後円墳はこの１基のみである。

いっぽう、段丘部においても客坊集落内の岡村邦夫氏宅の南側に、円墳状の墳丘と横穴式石室の入口部側壁とみられる石が数個残存し、またこの古墳から出土したとみられる凝灰岩製の組合せ式石棺底板が郷土博物館にて保管されている。この石棺は、その石材が生駒西麓の後期古墳に一般的な二上山系の石英安山岩質凝灰岩ではなく、兵庫県高砂市～加古川市に産するいわゆる「竜山石」を使用することにおいて注目に値するものである。この古墳が標高約70mの地点に存在し、また客坊墓地のなかにも１基の古墳の存在を認めることにより、標高の低い段丘部にも現在の棚田の下に石室が半壊状態で埋もれていることが推定されるようになった。

客坊山遺跡群を構成するいま一つの遺跡である寺院跡については、枚岡市史第３巻史料編に「客坊の名は古く、南山城の古刹浄瑠璃寺に伝えられる『浄瑠璃流記』には、嘉暦三年（1328）浄瑠璃寺の本堂修理が河内客坊の説法者道人教仙御坊の勧進でできたことを記し、また『大乗

1 日下遺跡
2 馬場遺跡
3 正法寺山遺跡
4 芝坊主山遺跡
5 芝ケ丘遺跡
6 和泉遺跡
7 北島遺跡
8 植附遺跡
9 辻子谷遺跡
10 法通寺跡
11 神並遺跡
12 千手寺山遺跡
13 辻子谷古墳群
14 神並古墳群
15 正興寺山遺跡
16 鬼虎川遺跡
17 西ノ辻遺跡
18 額田寺跡
19 鬼塚遺跡
20 額田山古墳群
21 みかん山古墳群
22 豊浦谷古墳群
23 出雲井古墳群
24 狐塚遺跡
25 皿池遺跡
26 河内寺跡
27 水走氏館跡
28 五条山古墳群
29 客坊山遺跡群
30 山畑古墳群
31 市尻遺跡
32 花草山古墳群
33 北島池遺跡
34 五合田遺跡
35 段上遺跡
36 下六万寺遺跡
37 縄手遺跡
38 上六万寺遺跡
39 船山遺跡
40 五里山古墳群
41 岩滝山遺跡
42 河内往生院伝承地
43 コモ田遺跡
44 池島東遺跡
45 西代遺跡
46 北屋敷遺跡
47 馬場川遺跡
48 半堂遺跡
49 只花遺跡
50 浄土寺谷古墳群

第1図　生駒西麓東大阪市域の遺跡分布図（1/25,000）



第２図　客坊山遺跡群第２次発掘調査地周辺図（1/5000）　黒印は古墳を示す

院寺社雑事記』などに記された戦国時代河内の所領をめぐる争乱にも客坊で戦の行われた記事が散見している。客坊の名はこの地に寺院の存在したことを物語るものであろう。」と記されている。これを裏付けるように、北側の水田付近より平安～室町時代の多様な屋瓦十数点と磚仏が採集されている。この寺院については、付近の旧家に残る山絵図に「法性寺」の字名がみえることから、前記した枚岡市史においては「法性寺跡」として紹介されている。

東大阪市域における同時代の寺院跡としては、河内平野中央部にある若江寺跡・巨摩廃寺跡、生駒西麓の扇状地部にある河内寺跡・法通寺跡、扇状地頂部～段丘部にある六万寺往生院、生駒山の山腹高所にある神感寺跡・興法寺などが知られている。このうち本調査の対象となる寺院跡（法性寺）と同じく平安時代に建立された寺院としては、同様の立地環境にある六万寺往生院や生駒山腹の神感寺跡や興法寺などがあげられる。これらの寺院は平安時代浄土信仰の高まりにより建立されたとされるものであり、生駒西麓において飛鳥時代に建立された河内寺や奈良時代に建立された法通寺がともに平安後期以後衰退するのと好対照をなしている。

今回の調査は、昭和62年７月に株式会社日昭興産より東大阪市教育委員会文化財課に届出られた東大阪市客坊町1065番地他の一帯2,324㎡の宅地造成計画に対し、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した結果、棚田の耕作土直下より中世の遺物が出土することを確認したため、事前に造成予定地全域の発掘調査を実施することとなったものである。調査地点は、昭和62年に別の事業者による宅地造成に伴って発掘調査が実施され、中世の掘立柱建物跡等が検出された第１次調査地の東隣となる位置にある。調査は、事業者から東大阪市教育委員会への調査依頼を受けて、現地調査を財団法人東大阪市文化財協会に委託して行うことになった。

II　発掘調査の概要

1　調査方法・地層

発掘調査地は標高78～85mを測る4段の棚田からなる。この現地形は、宅地造成工事によって大きく改変されることになるため、棚田の全面を発掘調査することになった。調査を実施するにあたっては、4段の棚田を東から西にA．B．C．Dの4地区と呼称するとともに、発掘土置場を調査地内に確保するためにA～C地区を南北に二分し、はじめに北半部のA1、B1、C1各地区を発掘したのちA～C地区の南半部のA2、B2、C2各地区とD地区を発掘することとした。発掘調査は、昭和63年5月16日に着手し、試掘結果に基づき地表下10cmまでの旧耕作土を機械掘削したのち以下を人力により掘削し、10月14日までの約5カ月にわたって遺構・遺物の検出に努めた。検出された遺構は写真撮影と国家座標系に基づき実測図作成を行った。

調査地の地層は、各地区の東部すなわち山側においては地山である黄褐色砂礫混じり粘土層が耕作土直下で現れる。これは東から西に下降する自然地形を棚田に造成する際に、地山を一部削平して平坦面を作り出したためであり、この時削り取った土砂を西側に客土として棚田が形成されている。したがって、各地区の西半部には地山層と酷似する客土が最大で2m程みられる。この客土が行われた時期は、平安時代後期に寺院が建立される際の他に、客土内に含まれる遺物の年代により室町時代にも行われたことが知られる。また、各地区の北端部では北に向って落ち込む谷地形、C地区南端部では南に向かって落ち込む谷地形がそれぞれ検出され、これらの谷地形内は拳大から人頭大の礫を含む土石流堆積物で覆われていた。

2　遺構

平安時代の瓦が多量に出土したA地区の寺院基壇の痕跡が今回調査した中では最も古い遺構と考えられる。寺院の基壇はその後西半部が崩れ、15世紀頃の大規模な整地によって削平及び礎石の移動が行われたものとみられ、基壇の裾を巡っていた石列や溝だけを残す状態となって検出された。

鎌倉時代以後の遺構としては、A2、B、C1、C2各地区で検出された柱穴や土坑等の多くが相当すると思われる。また、調査地北端の東西方向の石垣によって造り出された大規模な整地面とその上に存在した建物に伴う穴蔵等は、尋尊大僧正記に文明九年（1477）畠山義就が陥れたとされる客坊城の遺構の一部と考えられるものである。。

以上のように、検出された遺構は平安時代後期から室町時代までものが混在していると考えられるが、出土遺物等から時期を限定できる遺構は限られている。以下において、今回の調査で検出された遺構について記述するにあたっては、各地区ごとに行うこととする。

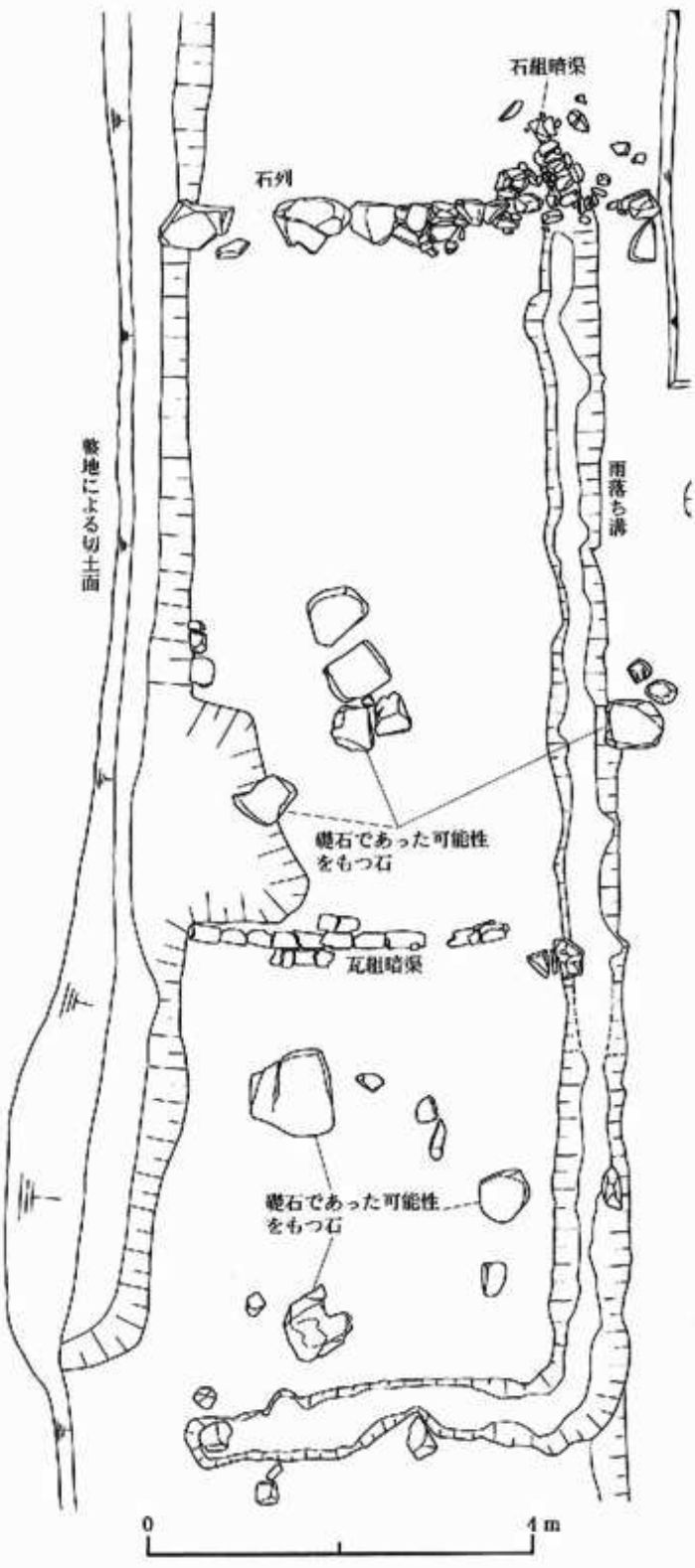
A1地区の遺構

石垣1　　一部が崩壊しているが、直径0.5～1mの石を積んで北側に面を揃えた東西方向の石垣である。A地区に寺院を建立するために石垣を築き平坦地を造成したとみられることか

ら、この石垣の築造時期は平安後期に遡る可能性がある。現状ではB地区との境で途切れているが、当初は後記する寺院基壇がのるテラスを造るためにもう少し西まで続いていたものと推定される。

石垣2　　石垣1から南に向かって築かれた石垣である。A地区とB地区の境にある現在の石垣（高さ約5m）の裏側にあって全体を発掘できなかった。石垣の規模は不明であるが、裏込め土より15世紀代の土師器皿が出土したこと及びA地区の寺院基壇を切って築かれていること等から、A地区の寺院建物が廃絶した後、15世紀になって造られたものと考えられる。

基壇跡　　石垣1の南約14mにおいて一辺0.3m前後の石を東西に並べ、石列の南側を客土により20cm程高くしたもので、この高まりは約10m南で再び一段低くなるとともに高まりの東と南には雨落ち溝とみられる溝1が取り囲んでいる。高まりの平面が長方形を呈することや高まりの上に礎石の可能性がある石が動いた状態で認められること、周辺とくにこの高まりの南側より平安後期の瓦が多数出土すること等の点を合わせ考えると、この高まりは平安時代後期にこの地に建てられた寺院建築



第3図　A1地区基壇跡実測図（1/80）

の一つの基壇の跡とみるのが適当かと考えられる。この高まりの北東角には、手のひら大の石を組合せた暗渠状の施設が認められる。この施設は雨落ち溝に接続することから、基壇東側の雨落ち溝の排水施設と考えられる。

瓦組暗渠１・２　　石垣１の南において西北西一東北東に丸瓦を伏せた状態で連ねた暗渠状の施設が検出された（瓦組暗渠１）。これと同様のものは基壇状の高まりの中央部でも東西に敷設されている（瓦組暗渠２）。これらは排水のための施設とみられるが、時期や敷設した目的等は不明である。

Ａ２地区の遺構

石組溝　　東西に伸びる幅30cmの溝。両側は面を揃えた石組をもつ。この溝の内部は瓦片により充塡されていたが、溝底には砂が堆積している。おそらく当初は石組溝として水が流れていたものとみられ、その後瓦片を詰め込んで暗渠としたのであろう。この石組溝は園池とみられる落ち込みが埋まった15世紀後半より後に築かれたものと考えられる。

落ち込み１～３　　落ち込み２は、東西約７ｍ・南北約６ｍ・深さ約50cmを測る落ち込みで、東側２カ所に東にのびる小溝、西側には瓦質の土管を埋め込んだ暗渠及び蛇行して西にのびる溝が取り付く。この蛇行する溝は土坑４につながっており、全体として園池を構成すると思われる。落ち込み東側の２溝は取水のためのもので西側の土管は排水のためのものであろう。落ち込み内の埋土より15世紀後半以前の土師器、忠実に原型を模したミニチュアの和船、卒塔婆等が出土した。

また、落ち込み２の南1.4mには小規模な落ち込み３がある。南北約2.5m・東西約2.2m・深さ約30cmを測り、坑内東肩沿いに丸瓦と平瓦を組み合わせた暗渠状施設がみられるが、この落ち込みに伴うものかどうかは不明。

いっぽう、落ち込み２の北約８ｍには南北・東西ともに４ｍ、深さ約30cmの落ち込み１があり、周辺と内部より多量の瓦が出土した。この落ち込みから西側に幅30cm・深さ30cmの小溝が長さ４ｍのびている。落ち込みの北側はさらに一段低く落ち込んでおり、Ａ１地区にかけて南北約８ｍ、東西約６ｍの範囲で周囲より一段低い平坦面を造り出している。この平坦面よりＢ地区に向かって後記する暗渠が敷設されていることから、この平坦面に何か寺院に関連する施設が存在したものと思われる。

柱穴列　　Ａ２地区南部の地山上面において南北３間の掘立柱の柱穴列が検出された。柱穴はいずれも深さ５cm程で、上部を削平されたものとみられる。この柱列に向かい合う柱列は、削平されて消失したのか、もともと存在しなかったのかは不明である。

Ｂ地区の遺構

石垣４～９　　南北方向の石垣残欠が５カ所、東西方向の石垣残欠が１カ所検出された。いずれも直径30cm～50cm前後の石を用いた小石垣であって、高さも現存状態で１ｍ以下のものである。これらの石垣は、石の大きさからみて東西の幅10m前後の小テラスを造り出すために築かれたものとみられ、各テラス面に建物が存在したものと考えられる。石垣の時期は明らかで

はないが、石垣を覆う客土の上面より柱穴が検出されていることから、寺院建立時から大規模な整地が行われる15世紀以前のものと推定される。

瓦組暗渠３と石列　　Ａ１地区の基壇状高まりの南にある一段低い平坦面の北西部より西にのびる瓦組暗渠と石列とが検出された。この施設は丸瓦を２枚上下一対としたものを連ねて土管と同様の役割をもたせた排水施設とみられ、一段低いこの平坦面に建物か何か排水を必要とする施設が存在したことを示すものである。この瓦組暗渠の西側は石列に移行するが、この石列は暗渠からの排水を西に導くために築かれたと考えられる。構築時期は、瓦組暗渠及び石列ともにＡ１地区の寺院基壇と同様に平安後期頃と考えられる。

瓦組暗渠４　　Ｂ地区南部においても、同様の丸瓦組暗渠の一部とみられるＹ字形の暗渠が検出されている。前記した瓦組暗渠３と同様の排水施設と考えられる。

瓦列　　石垣４～９を覆う客土層の上面において、平瓦を連ねた長さ６ｍの瓦列が検出された。平瓦はいずれも凸面を上にして整然と並べているが、瓦の下に暗渠となる隙間がないため用途が何かは明らかでない。時期は、第２次整地が行われた15世紀頃のものとみられる。

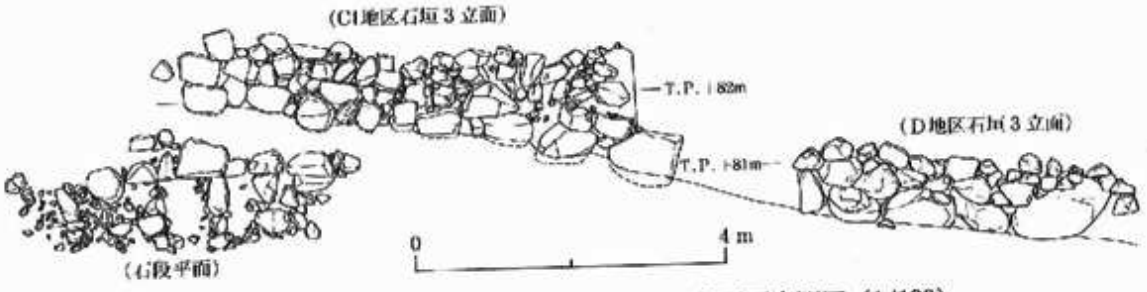
柱穴群　　Ｂ地区南部において、地山上を遺構面として多数の柱穴が検出され、南北・東西ともに４間の柱通りが復原される。これらの柱通りは、柱間が１ｍ以下と短く、また南北方向東西方向の柱列に向き合う側の柱列が検出されていない。したがって、これらの柱通りが建物の跡と断定することはできない。時期は、平安後期から15世紀までの間と考えられる。

土坑５　　南北方向柱通りの南において1.5×1.1ｍの楕円形で深さ約20㎝の土坑が検出された。坑内より14世紀初めの瓦器片が出土した。

火葬土坑と蔵骨器　　掘立柱の東西方向柱通りの北約２ｍの地点において、直径約50㎝・深さ約15㎝を測る円形土坑を検出した。坑内には多量の炭に混じって焼けた人骨細片多数と帯金具の破片、サイコロ等が含まれれており、その状態より別の場所で火葬され、人骨を取り上げたのち炭・灰と身につけていたもの等を埋めた遺構と考えられる。この火葬土坑の北約10ｍでは、平安時代の土師質蔵骨器が埋納され、なかに火葬人骨片と炭とが充填されていた。

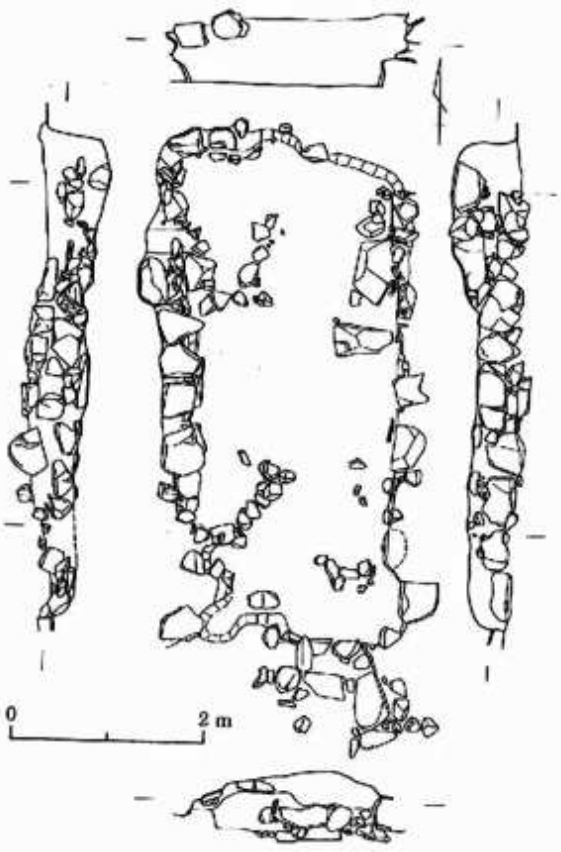
Ｃ１地区の遺構

石垣３と石段　　調査地北部において北側に面をもつ東西方向の石垣が検出された。石垣に使用された石は大きいもので一辺約１ｍを測ることから、この石垣は西に下降する斜面にかな



第４図　Ｃ１地区・Ｄ地区石垣３実測図及びＣ１地区石段平面実測図（1/100）

り大規模な平坦面を造るために築かれたものと考えられる。このことを示すように、この石垣は現状では1段下の棚田であるD地区でも続きが上部を削平された格好で検出されており、さらに調査地外へと続いている。したがって、この石垣によって造り出される平坦面は東西に15m以上となり、石垣本来の高さはD地区西端で約3～4mを測るものであったとみられる。また、この石垣北側の西に下降する斜面には、石垣沿いに石段が設置されている。この石段は谷筋に沿って道があったことを示すものである。石垣と石段の時期は、D地区の石垣南側の客土内よりまとまって出土した土師器小皿の型式より15世紀と考えられる。

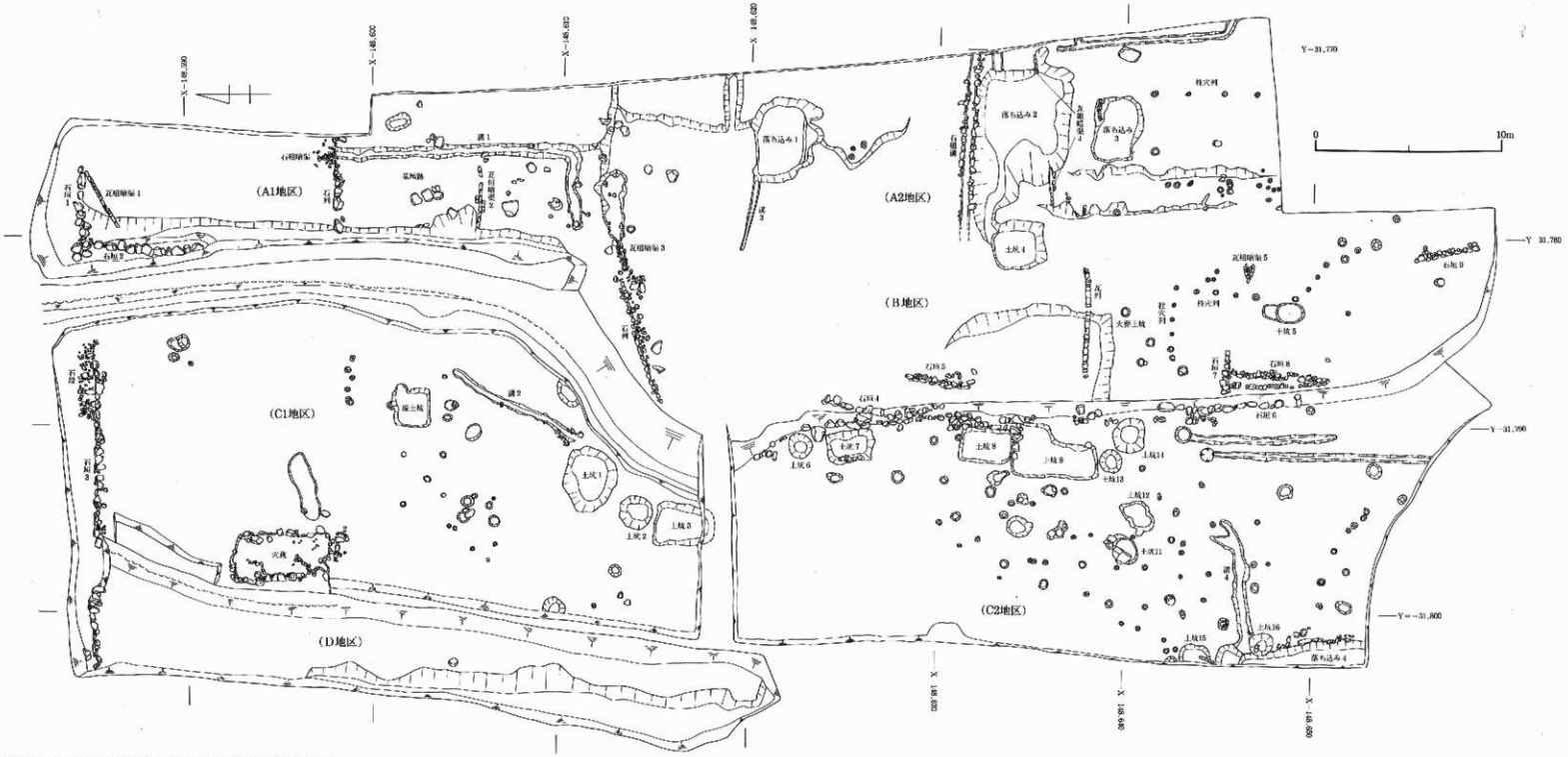


第5図　C1地区穴蔵実測図（1/80）

穴蔵　　石組の地下貯蔵庫とみられ、南北約5m・東西約2m・深さ約70cmを測る。壁面は東・西・南が石積みで、北壁のみ土壁の状態である。床面も客土を掘込んだそのままの状態であり、客土内に含まれる大きな自然石が下から突出した状態で残されている。穴蔵の中には建物上屋の瓦や竹格子やスサ入りの壁土が焼けた状態で落ち込んでいた。これらは火災によって建物上屋が焼け落ちたことを示すものと思われる。同時に、穴蔵内の壁面も焼けていること、貯蔵物とみられる多量の炭化米の存在等からみて、火災は穴蔵内においても相当な火勢であったことが知られる。あるいは貯蔵物の中に油等の燃えやすいものが含まれていたのかもしれない。この穴蔵の使用されていた時期は、床面より出土した土師器小皿の型式と輸入銭貨（永楽通宝）の鋳造年代（初鋳1408年）より15世紀と考えられ、文献に室町時代文明九年（1477）に畠山義就が陥れたとされる「客坊城」の施設の一部として、兵糧等を貯えていたものと推定される。

柱穴群　　穴蔵の南東のC1地区南部において掘立柱のものとみられる柱穴が多数検出された。柱穴が検出された一帯の旧地形は、北東から南西にのびる尾根筋で、この尾根はC1地区東半部では15世紀頃の整地により削平され、同地区西半部では客土に覆われて旧地形を残している。これらの柱穴群はこの尾根の旧地形上に検出されたことから、その時期は、穴蔵を伴う客坊城の建物が建てられる以前とみられ、柱穴内に13世紀から14世紀初めまでのものとみられる瓦器片を含むものがあるため、鎌倉時代のものと思われる。

焼土坑　　一辺約2m・深さ約13cmの方形を呈する土坑。坑壁及び坑底に焼土、内部に炭化



第6図　客坊川遺跡群第2次発掘調査地平面実測図（1/200）

材が堆積するもの。時期は、出土遺物より15世紀と考えられる。

土坑１～３　　土坑１は南北３ｍ・東西3.4ｍ・深さ45㎝、土坑２は直径1.8ｍ・深さ45㎝。ともに円形を呈する。土坑１は北側に小溝が接続しており、この溝によって水を坑内に引き入れていたものと思われる。土坑３は南北約３ｍ・東西2.4ｍの長方形で、深さ47㎝を測る。時期は、出土遺物よりいずれも15世紀と考えられる。

Ｃ２地区の遺構

柱穴群　　Ｃ１地区で柱穴群を検出した小尾根の南約10ｍの幅で凹地があり、その南に存在する別の小尾根において柱穴群を検出した。柱穴の数はＣ１地区の柱穴群よりも多い。これらの柱穴から復原できる柱通りの方向に、穴蔵の側壁と同じ南北方向を指すものがあることから、建物には15世紀の客坊城の時期のものが含まれていると思われる。

土坑６～16　　長方形や円形を呈するものである。長方形の土坑には肩部の一部に石列をもつ（土坑７～９）が、その性格は明らかでない。

溝４　　幅60㎝・深さ20㎝で東西に７ｍのび、西端の落ち込み４に達する。時期は、14世紀初めの土坑16によって溝が切られていることから、それ以前のものとみられる。

落ち込み４　　西南部にその一部を検出したが、大部分は調査地外にあるため、規模は不明である。東肩部に石列、北肩部に瓦組暗渠の一部を検出したが、性格は不明である。

Ｄ地区の遺構

石垣３　　Ｃ１地区より続く石垣で、用いられる石は西に向かうにつれて大きいものが使用されている。これは石垣の高さが西へ行くほど高くなるためである。現状では棚田造成時に上部が削平され、高さ1.5ｍ程しか残されていないが、もとは西端部で高さ４ｍを越える大規模な石垣であったと推定される。現在、Ｃ地区との境は石垣３の石が抜き取られた後、棚田の崖面を保護するための新しい石垣が南北に横断して築かれている。

土器溜りと客土層　　石垣の南側の客土内より15世紀代の土師器小皿が集積されて捨てられた状態で出土した。これらは人為的に集積され、その上を土で覆ったものとみられる。このことから、15世紀にＣ１地区からＤ地区にかけて広い平坦面を造る造成工事が行われたことが知られるとともに、客土の途中でこれらの土器を使った儀礼が行われたものと考えられる。

表１　土坑計測値一覧表

番　号	平面形	計　測　値	時　期	番　号	平面形	計　測　値	時　期
土坑１	円　形	3.0×3.4m　深さ45㎝	15C	土坑９	長方形	4.6×2.8m　深さ40㎝	13C
土坑２	円　形	1.8×1.8m　深さ45㎝		土坑10	円　形	1.4×1.1m　深さ20㎝	
土坑３	長方形	3.0×2.4m　深さ47㎝	15C	土坑11	円　形	1.4×1.4m　深さ72㎝	15C
土坑４	方　形	2.8×2.7m　深さ50㎝		土坑12	－	2.1×1.4m　深さ23㎝	13C
土坑５	楕円形	1.5×1.1m　深さ20㎝	15C	土坑13	円　形	1.2×1.2m　深さ55㎝	15C
土坑６	円　形	1.3×1.3m　深さ68㎝	15C	土坑14	円　形	1.7×1.7m　深さ80㎝	15C
土坑７	長方形	2.6×1.6m　深さ50㎝	15C	土坑15	－	1.7×(0.9m)深さ22㎝	13C
土坑８	長方形	2.8×1.8m　深さ30㎝	13C	土坑16	円　形	1.3×1.2m　深さ60㎝	13C

Ⅲ 出土遺物

今回の調査では縄文時代～中世期の遺物が遺構および遺物包含層より出土した。土器、石器、骨製品、木製品、金属製品、土製品、瓦などがある。以下、各製品ごとに説明を記したい。

1．土器（第7～38図）

土器は弥生時代～歴史時代のものがある。遺構や遺物包含層より出土した。歴史時代の土器の一部はタイプごとに説明を記す。

土師器羽釜（A～Fタイプ）

A1タイプ(387)　球形の体部より口縁部がく字形に外反する。口縁端部は内側へ巻き込むように肥厚する。鍔は長く伸びる。

A2タイプ(402)　A1より体部の張りが少ない。口縁部のヨコナデ調整が強く、外面に稜が残るものが多い。器壁は薄い。鍔は短く、断面が台形を呈する。

A3タイプ(404)　形態はA1と同様であるが、鍔がさらに短くなり断面が三角形を呈する。

B1タイプ(408)　張りの大きい体部より口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。鍔は短く伸びる。

B2タイプ(414)　形態はB1と同様であるが、口縁部が短く外反する。口縁部と体部の内面には稜があるものが多い。鍔は長く伸びる。大形のものも多い。

B3タイプ(416)　内傾する体部より口縁端部が内外に肥厚する。鍔は長く伸びる。

Cタイプ(424)　体部の張りは少なく、口縁部が強く外下方へ折れ曲がる。口縁部が体部につものが多い。鍔は短く伸び、断面が台形を呈する。一部、三角形のものもある。器壁は薄い。

Dタイプ(433)　張りの少ない体部より口縁部が内傾し、面を持つ。口縁端部は丸く終わる。鍔は長く伸びる。器壁は薄い。

Eタイプ(441)　口縁部が内傾した後、さらに下方に折れ曲がる。口縁端部は内傾した面を持つ。鍔は長く伸びる。器壁は薄い。

Fタイプ(442)　体部が外上方へ伸び口縁部に至る。口縁端部は面を持つ。鍔は口縁端部直下に短くつく。器壁は厚い。

ミニチュア羽釜(211)　張りの少ない体部より口縁部が上方に伸びる。口縁端部は丸く終わる。鍔は短い。つくりは粗雑である。

瓦器羽釜（A・Bタイプ）

Aタイプ(149)　張りの少ない体部より口縁部が内傾する。口縁端部は面を持つ。鍔は長く伸びる。口縁部に数条の段をもつ。

Bタイプ(628)　張りの少ない体部より口縁部が内傾する。口縁端部は面を持つ。鍔は短く伸びる。

ミニチュア羽釜(144)　体部は下で大きく張り、口縁部が内傾する。口縁端部は丸く終わる。鍔は短く、断面が三角形を呈する。体部の3ヶ所に脚がつく。

須恵器捏鉢（A～Cタイプ）

Aタイプ(695)　平底の底部より体部が外上方に伸び口縁部に至る。口縁端部は面をもつ。底部は糸切り底である。内外面は回転ナデ調整する。東播系である。

Bタイプ(699)　形態や調整法はAと同様であるが、口縁端部を上方へ拡張し面をもつ。

Cタイプ(704)　形態や調整法はAと同様であるが、口縁端部を上下へ拡張しBより幅広の面をもつ。

信楽焼捏鉢（A・Bタイプ）

Aタイプ(685)　体部が外上方に伸び口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味に終わる。内外面は回転ナデ調整する。

Bタイプ(686)　形態や調整法はAと同様であるが、口縁部が短く外反する。

備前焼摺鉢（A～Cタイプ）

Aタイプ(678)　体部が外上方へ伸び口縁部に至る。口縁端部は面をもつ。内外面は回転ナデ調整する。内面に摺り目を施す。

Bタイプ(680)　形態や調整法はAと同様であるが、口縁端部を上方へ拡張し、幅広の面をもつ。断面が三角形を呈する。

Cタイプ(682)　形態や調整法はAと同様であるが、口縁端部をBよりさらに上方へ拡張し、幅広の面をもつ。

瓦器摺鉢（A・Bタイプ）

Aタイプ(706)　平底の底部より体部が外上方に伸び口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。体部外面はナデ調整し、指頭圧痕が残る。内面に摺り目を施す。

Bタイプ(708)　体部は外上方に伸び口縁部に至る。口縁端部は上方へ拡張し幅広の面をもつ。体部外面はヘラケズリ調整する。内面に摺り目を施すが、Aより本数が多い。

瓦器椀（A～Cタイプ）

A1タイプ(522)　体部は深く、高い貼りつけ高台がつく。口縁端部は丸く終わる。体部内面は密なヘラミガキ調整、外面は指オサエの後やや粗いヘラミガキ調整する。見込み部は斜格子や三角形の暗文を施す。

A2タイプ(527)　A1より体部はやや浅く、高台も低くなる。体部内面は密なヘラミガキ調整、外面は体部が指オサエで終わり、口縁部のみをヘラミガキ調整する。見込み部は斜格子や平行線の暗文を施す。

A3タイプ(530)　A2より体部はさらに浅くなる。高台は低く、一周せづに終わるものもある。体部内面は粗いヘラミガキ調整、外面は指オサエで終わる。見込み部は平行線の暗文を施す。

A4タイプ(540)　形態はA4と同様である。見込み部の暗文は消失し、体部内面に螺旋状の

ヘラミガキを施す。

A５タイプ(542)　A４より体部はさらに浅くなり、皿状を呈する。高台は消失する。体部内面に螺旋状のヘラミガキを施す。

A６タイプ(549)　形態はA５と同様であるが、体部内面のヘラミガキが消失する。

B１タイプ(552)　体部は深く、高い貼りつけ高台がつく。口縁端部は丸く終わる。口縁端部の内側に１条の沈線を施す。体部内面は密なヘラミガキ調整、外面はやや粗い分割のヘラミガキ調整する。見込み部に平行線、格子、ジグザグの暗文を施す。

B２タイプ(556)　B１より体部はやや浅く、高台も低くなる。体部内面はやや密なヘラミガキ調整、外面は体部が指オサエで終わり、口縁部をヘラミガキ調整する。見込み部は渦巻き状の暗文を施す。

B３タイプ(560)　形態はB２とほぼ同様であるが、高台が１周せづに終わるものもある。内外面のヘラミガキ調整はさらに粗い。

B４タイプ(563)　体部の深い小形の椀である。高台はつかない。口縁端部の内側に１条の沈線を施す。体部外面は指オサエ、内面は渦巻き状のヘラミガキを施す。

Cタイプ(567)　体部は深く、高い貼りつけ高台が二重につく。口縁端部に１条の沈線を施す。体部内面は密なヘラミガキ調整、外面はやや粗い分割のヘラミガキ調整する。見込み部にX状、ジグザグ、放射状、斜格子の暗文を施す。

瓦器小椀（A・Bタイプ）

A１タイプ(609)　瓦器椀Aの小形のものである。やや皿に近い体部に貼りつけ高台がつく。口縁端部は丸く終わる。体部内面は密なヘラミガキ調整、外面はやや粗いヘラミガキ調整する。見込み部は斜格子の暗文を施す。

A２タイプ(610)　形態はA１と同様であるが、体部外面はヘラミガキ調整しない。見込み部は斜格子の暗文を施す。

A３タイプ(611)　形態はA１と同様であるが、体部内外面はヘラミガキ調整しない。見込み部は平行線の暗文を施す。

Bタイプ(616)　瓦器椀Bの小形のものである。深い体部にはりつけの高台がつく。口縁端部の内側に１条の沈線を施す。体部内面は密なヘラミガキ調整、外面はやや粗いヘラミガキ調整する。見込み部にジグザグの暗文を施す。

瓦器皿（A・Bタイプ）

A１タイプ(574)　体部は深く、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内外面は密なヘラミガキ調整する。見込み部はジグザグの暗文を施す。

A２タイプ(576)　形態はA１と同様であるが、体部外面はヘラミガキ調整しない。見込み部は斜格子、ジグザグの暗文を施す。

A３タイプ(578)　A１より体部は浅く、小形である。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は丸

く終わる。体部内面はナデ調整、外面は指オサエする。見込み部は平行線、ジグザグの暗文を施す。

A4タイプ(596)　形態はA3と同様である。体部内面を渦巻き状などのヘラミガキ調整、外面は指オサエする。

A5タイプ(600)　形態・調整法はA3と同様であるが、見込み部の暗文が消失する。

Bタイプ(311)　Aより大形の皿である。体部は浅く、口縁端部が丸く終わる。体部内面はハケメ調整かナデ調整、外面は指オサエする。

瓦器甕（A～Cタイプ）

Aタイプ(670)　張りのある体部より口縁部が大きく外反する。口縁端部は面をもつ。体部内面はハケメ調整かナデ調整、外面はタタキ調整する。

Bタイプ(672)　張りのある体部より口縁部が短く外反する。口縁端部は丸く終わる。体部外面は調整法不明、外面はタタキ調整する。

Cタイプ(8)　口縁部が大きく外反し、口縁端部が段をもつ。

瓦器火舎（A～Fタイプ）

A1タイプ(650)　体部は外上方に伸びた後、内傾し口縁部に至る。口縁端部は面をもつものが丸く終わるものがある。体部外面に菊花状のスタンプ文を施す。

A2タイプ(652)　形態はA1と同様であるが、文様を施さない。

Bタイプ(657)　口縁部は大きく内傾し、口縁端部が幅広の面をもつ。体部外面に2条の凸帯を貼りつけて文様帯とする。文様帯間にスタンプ文を施す。体部に孔を穿つ。

Cタイプ(112)　体部は深く、口縁部が内傾する。口縁端部は面をもつ。体部に円孔を穿つ。文様は施さない。

Dタイプ(663)　体部が外上方に伸び、口縁部に至る。口縁端部は面をもつ。底部の3ケ所に瘤状の脚がつく。文様は施さない。

Eタイプ(664)　口縁部が水平方向に外反する。口縁端部は面をもつ。口縁部に2条の凸帯を貼りつけて文様帯とする。文様帯間にスタンプ文を施す。

Fタイプ(42)　張りのある体部より口縁部が上方にのびる。口縁端部は面をもつ。口縁部にスタンプ文を施す。風炉と考えられる。

瓦器香炉（A・Bタイプ）

Aタイプ(668)　体部は浅く、口縁部が短く上方へ伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。文様は施さない。

Bタイプ(4)　筒状を呈する体部より、口縁部が強く外反する。口縁端部は丸く終わる。底部の3ケ所に瘤状の脚がつく。体部外面にスタンプ文を施す。

瓦器深鉢（A・Bタイプ）

Aタイプ(675)　体部が筒状を呈し、口縁部に至る。口縁端部は面をもつ。

Bタイプ(676)　形態はAと同様である。体部外面に2条の凸帯を貼りつけて文様帯とする。

文様帯間に菊花状のスタンプ文を施す。

青磁碗（A・Bタイプ）

Aタイプ(94)　体部が外上方に伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。底部は高い高台を削りだす。内外面は回転ナデ調整する。体部内面や見込み部に文様を施すものもある。

Bタイプ(742)　体部が外上方に伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。底部は高い高台を削りだす。内外面は回転ナデ調整する。体部外面に蓮弁文を施す。

白磁碗（A～Cタイプ）

Aタイプ(755)　体部が外上方に伸び、口縁部がゆるく外反する。口縁端部は丸く終わる。体部内面に沈線がある。内外面は回転ナデ調整する。

Bタイプ(752)　体部が外上方に伸び、口縁部に至る。口縁端部は下方に肥厚する。体部内面に沈線がある。内外面は回転ナデ調整する。

Cタイプ(756)　体部が上方に伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

白磁皿（A・Bタイプ）

Aタイプ(758)　体部が大きく外上方に伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。底部に高台を削りだす。内外面は回転ナデ調整する。

Bタイプ(766)　平底の底部より体部が外上方に伸び、口縁部に至る。口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

常滑焼甕（A・Bタイプ）

Aタイプ(723)　体部が大きく張り、口縁部が短く外反する。口縁端部は面はもつが、やや尖り気味に終わる。体部外面にスタンプ文を施す。

Bタイプ(724)　頸部が筒状を呈し、口縁部が短く外反する。口縁端部は拡張し、幅広の面をもつ。

備前焼甕（A・Bタイプ）

Aタイプ(721)　体部が大きく張り、口縁部が強く外反する。口縁端部は面をもつ。

Bタイプ(99)　体部がやや張り、口頸部が上方に伸びる。口縁端部は肥厚し、玉縁状を呈する体部に櫛描文を施すものもある。

遺構出土の土器

A1地区瓦溜1（第7図）

瓦器、土師器、白磁が出土した。瓦器はAタイプの擂鉢(1・2)、Bタイプの火舎(3)、Bタイプの香炉(4)がある。土師器は体部がラッパ状を呈する皿(5・6)がある。白磁は底部(7)ある。

A1地区瓦溜2（第7図）

瓦器、青磁、土師器が出土した。瓦器はCタイプの甕(8)、Aタイプの羽釜(9)、Bタイプ

の深鉢(10)、A2タイプ(11)とBタイプ(12)の火舎、A3タイプの椀(13)、A3タイプの皿(14～15)がある。青磁は底部(16)がある。土師器は皿があり、体部が外上方に短く伸びるもの(17～21)、ラッパ状を呈するもの(22・23)、口縁端部を巻き込むもの(24)がある。

A2地区石組溝（第7図）

土師器皿(25～27)があり、体部がラッパ状を呈する。

A2地区溝3（第7図）

土師器と瓦器が出土した。土師器は体部が短く外上方に伸びる皿(28～31)がある。瓦器はA3タイプの皿(32)とBタイプの椀(33・34)がある。

A2地区落ち込み2（第8図）

瓦器と土師器が出土した。瓦器は椀、火舎、擂鉢がある。椀はB2タイプのもの(35)、B3タイプのもの(36)、A3タイプのもの(37～39)、A4タイプ(40)がある。37は内面を密なハケメ調整する。土師器は皿(36～59)があり、体部がラッパ状を呈する。

B地区火葬土坑（第9図）

土師器の壺(60)が出土した。体部はやや張り、口縁部が上方に伸びる。口縁端部は丸く終わる。体部内外面はナデ調整する。

B地区土坑5（第9図）

土師器皿(64～66)があり、体部が短く外上方に伸びる。

B地区瓦溜（第9図）

土師器と瓦器が出土した。土師器は体部がラッパ状を呈するもの(64)、体部が短く上方に伸びるもの(65・66)がある。瓦器はA2タイプの火舎と椀がある。椀はCタイプのもの(68)、B1タイプのもの(69・70)、Bタイプのもの(71)がある。

B地区落ち込み5（第9図）

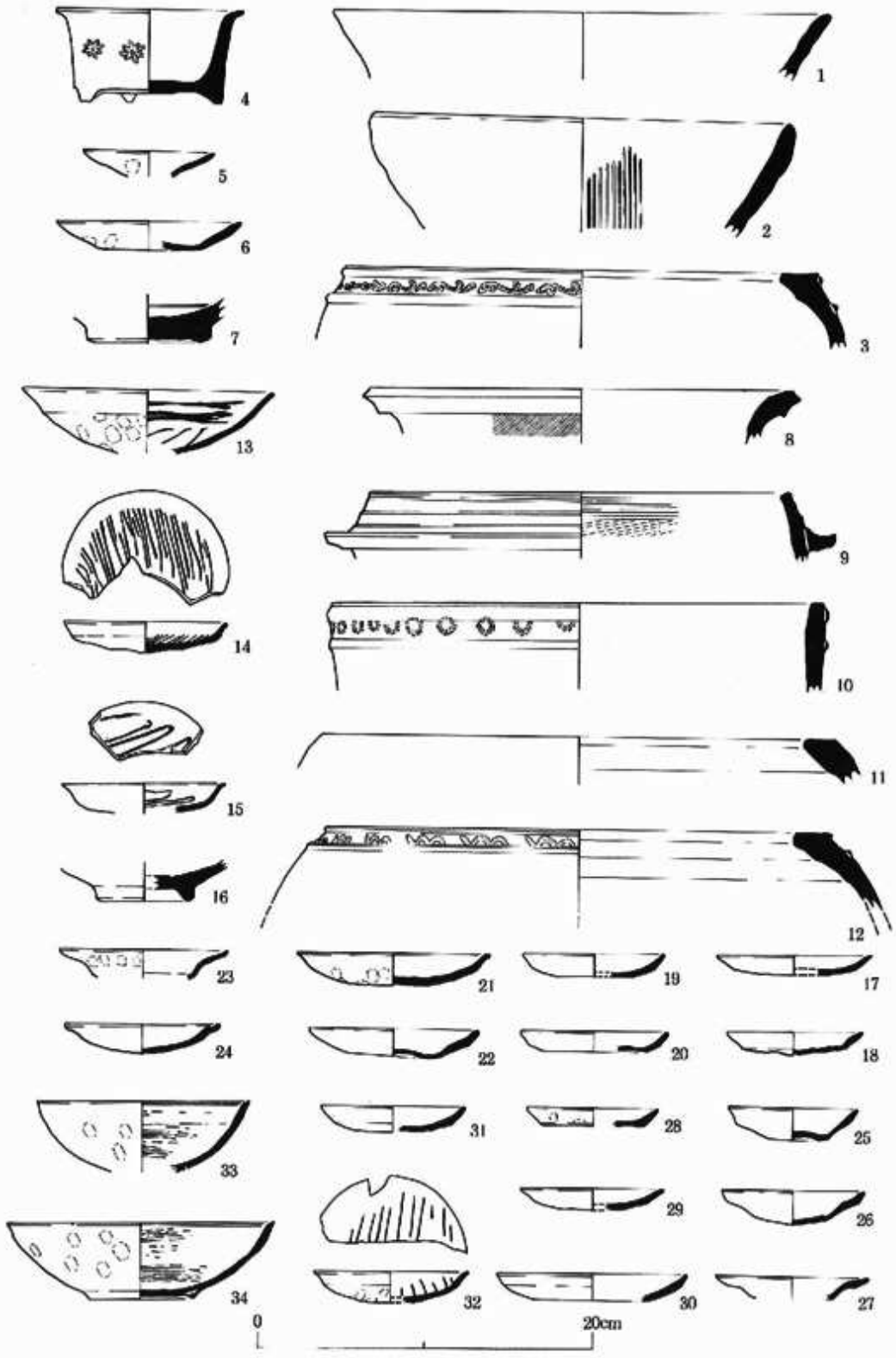
土師器、須恵器、瓦器出土した。土師器は体部が短く上方に伸びる皿(72～76)がある。須恵器はBタイプの捏鉢(77)がある。瓦器はA3タイプの皿(78)とBタイプの椀(79)がある。

C1地区焼土坑（第9図）

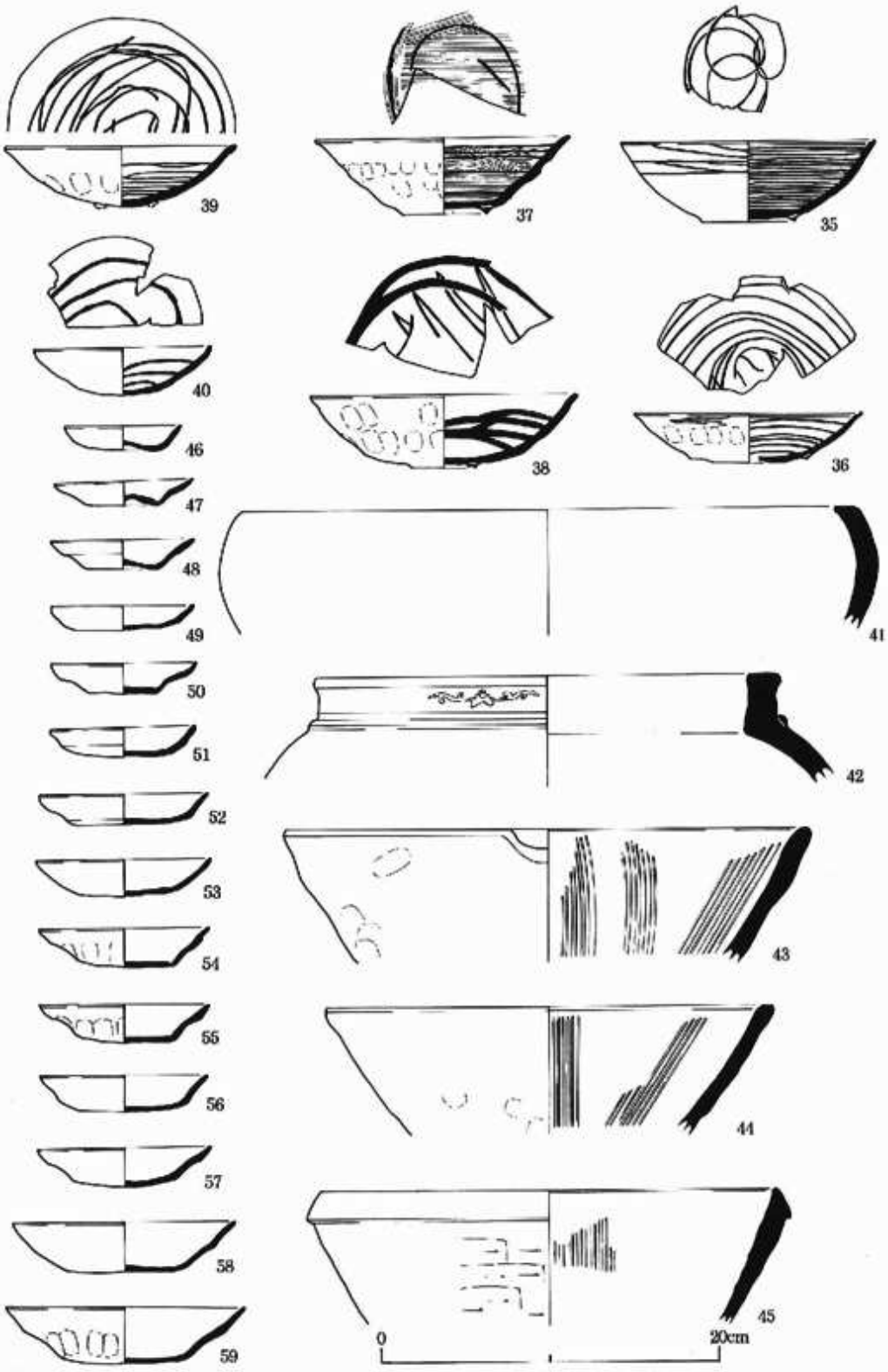
土師器、瓦器、陶器が出土した。土師器は体部がラッパ状を呈する皿(80～85)がある。瓦器はA3タイプの皿(86)、Aタイプの羽釜(87)、Bタイプの擂鉢(88・89)がある。陶器は瀬戸・美濃焼の折り縁皿(90)がある。平底の底部より体部が大きく外上方に伸び、口縁部が強く外反する。内外面は回転ナデ調整する。

C1地区穴蔵（第10図）

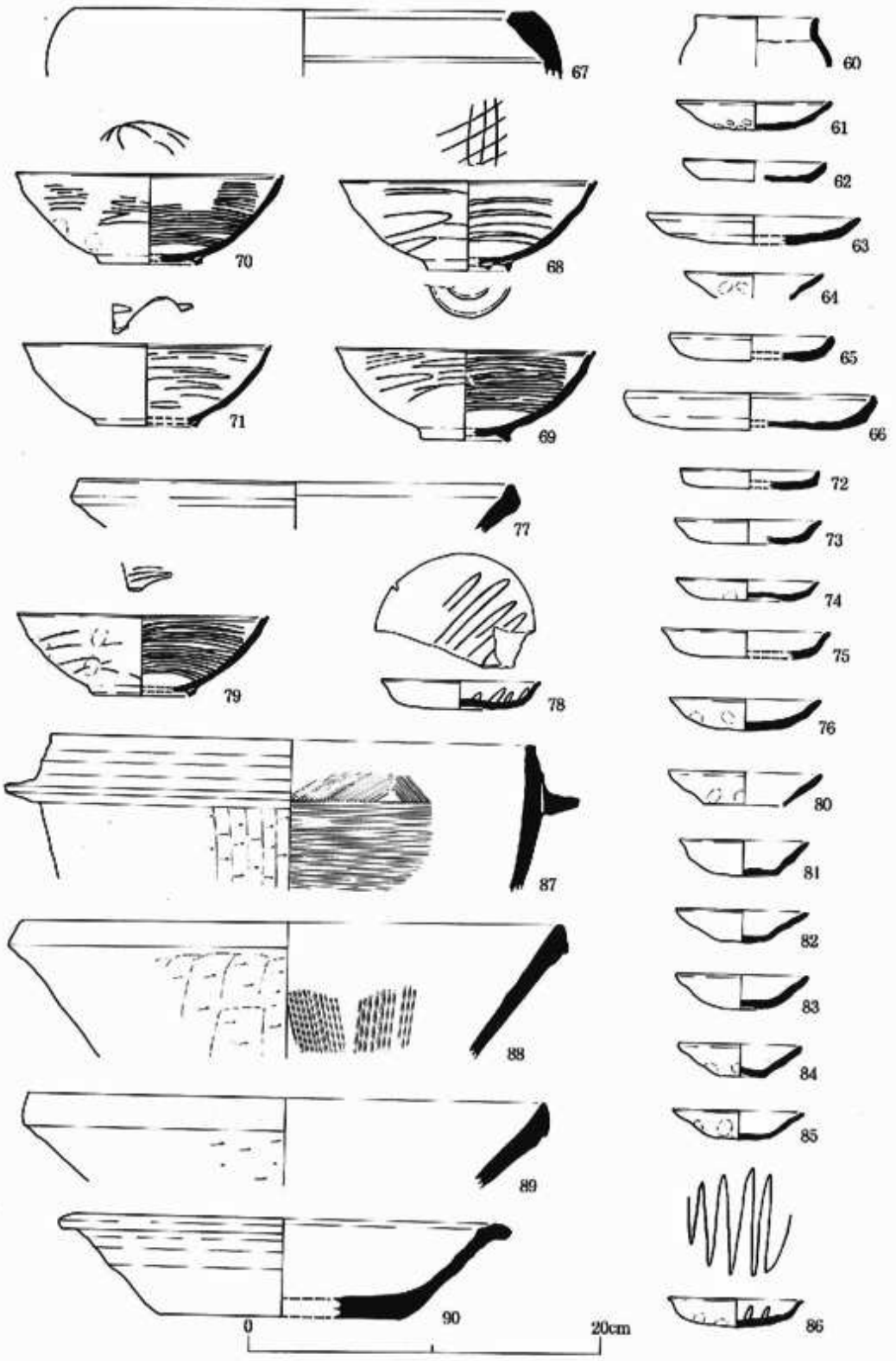
青磁、白磁、陶器、土師器、瓦器が出土した。青磁は碗があり、Aタイプのもの(91～94)とBタイプのもの(95・96)がある。94は見込み部に花の文様を施す。白磁は底部(97)と皿(98)がある。陶器は備前焼の甕(99・100)がある。100は体部に2帯の櫛描直線文を施す。土師器は体部がラッパ状を呈する皿(101～109)とA3タイプの羽釜(110)がある。瓦器は火舎があり、A2タイプのもの(111)とCタイプのもの(112)がある。



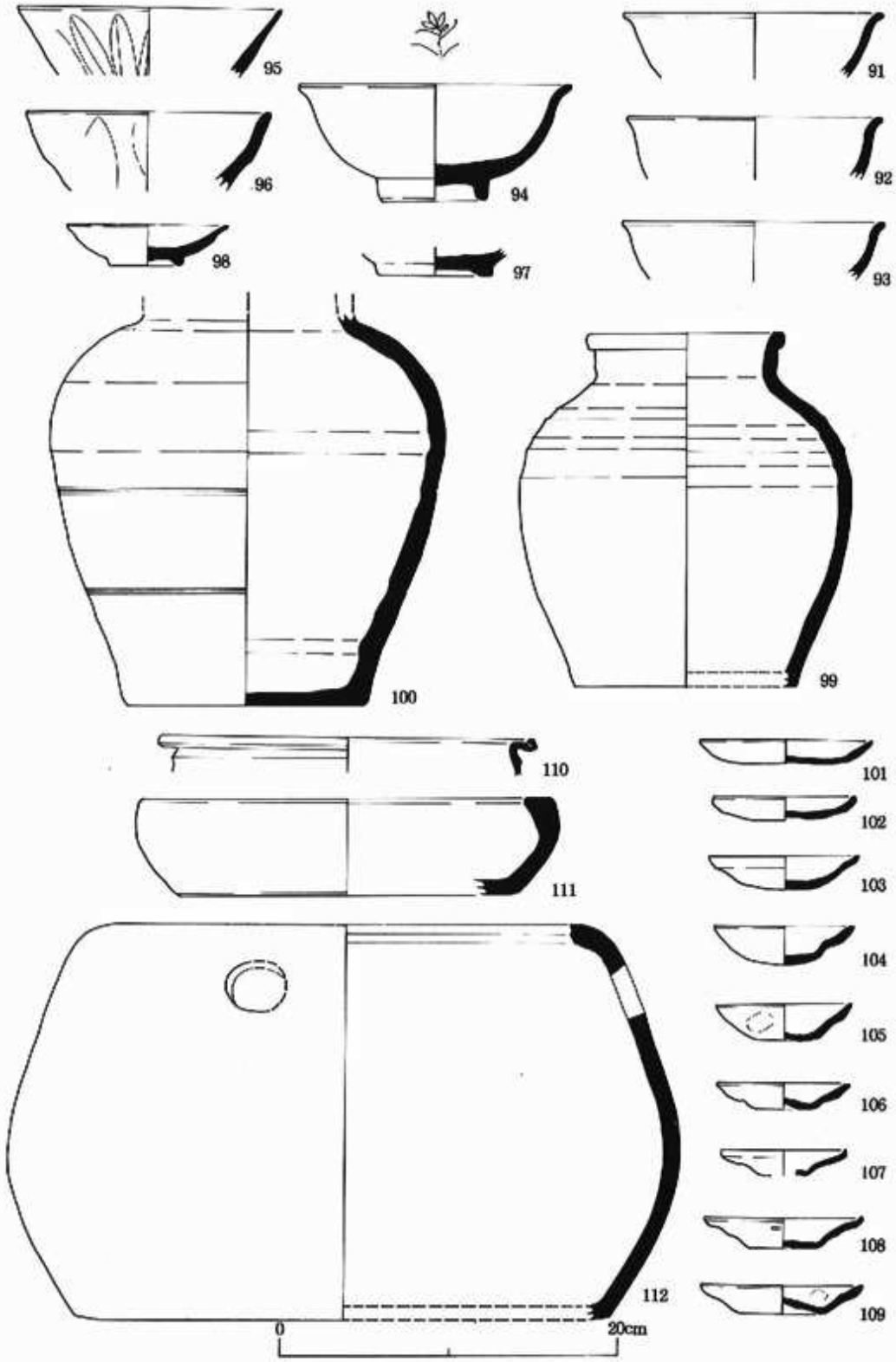
第7図　A1地区瓦溜1・2、A2地区石組溝・溝2出土土器実測図



第8図　A２地区落ち込み２出土土器実測図



第９図　Ｂ地区火葬土坑・土坑５・瓦溜・落ち込み５、Ｃ１地区焼土坑山土土器実測図



第10図　C１地区穴蔵出土土器実測図

C１地区土坑17（第11図）

瓦器と土師器が出土した。瓦器はＡ１タイプの椀(113～116)とＢタイプの摺鉢(117)がある。土師器は体部が短く上方に伸びるもの(118・119・121～129)と体部がラッパ状を呈するもの(120)がある。

C２地区土坑11（第11図）

瓦器と土師器が出土した。瓦器は摺鉢があり、Ａタイプのもの(130)とＢタイプのもの(131～134)がある。土師器は皿があり、体部が短く上方に伸びるもの(135)、体部が段がつくもの(136・137)、体部がラッパ状を呈するもの(138～143)がある。

C２地区土坑６（第12図）

瓦器と土師器が出土した。瓦器はミニチュア羽釜(144)、Ａタイプの羽釜(148・149)、体部が外上方に伸びる鉢(150)がある。土師器は体部がラッパ状を呈する皿(145～148)がある。

C２地区土坑９（第12図）

瓦器と土師器が出土した。瓦器はＡ５タイプの椀(151)がある。土師器は皿があり、体部がラッパ状を呈するもの(152～154)と体部に段がつくもの(155)がある。

C２地区土坑16（第12図）

土師器と瓦器が出土した。土師器は皿があり、体部が短く上方に伸びるもの(156～160・165)と体部に段がつくもの(161～164)がある。瓦器は椀があり、Ａ２タイプのもの(166～168)、Ａ３タイプのもの(169)、Ａ５タイプのもの(170～172)、Ｂ２タイプのもの(173～175)がある。

C２地区落ち込み４（第13図）

瓦器、土師器、須恵器が出土した。瓦器は椀と皿がある。椀はＢ２タイプのもの(176～184)、Ａ３タイプのもの(185～187)、Ａ５タイプのもの(188)がある。皿はＡ２タイプのもの(189)、Ａ３タイプのもの(190)、Ａタイプのもの(191)がある。土師器は皿とミニチュア羽釜(211)がある。皿は体部に段をもつもの(192～194)、体部が短く上方に伸びるもの(195～208)、体部がラッパ状を呈するもの(209・210)がある。須恵器は捏鉢があり、Ｂタイプのもの(212)とＡタイプのもの(213)がある。

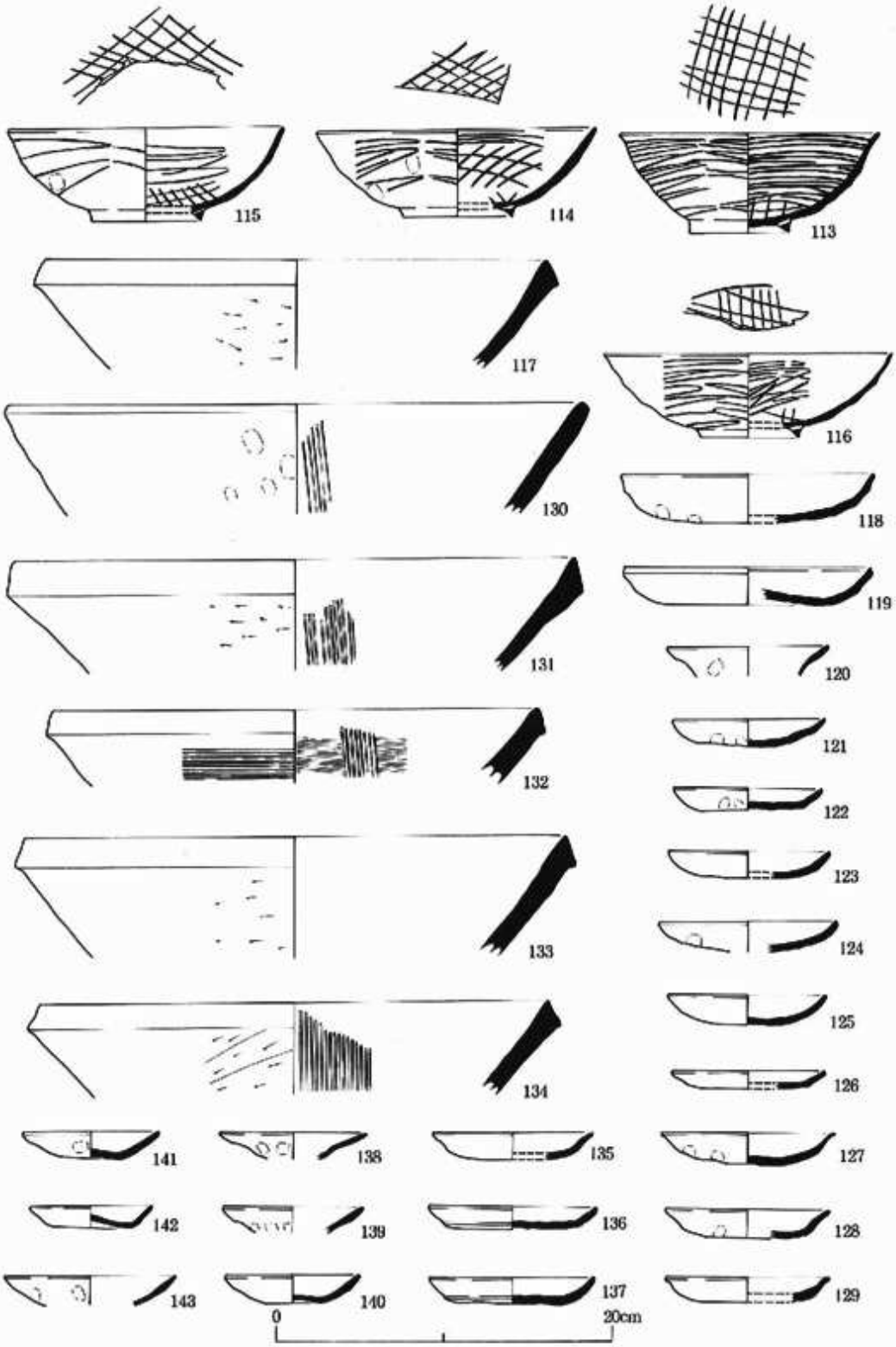
C２地区土坑８（第14図）

青磁、瓦器、須恵器、土師器が出土した。青磁はＡタイプの碗(214)がある。瓦器はＡタイプの摺鉢(215)がある。須恵器はＣタイプの捏鉢(216)がある。土師器は皿があり、体部がラッパ状を呈するもの(217～220)、体部が短く上方に伸びるもの(221・222)がある。

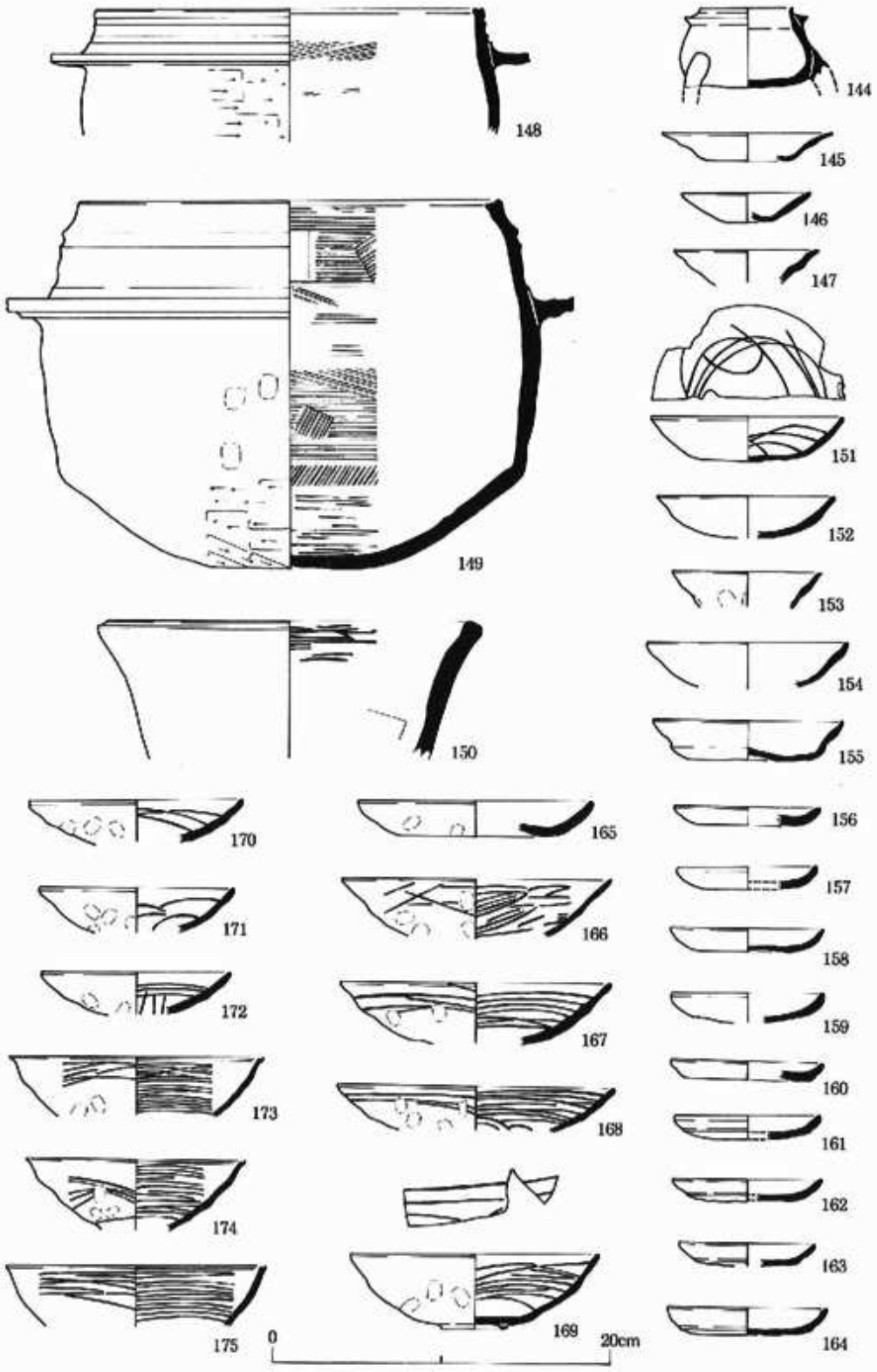
C２地区土坑15（第14図）

瓦器、土師器、須恵器が出土した。瓦器は椀があり、Ｂ２タイプのもの(223・224)、Ｂ３タイプのもの(225)、Ａ３タイプのもの(226)がある。土師器は皿があり、体部がラッパ状を呈するもの(227)、体部が短く上方に伸びるもの(228～233)がある。須恵器はＢタイプの捏鉢(234)がある。

C２地区土坑14（第14図）



第11図　C１地区土坑17、C２地区土坑11出土土器実測図



第12図　C２地区土坑６・９・16出土土器実測図

土師器と陶器が出土した。土師器は皿があり、体部が短く上方に伸びるもの(235～237)、体部がラッパ状を呈するもの(238)がある。陶器は底部がある。内面をハケメの後ヘラケズリ調整、外面をハケメ調整する。

C１地区溝１（第14図）

土師器、須恵器、瓦器が出土した。土師器は壺と皿がある。壺(240)は球形の体部より口縁部が短く外反する小形のものである。皿は体部が短く上方に伸びるもの(241)、体部がラッパ状を呈するもの(242～247)がある。須恵器はＢタイプの捏鉢(248)がある。瓦器はＡタイプの深鉢(249)がある。

D地区土器溜（第15図）

土師器と瓦器が出土した。土師器は皿があり、体部が短く上方に伸びるもの(250～256)、体部がラッパ状を呈するもの(257～310)がある。308～310は内面をハケメ調整する。瓦器はＢタイプの皿(311～315)があり、焼きは土師器に近い。

遺物包含層出土の土器

弥生土器（第16図）

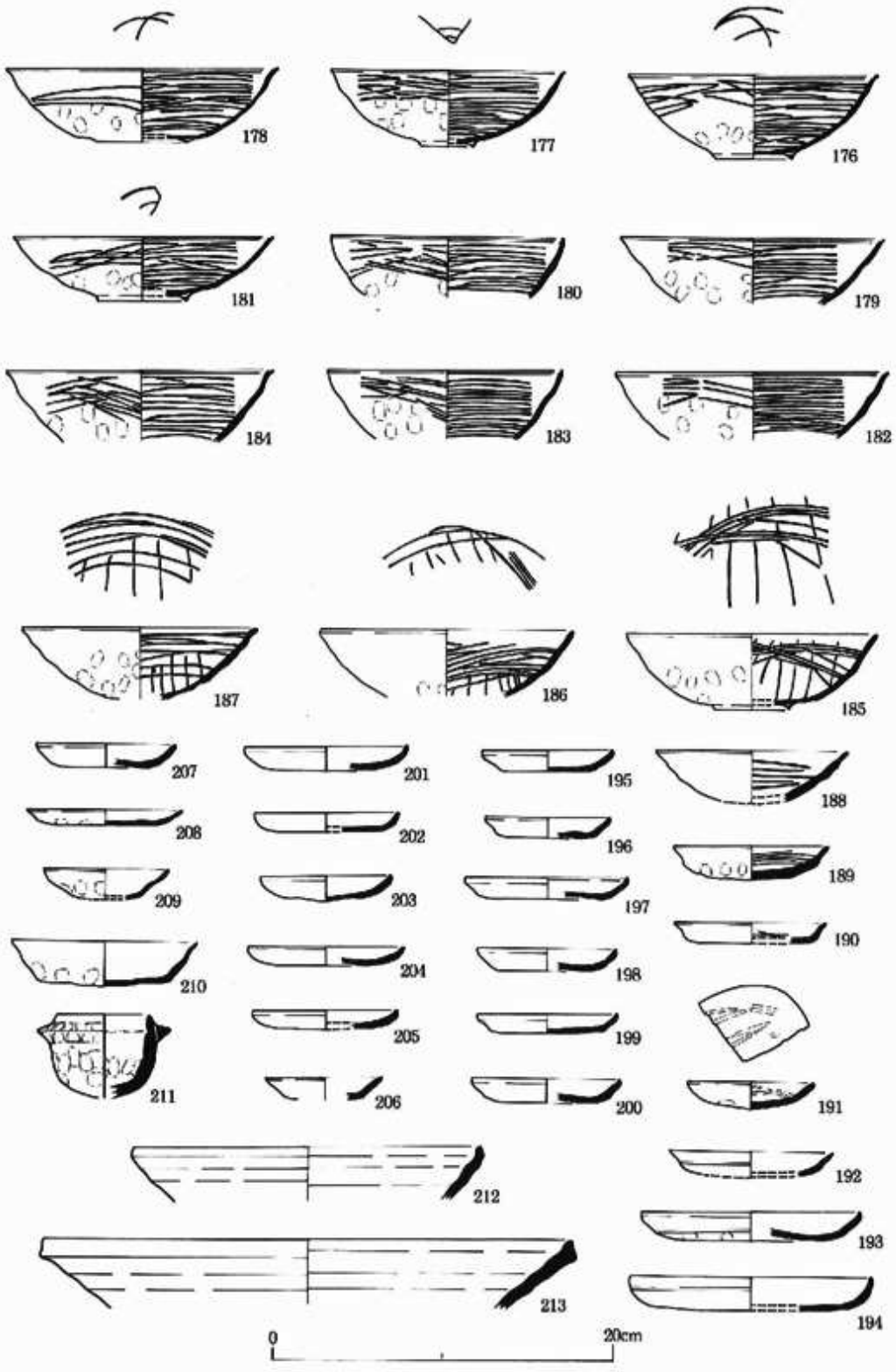
中期の壺、鉢、高杯、甕が出土した。316～319は壺である。316は口縁部を上方へ拡張し、凹線文を施す。317は筒状を呈する頸部より口縁部が大きく外反する。内外面に櫛描文様を施す。318・319は口縁端部を下方へ拡張する。321は高杯の脚部である。凹線文と小円孔を穿つ。320は体部が内傾し、口縁部が下方へ折れ曲がる鉢である。２条の凹線を施す。322は口縁部がく字形に外反する甕である。

古墳時代の土器（第16図）

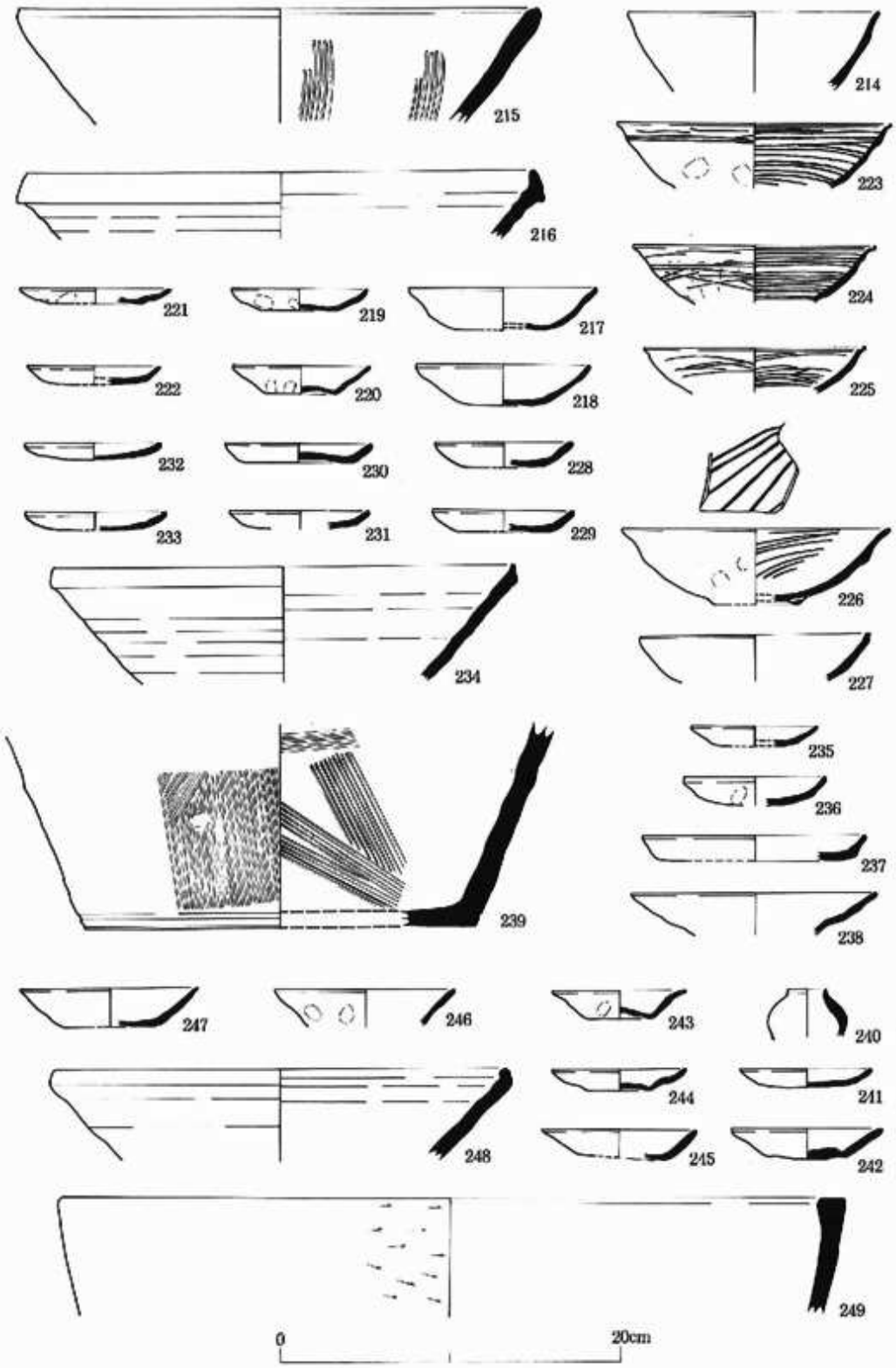
土師器と須恵器がある。土師器は甑と高杯がある。323は体部が上方に伸び、口縁端部が内傾して面をもつ甑である。324は高杯の杯部である。浅い椀状を呈する。須恵器は鴟、提瓶、高杯、蓋、甕、杯がある。325・326は頸部を欠損するが鴟である。体部中位に円孔を穿つ。327は提瓶である。頸部が外上方に伸びる。328は脚部を欠損するが高杯である。杯部は浅く、口縁部がゆるく外反する。329は脚部である。透かしを施す。330～333は蓋である。天井部は丸く、口縁部がハ字形に伸びる。口縁端部は丸く終わる。334～336は甕である。口縁端部を上方に拡張するもの(334)と丸く終わるもの(335・336)がある。337～348は杯である。体部が浅い皿状を呈し、口縁部が短く上方に伸びる。

平安時代の土器（第17図）

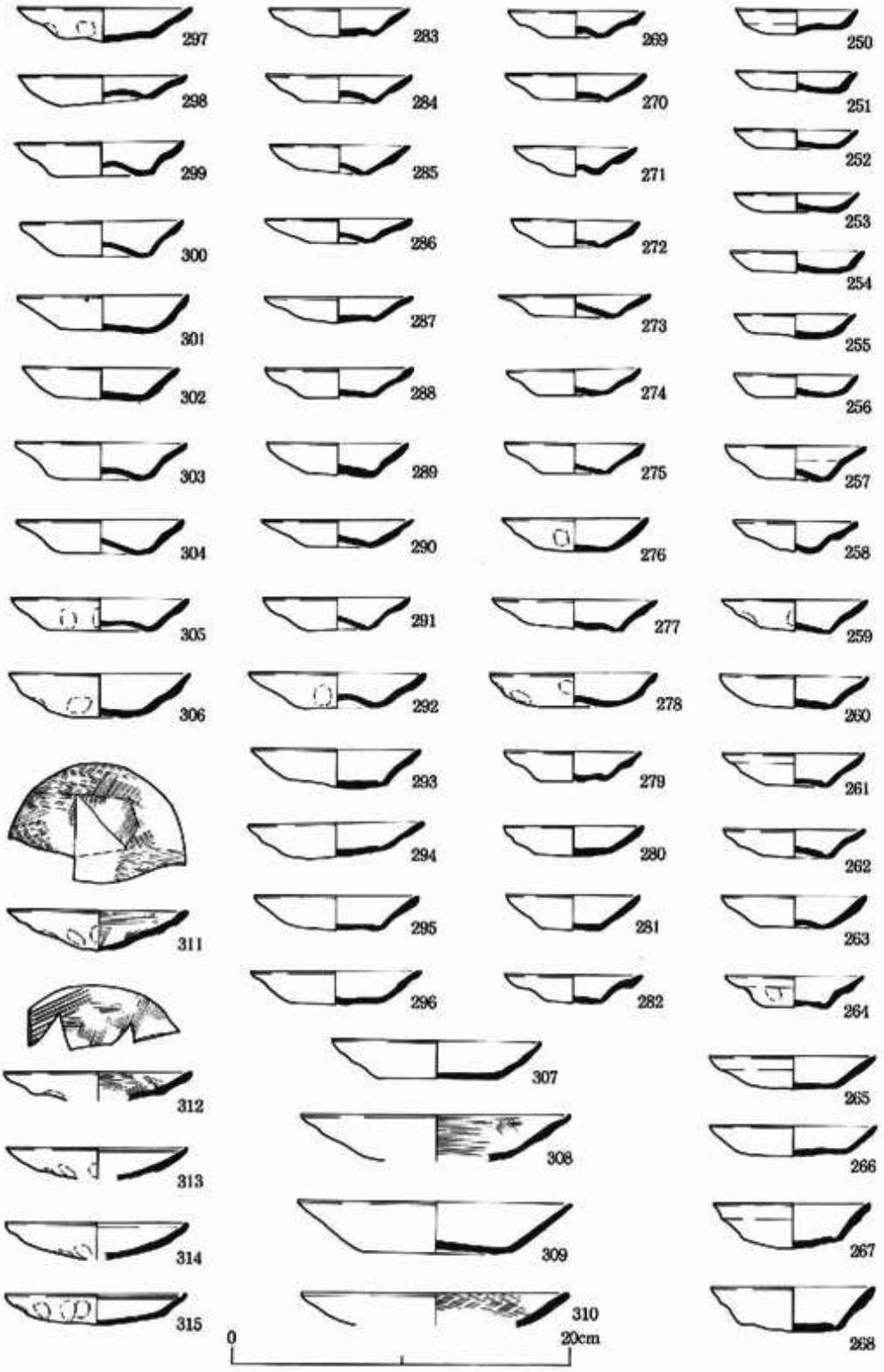
黒色土器、須恵器、土師器が出土した。349～359は黒色土器である。体部は深く、高い貼りつけの高台がつく。349～355は内面が黒色を呈する。349～351は口縁端部が丸く終わり、352～359は口縁端部に沈線を施す。356～359は内外面が黒色を呈し、口縁端部が丸く終わる。須恵器は山茶碗(360～362)がある。体部はやや浅く、断面が三角形の貼りつけ高台がつく。土師器は椀、杯、台付杯、甕、羽釜、皿、台付皿がある。363は椀である。体部は深く、断面が三角形の貼りつけ高台がつく。364～366、378～385は杯である。364は底部が丸底であり、体部



第13図　C２地区落ち込み４出土土器実測図



第14図　C２地区土坑８・14・15、C１地区溝２出土土器実測図



第15図　D地区土器溜出土土器実測図

が張る。365・366は底部が平底を呈し、体部が外上方に伸びる。須恵器の生焼けの可能性もある。378～385は丸底に近い平底の底部より体部が大きく外上方に伸びる。体部外面は指オサエで終わる。367は台付杯である。体部は皿状を呈し、口縁部がゆるく外反する。底部は高い貼りつけの高台がつく。368～370は甕である。口縁端部が丸く終わるもの(368)と上方へ拡張するもの(369・370)がある。370は体部に透かしを施す。371は羽釜である。口縁部が外上方に伸び、口縁端部が面をもつ。372～376は口縁端部を内側へ巻き込む皿である。377は高い貼りつけ高台のつく台付皿である。口縁部が内傾する。

歴史時代の土器

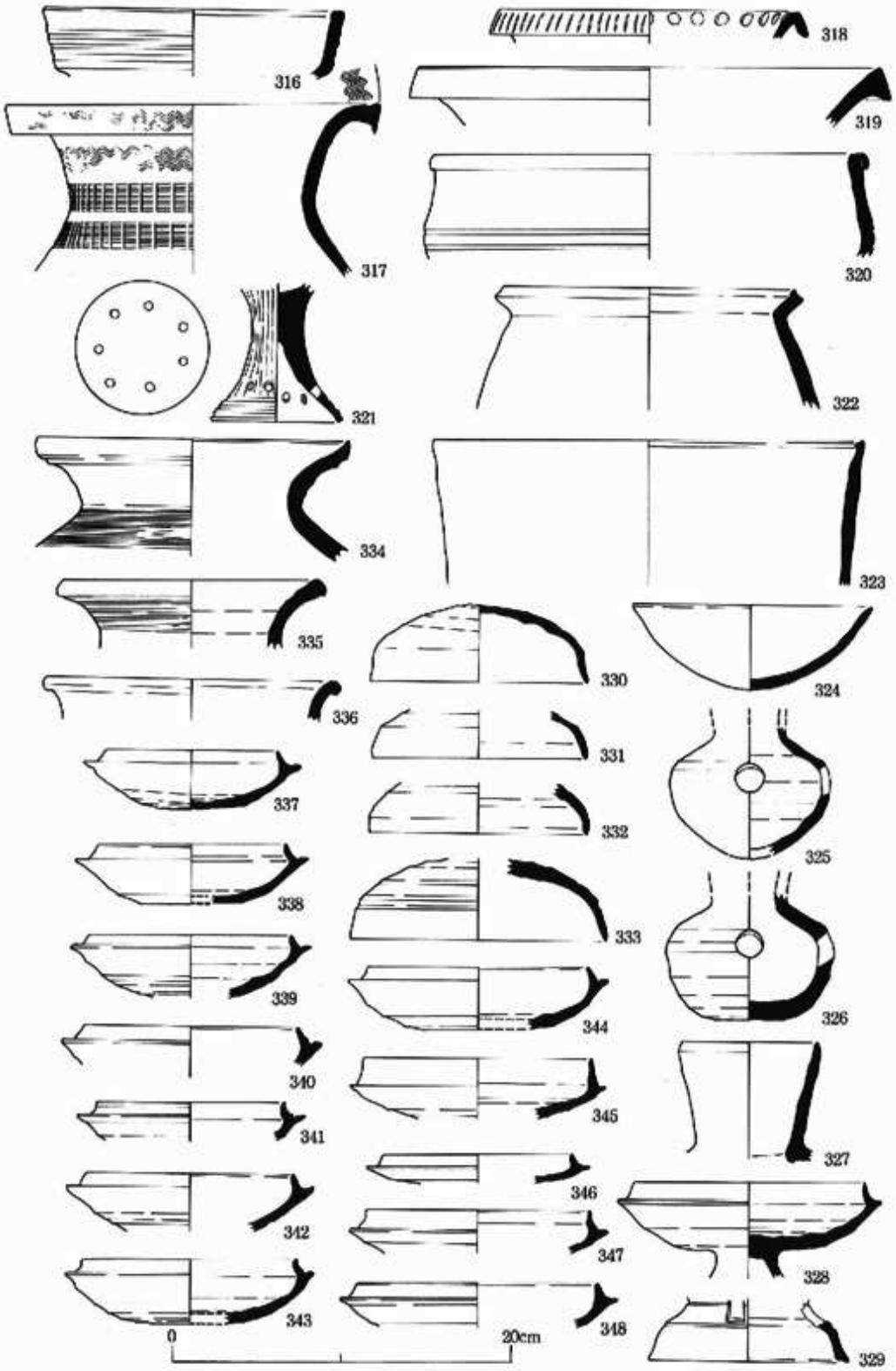
土師器、瓦器、陶器、須恵器、磁器がある。

土師器（第18～23図）

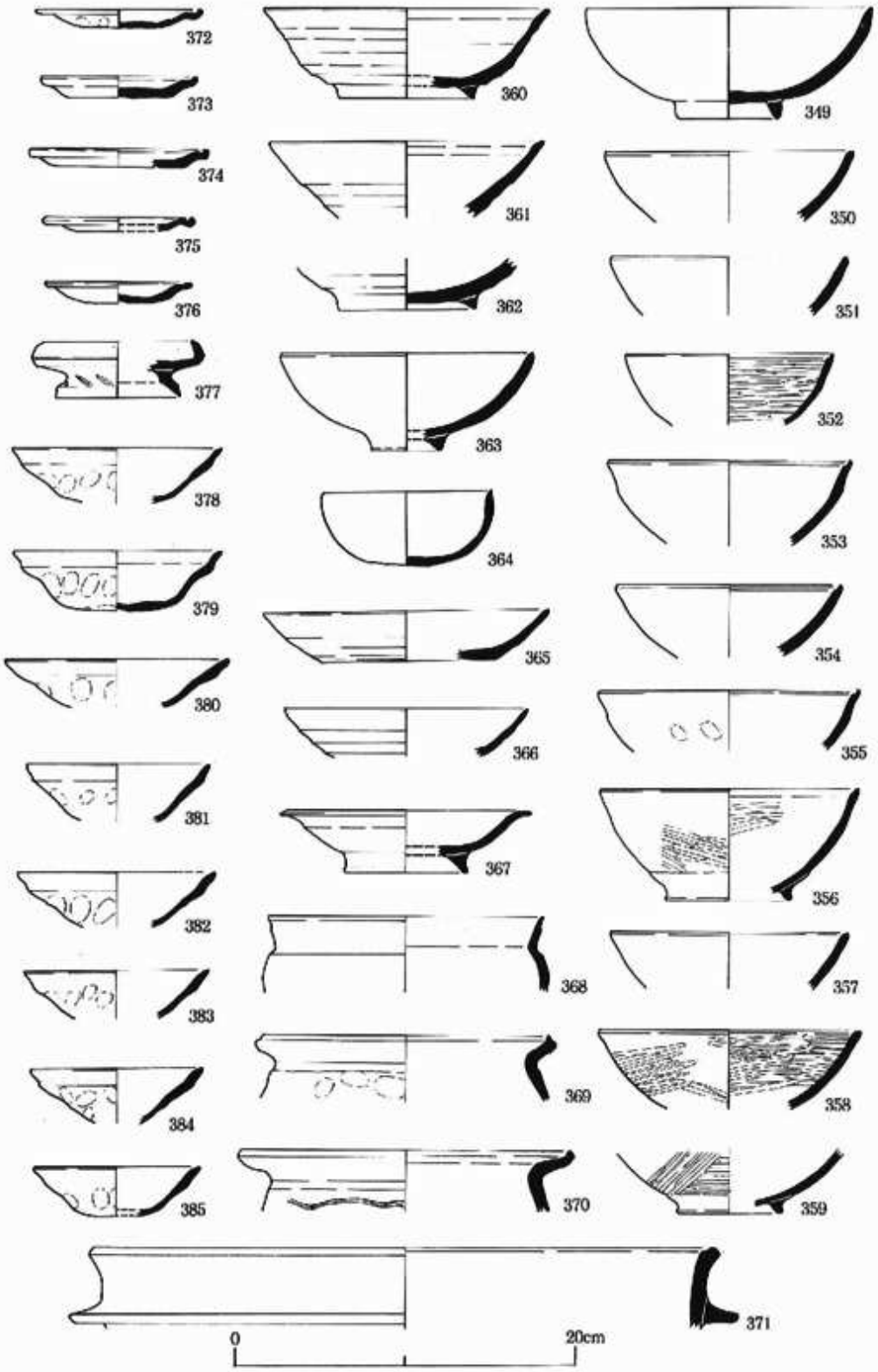
羽釜、水滴、皿がある。羽釜はA１タイプのもの(386～396)、A２タイプのもの(397～402)、A３タイプのもの(403～406)、B１タイプのもの(407～409・411・412)、B２タイプのもの(410・413・414)、B３タイプのもの(415～421)、Cタイプのもの(422～432)、Dタイプのもの(433～440)、Eタイプのもの(441)、Fタイプのもの(442)がある。443は水滴である。注ぎ口を欠損する。体部は球形を呈し、口縁部がゆるく外反する。444～518は皿である。口縁部が短く外上方に伸びるもの(444～462・519～521)、体部に段をもつもの(463～468)、体部がラッパ状を呈するもの(469～518)がある。

瓦器（第24～32・35図）

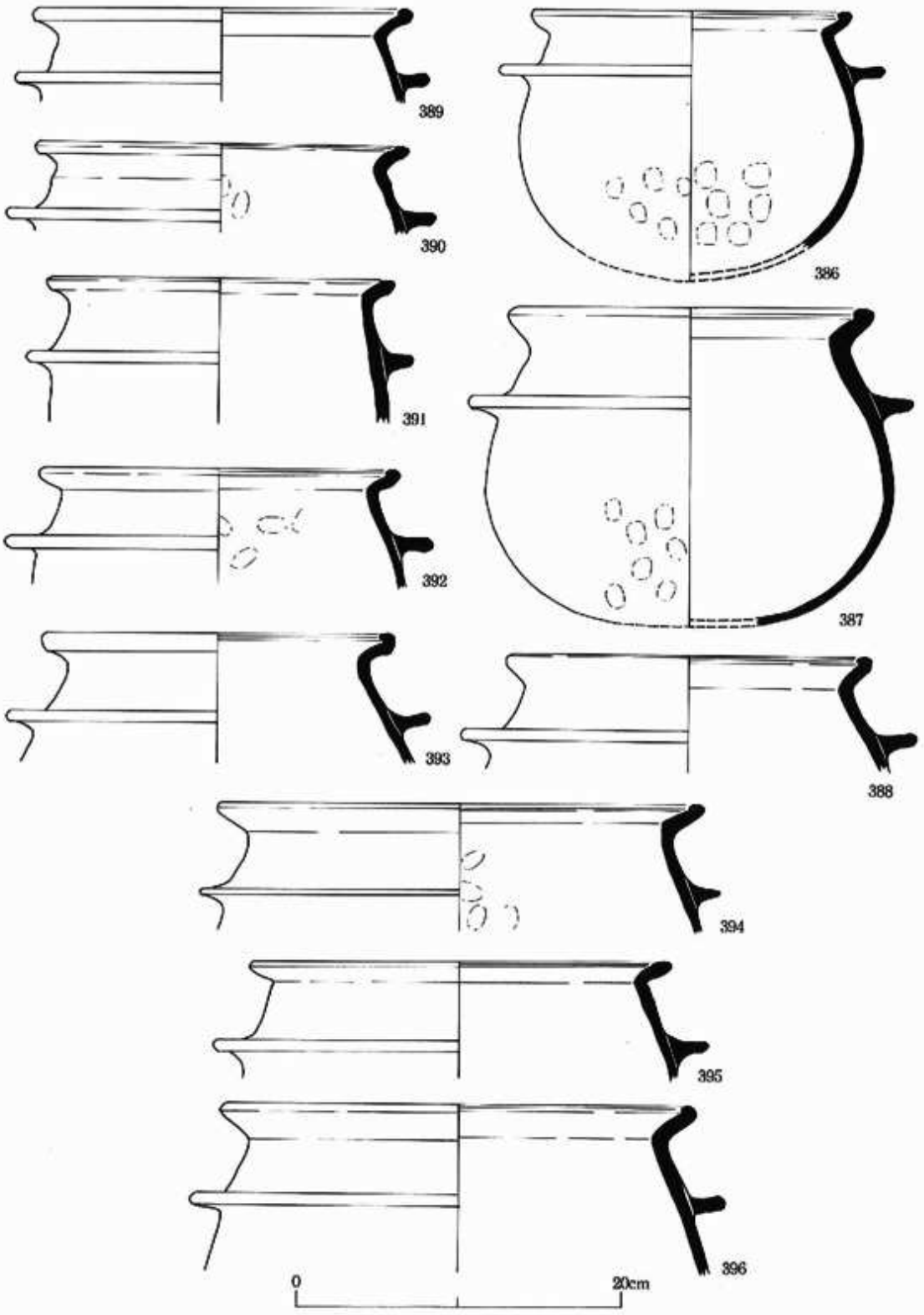
椀、皿、小椀、羽釜、鍋、茶釜、火舎、香炉、蓋、甕、深鉢、摺鉢がある。椀はA１タイプのもの(522～526)、A２タイプのもの(527～529)、A３タイプのもの(530～539)、A４タイプのもの(540・541)、A５タイプのもの(542～547)、A６タイプのもの(548～550)、B１タイプのもの(551～554)、B２タイプのもの(555～559・562)、B３タイプのもの(560・561)、B４タイプのもの(563～566)、Cタイプのもの(567・568)がある。569・570はCタイプの底部であり、２重の高台がつく。571～573は焼成後に記号を刻む。皿はA１タイプのもの(574・575)、A２タイプのもの(576・577)、A３タイプのもの(578～595)、A４タイプのもの(596～599)、A５タイプのもの(600～605)、Bタイプのもの(606・607)がある。小椀はA１タイプのもの(608・609)、A２タイプのもの(610)、A３タイプのもの(611・612)、Bタイプのもの(613～616)がある。羽釜はAタイプのもの(617～623)とBタイプのもの(624～639)がある。640～642は羽釜の脚部である。643～645は鍋である。体部の張りは少なく、口縁部が外反した後、上方にのびる。646は茶釜である。体部の張りは大きく、口縁部が上方に伸びる。体部に把手と鐏がつく。火舎はA１タイプのもの(647～651)、A２タイプのもの(652～656)、Bタイプのもの(657～660)、Cタイプのもの(661・662)、Dタイプのもの(663)、Eタイプのもの(664)、Fタイプのもの(665)がある。666はBタイプの香炉である。667～669は蓋である。天井部は平坦であり、口縁部がハ字形に伸びる。甕はAタイプのもの(670・671)とBタイプのもの(672・673)がある。深鉢はAタイプのもの(674・675)とBタイプのもの(676・677)がる。摺鉢はAタイプ



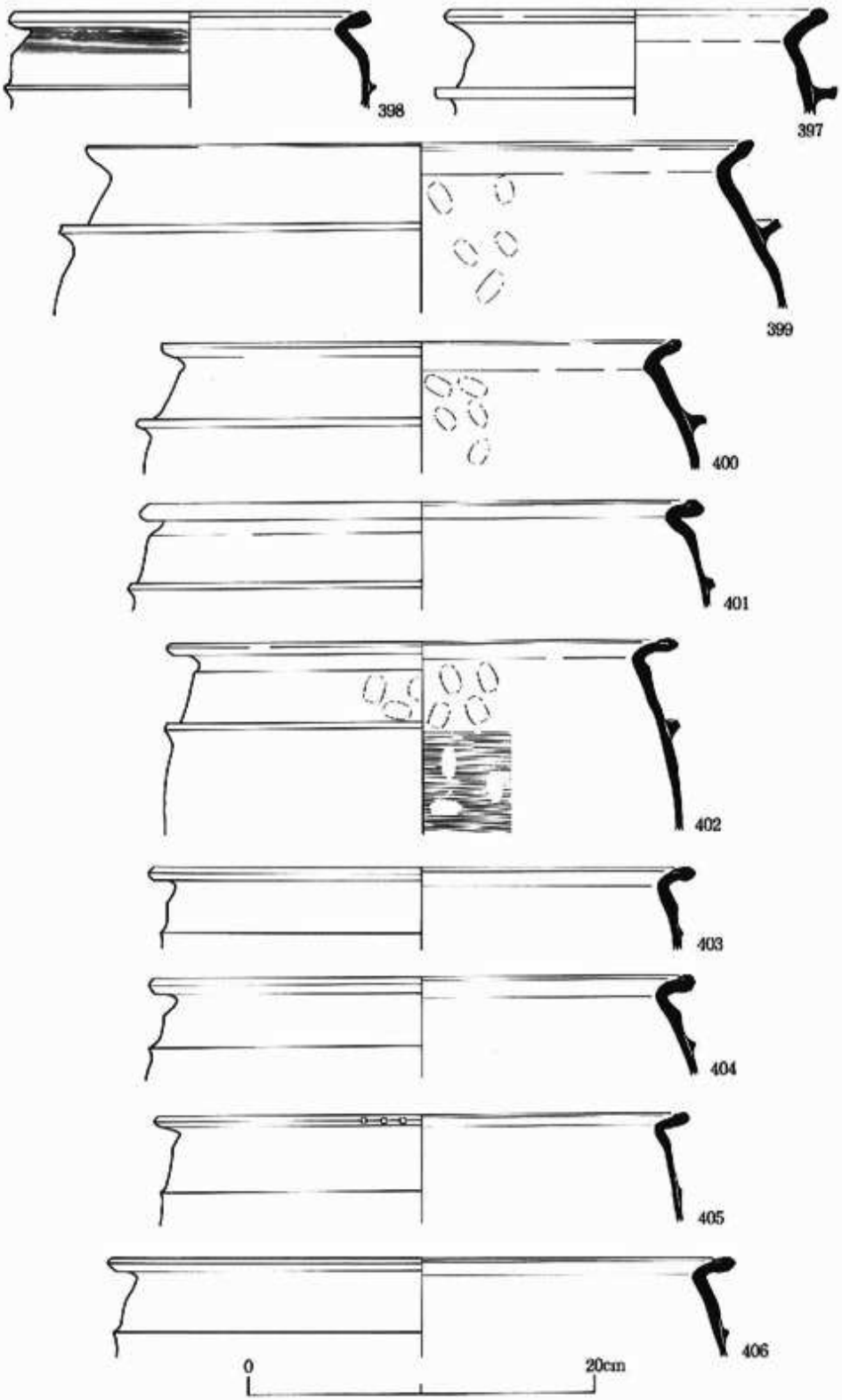
第16図　遺物包含層出土弥生土器・須恵器・土師器実測図



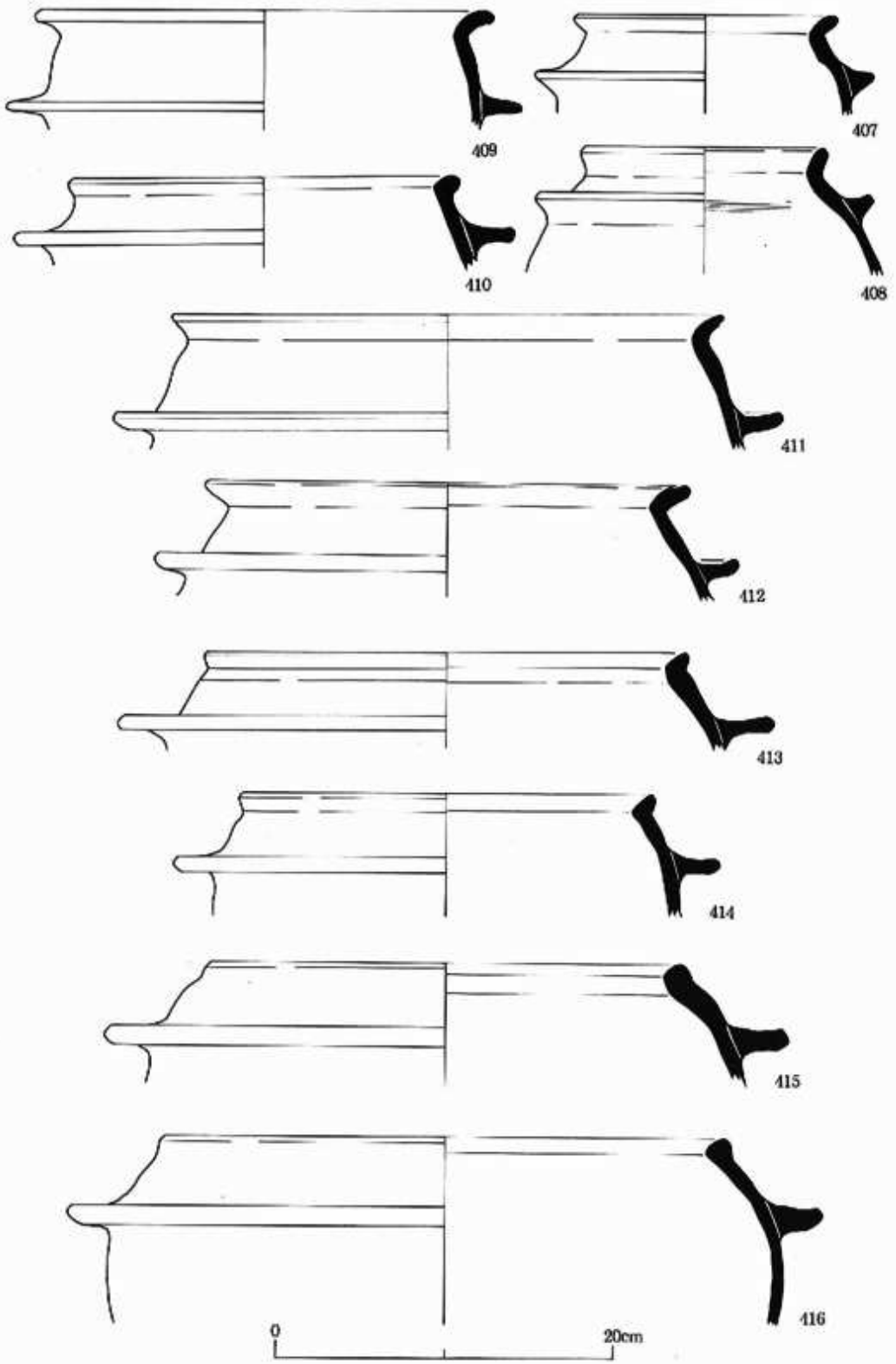
第17図　遺物包含層出土黒色土器・土師器・須恵器実測図



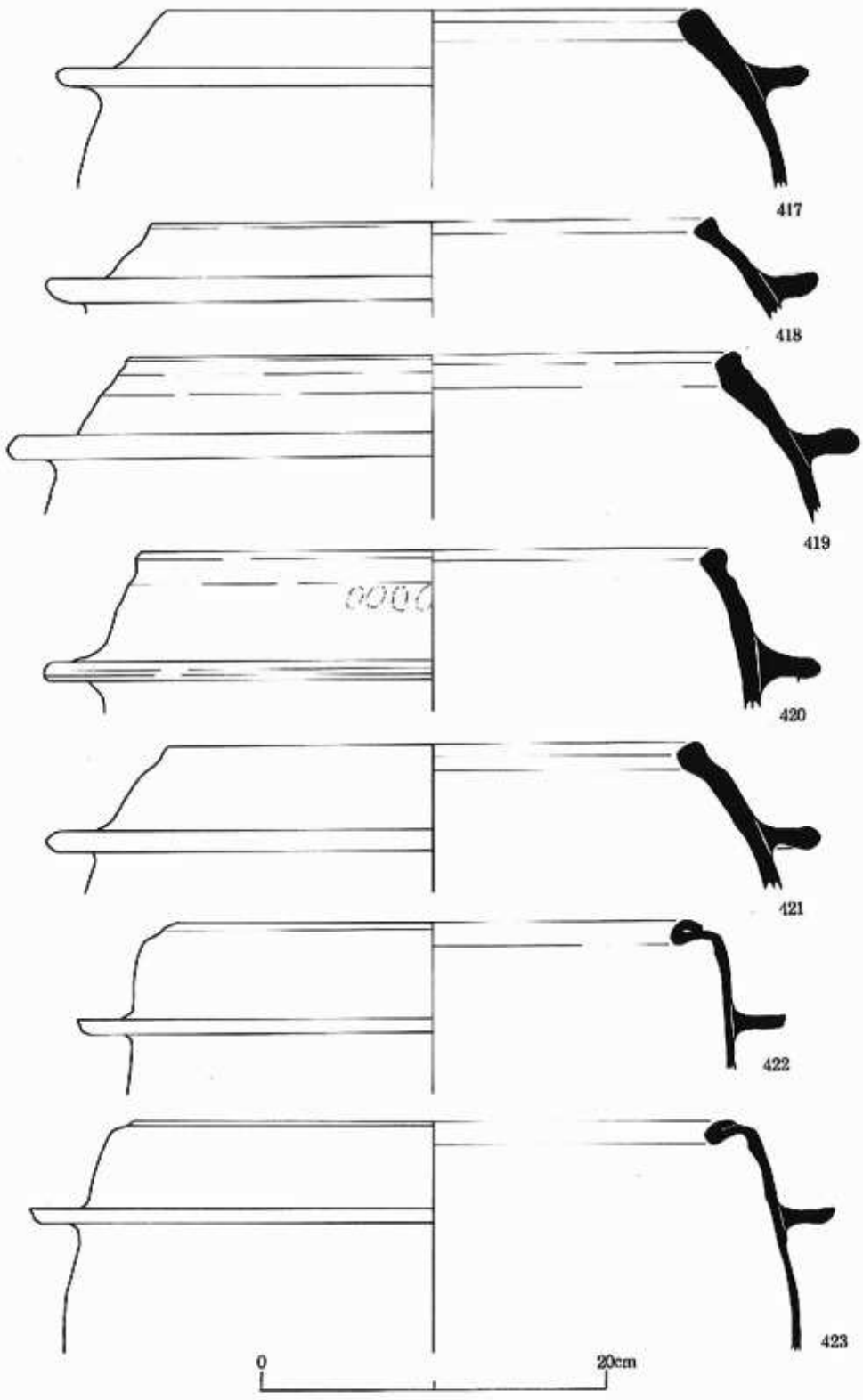
第18図　遺物包含層出土土師器実測図



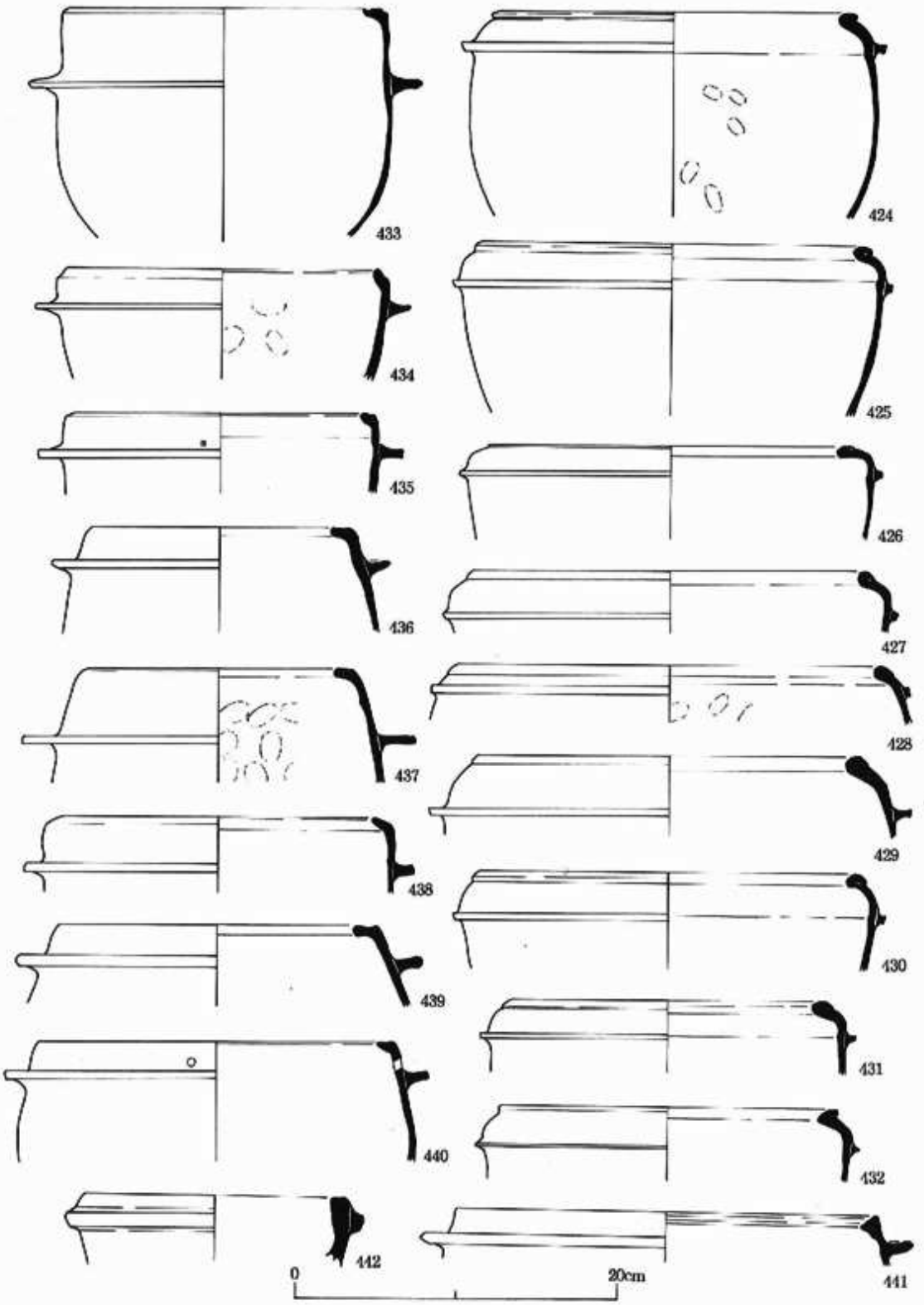
第19図　遺物包含層出土土師器実測図



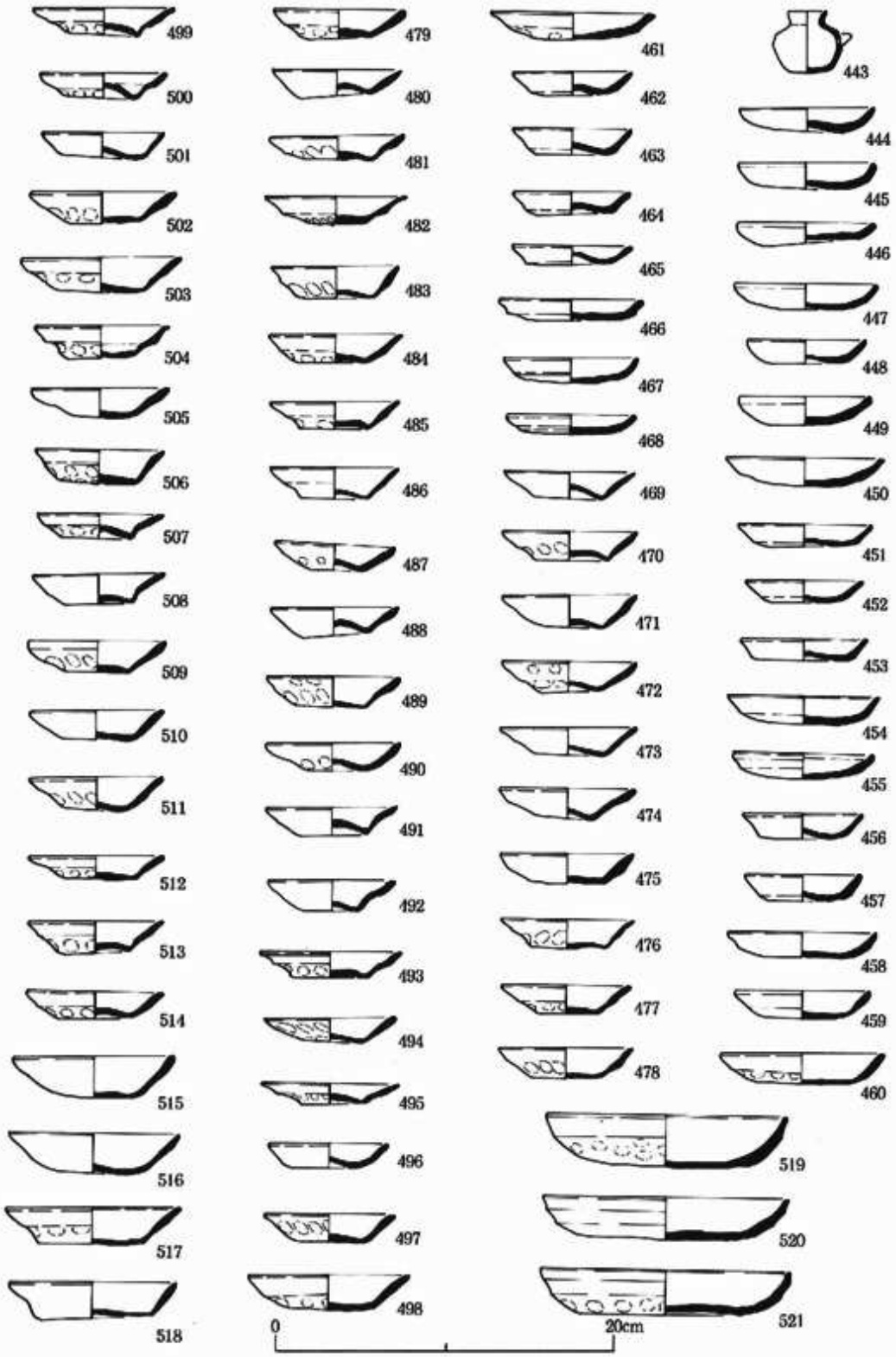
第20図　遺物包含層出土土師器実測図



第21図　遺物包含層出土土師器実測図



第22図　遺物包含層山土土師器実測図



第23図　遺物包含層出土土師器実測図

のもの(706・707)とBタイプのもの(708～710)がある。

陶器（第33・36・37図）

捏鉢、摺鉢、皿、甕がある。

捏鉢は信楽焼がある。Aタイプ(685)とBタイプ(686～688)のものがある。摺鉢は備前焼がある。Aタイプ(678)、Bタイプ(679～681)、Cタイプ(682)のものがある。683・684は底部である。711～716は瀬戸・美濃焼の折り縁皿である。体部は浅く、口縁部が外反する。719は平底の底部より体部が外上方に伸びる皿である。窯は不明。甕は備前焼、常滑焼、窯不明のものがある。備前焼の甕はAタイプ(720・721)とBタイプ(722)のものがある。常滑焼の甕はAタイプ(893)、Bタイプ(724～726)のものがある。717・718は窯は不明であるが甕である。

須恵器（第34・35・37図）

捏鉢、甕がある。捏鉢はAタイプ(689～695)、Bタイプ(696～699)、Cタイプ(700～705)のものがある。727～729は張りのある体部より口縁部が大きく外反する甕である。体部外面はタタキ調整する。東播系のものである。

磁器（第38図）

青磁の碗・皿、白磁の碗・小碗・皿、明の染付がある。青磁碗はAタイプ(730～735)、Bタイプ(736～742)と底部(743)がある。744～747は皿である。白磁碗はAタイプ(754・755)、Bタイプ(748～753)、Cタイプ(756)のものがある。757は小碗である。皿はAタイプ(758～764)、Bタイプ(765・766)のものがある。767は明の染付皿である。底部は上げ底を呈する。内外面は藍色で絵を描く。

2．石器（第39～41図）

石器は歴史時代の遺物包含層より出土した。旧石器時代、縄文時代、弥生時代、歴史時代の時期のものがある。

3は有舌尖頭器である。頭部と側縁の一部を欠損する。全体的に薄く押圧剥離で仕上げられる。舌部はゆるく抉る。旧石器時代。

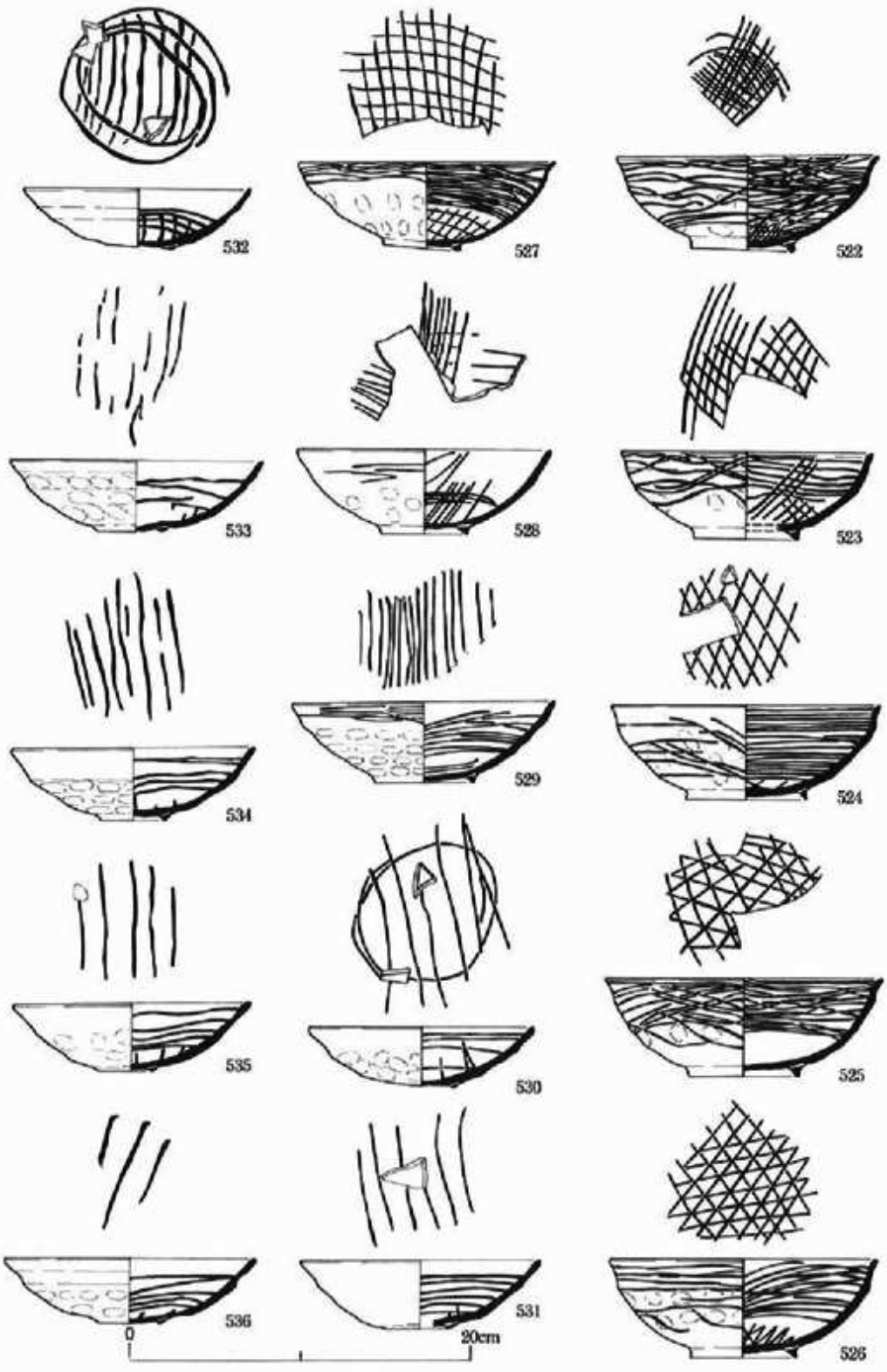
4は磨製の石斧である。頭部を欠損する。全体的に薄く仕上げ、側縁は面を持つ。刃部は鋭く研ぐ。縄文時代。

5は柳葉形の石鏃である。先端部と基部を欠損する。全体的に薄く押圧剥離で仕上げる。弥生時代。

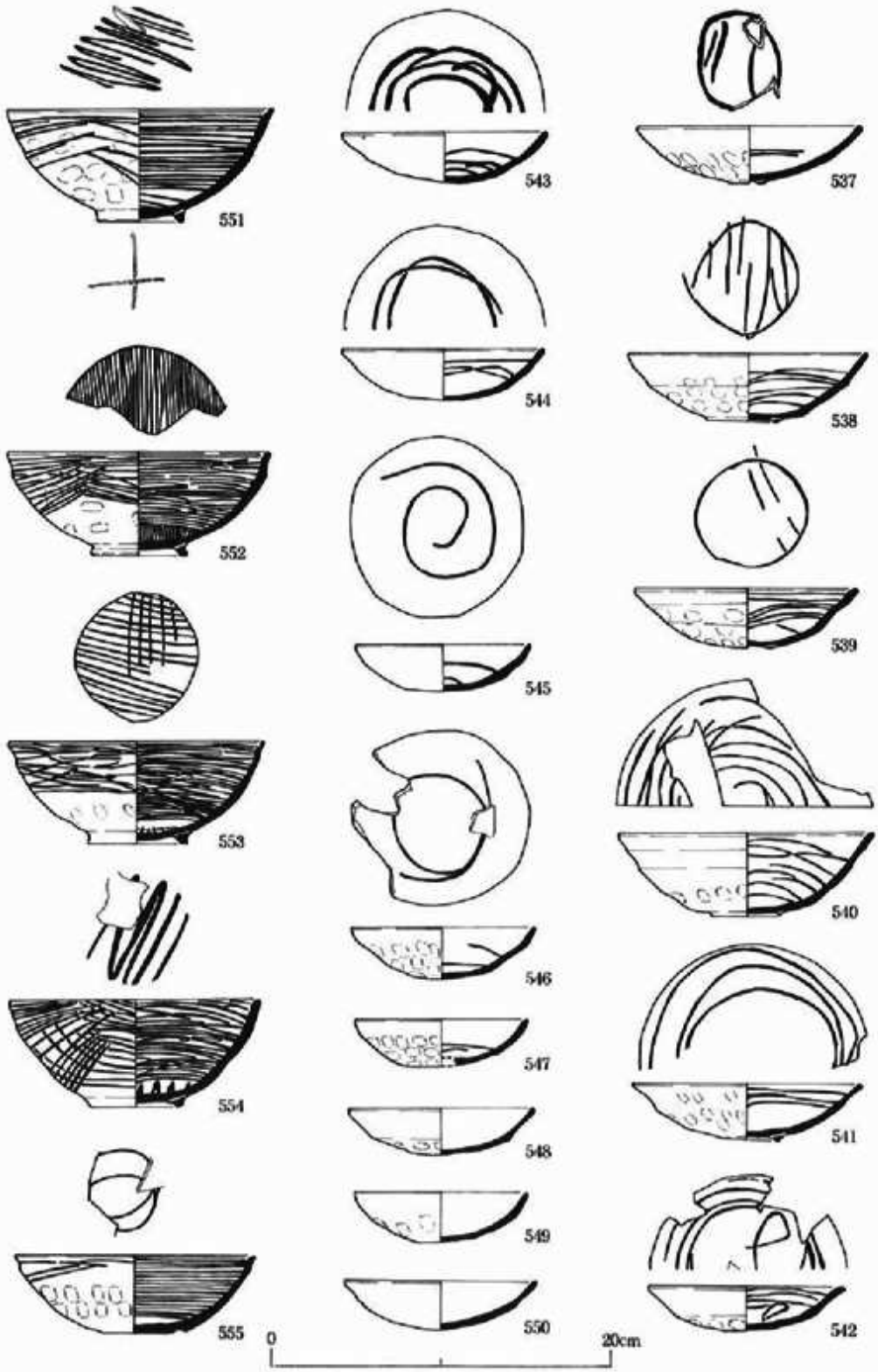
6は石槍である。先端部と基部を欠損する。身幅はやや狭い。全体的に押圧剥離で仕上げるが粗い。弥生時代

7は磨製の石包丁である。両端を欠損するが半月形を呈すると考えられる。中央に円孔を二孔穿つ。風化が著しい。弥生時代。

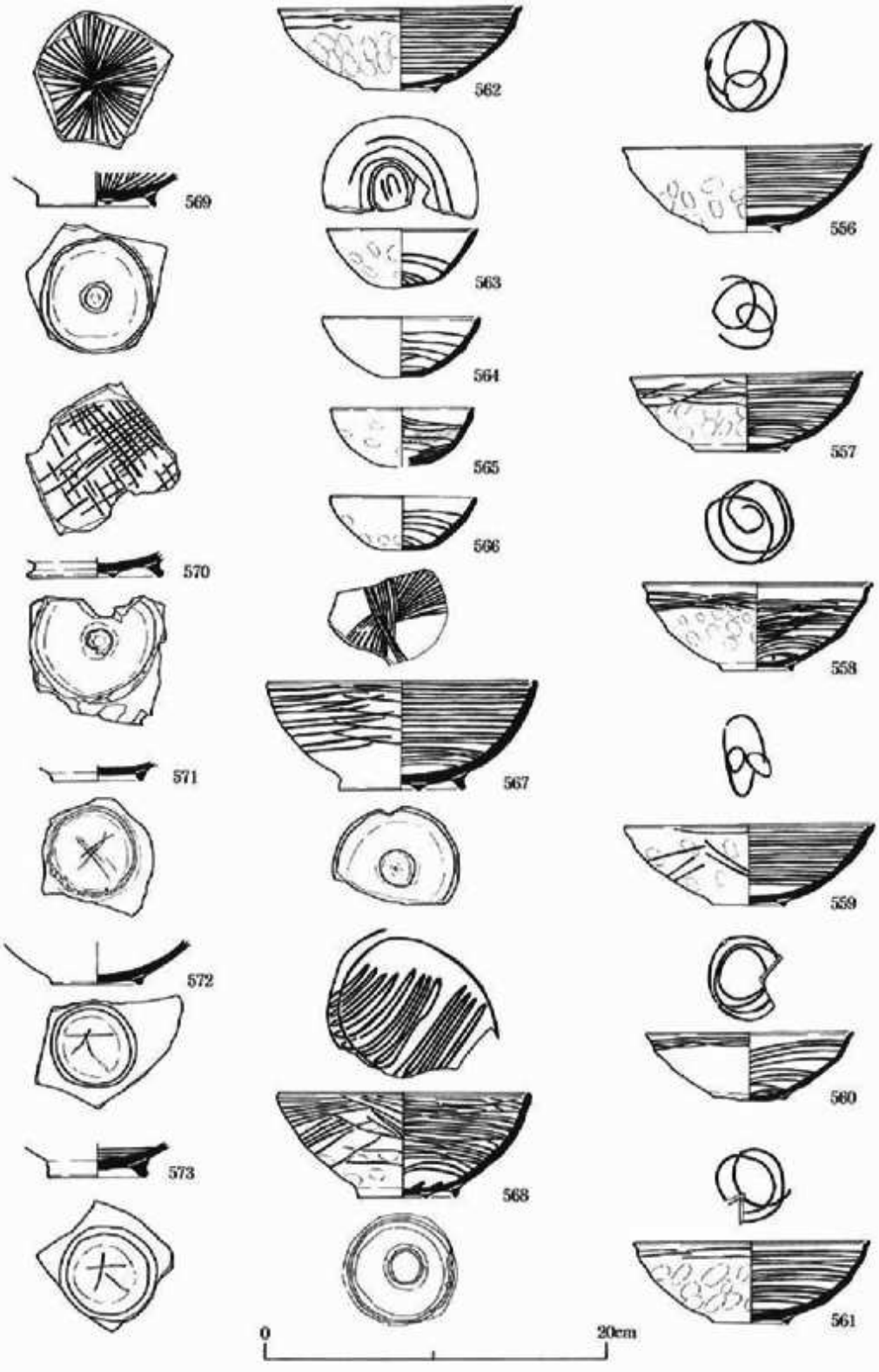
8・9は硯である。全形の残るものはないが形状は長方形を呈する。8は内面を楕円形、9は長方形に削る。9は陸部が残る。歴史時代。



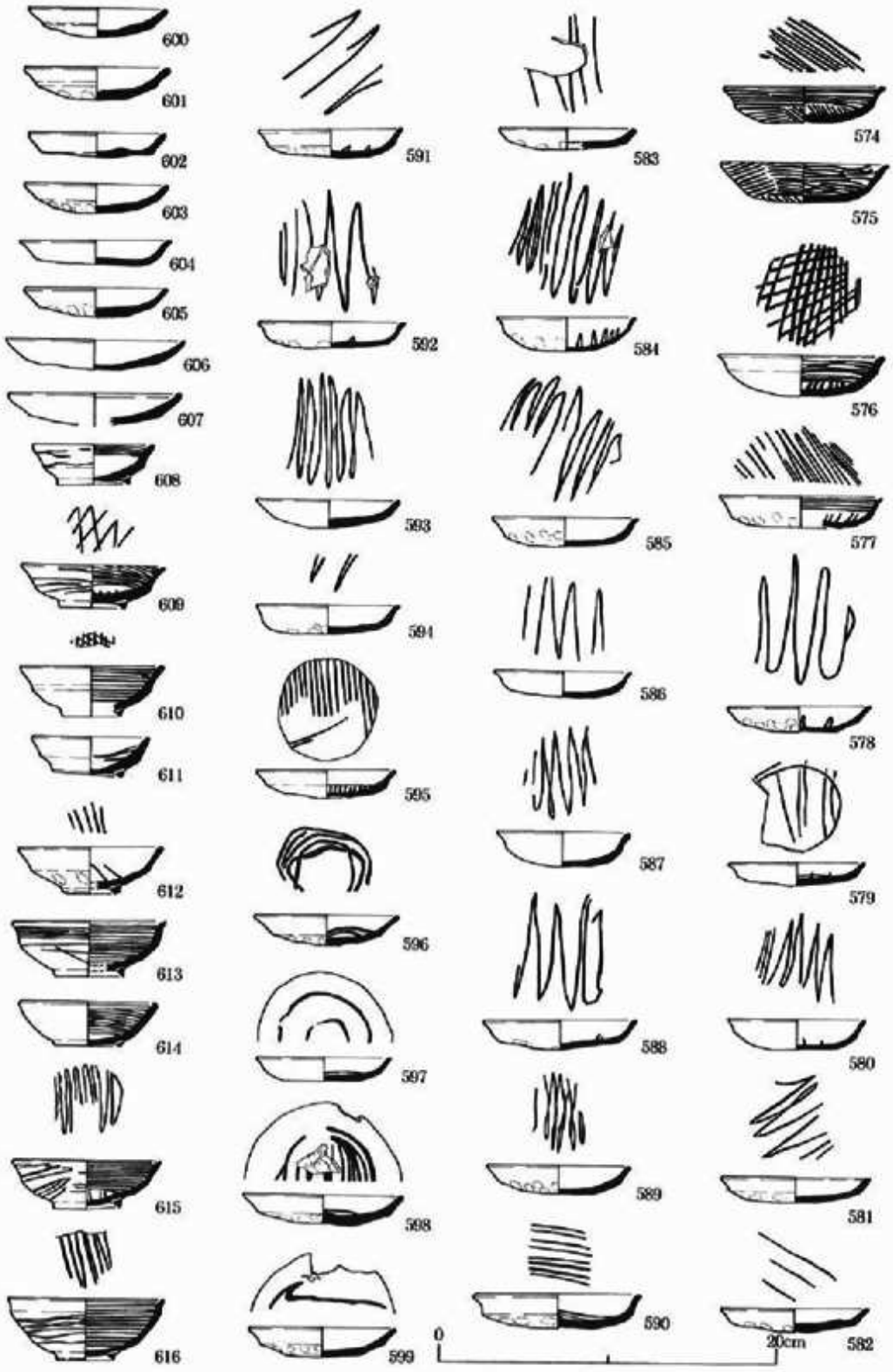
第24図　遺物包含層出土瓦器実測図



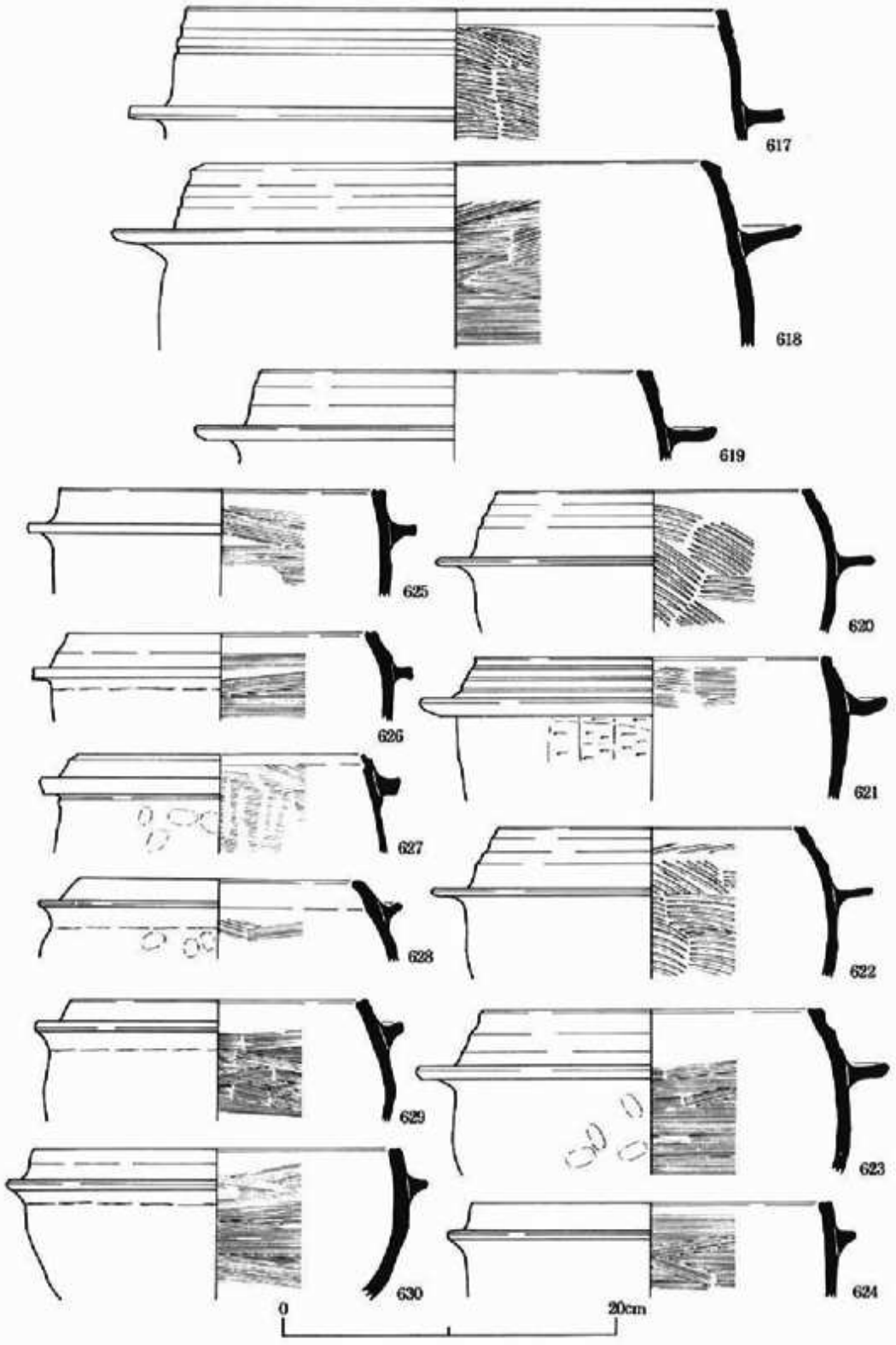
第25図　遺物包含層出土瓦器実測図



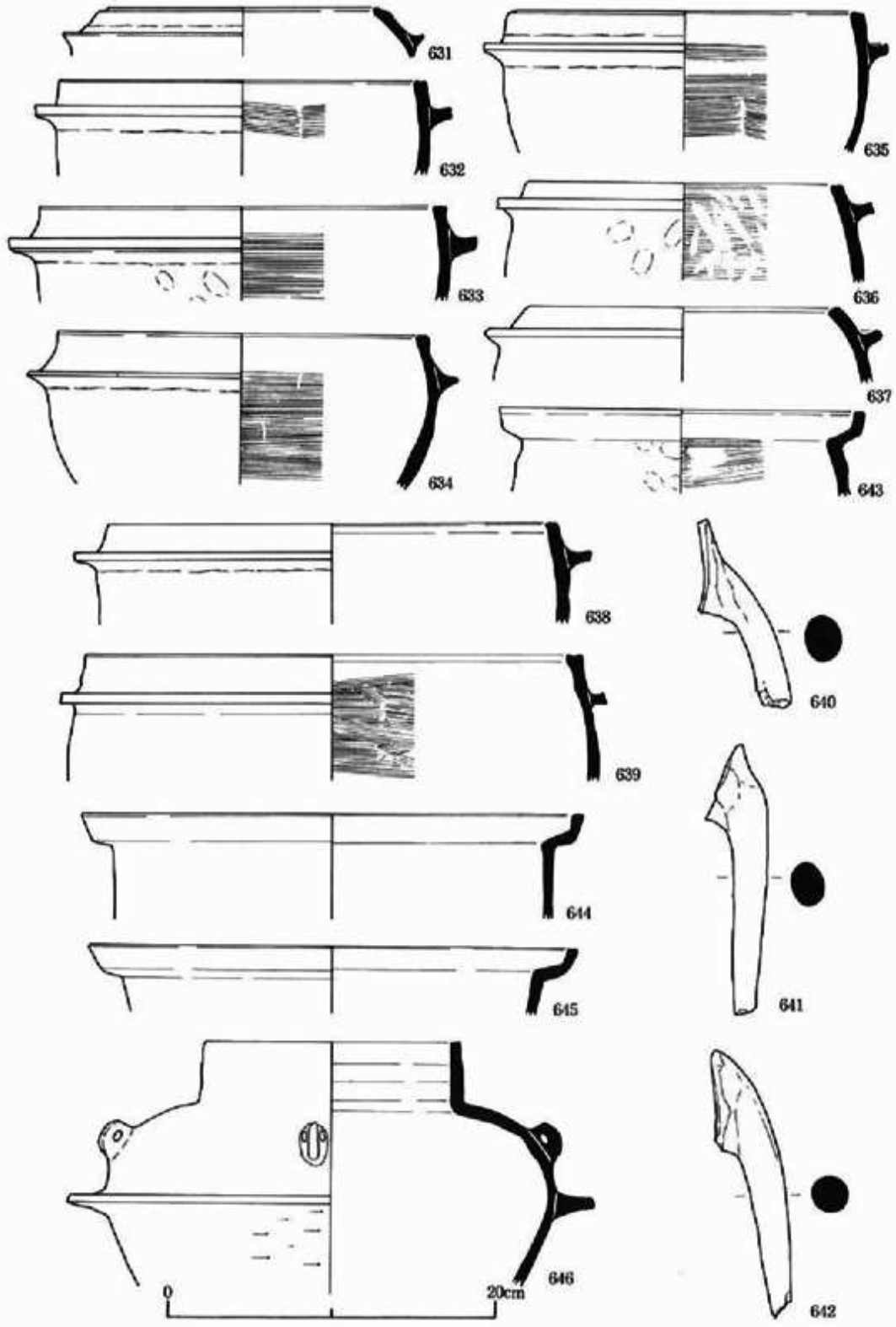
第26図　遺物包含層出土瓦器実測図



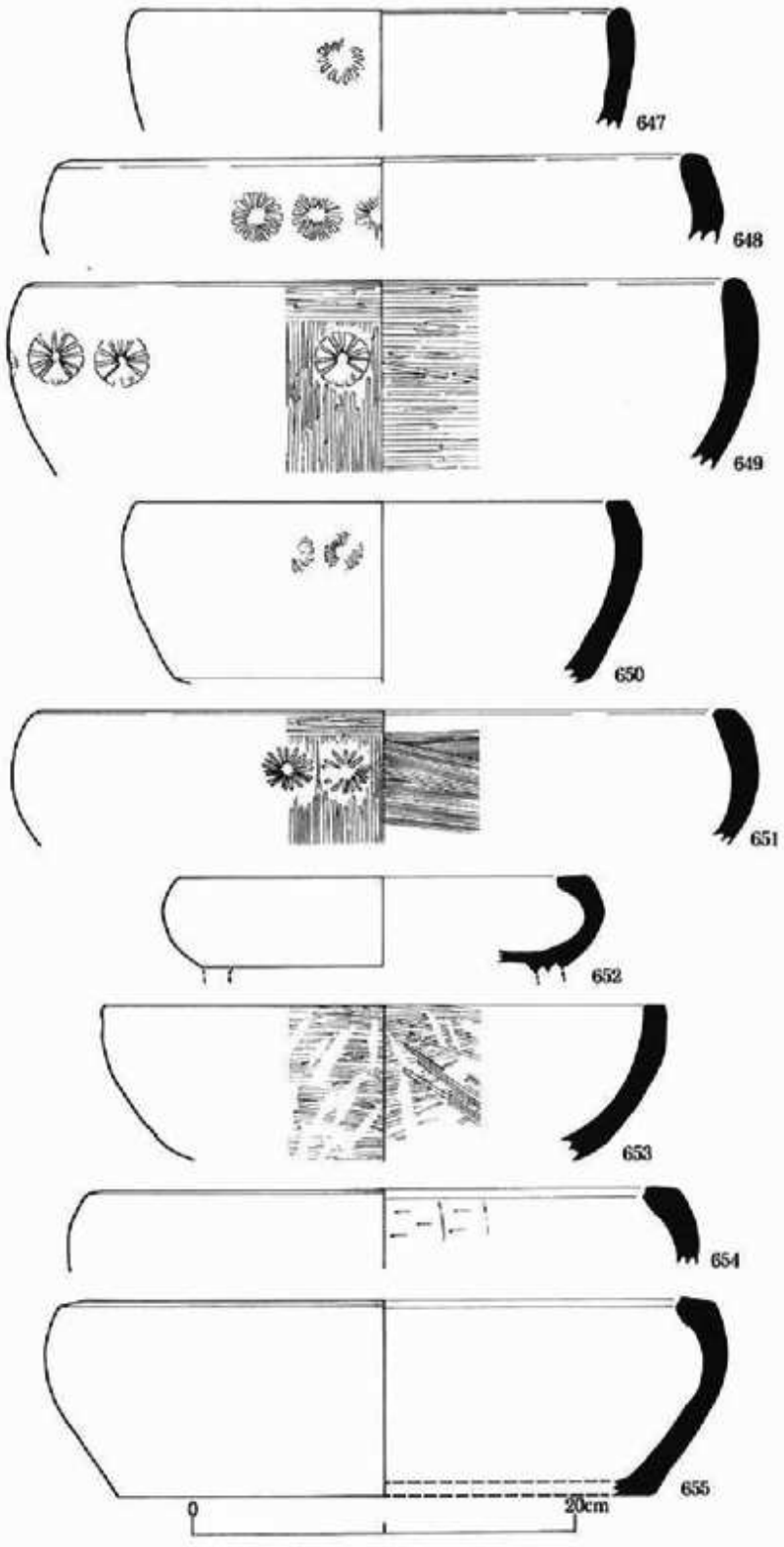
第27図　遺物包含層出土瓦器実測図



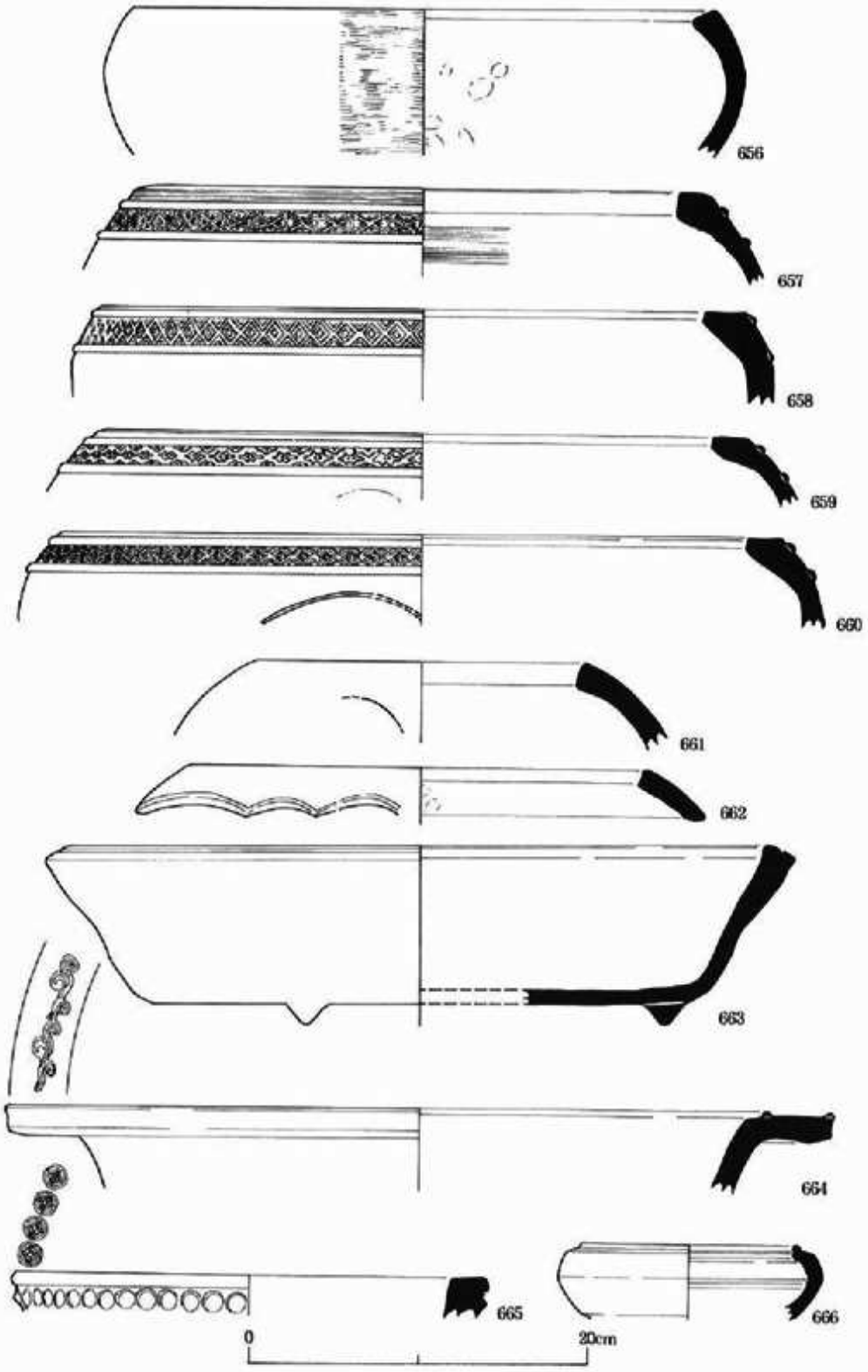
第28図　遺物包含層出土瓦器実測図



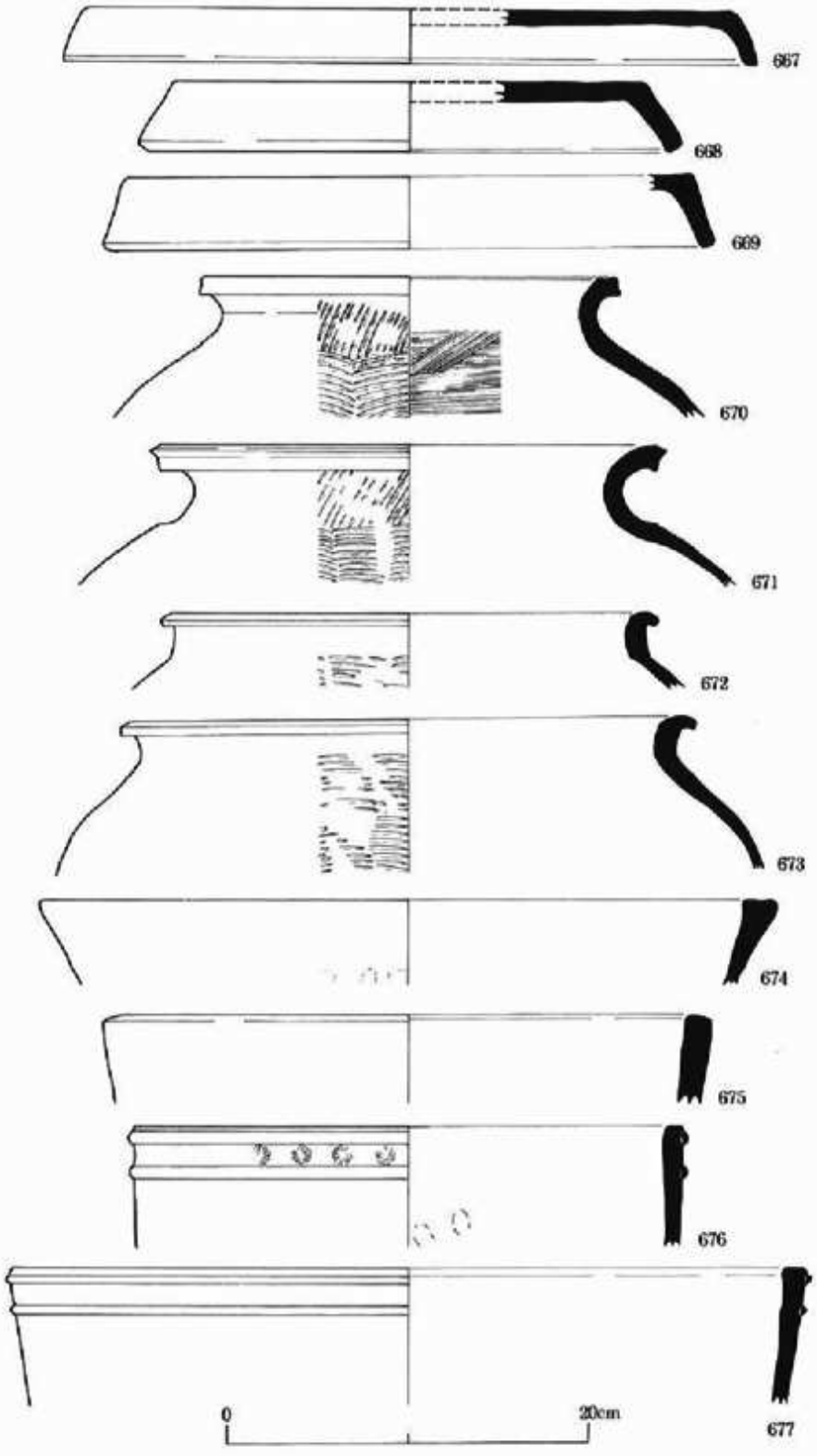
第29図　遺物包含層出土瓦器実測図



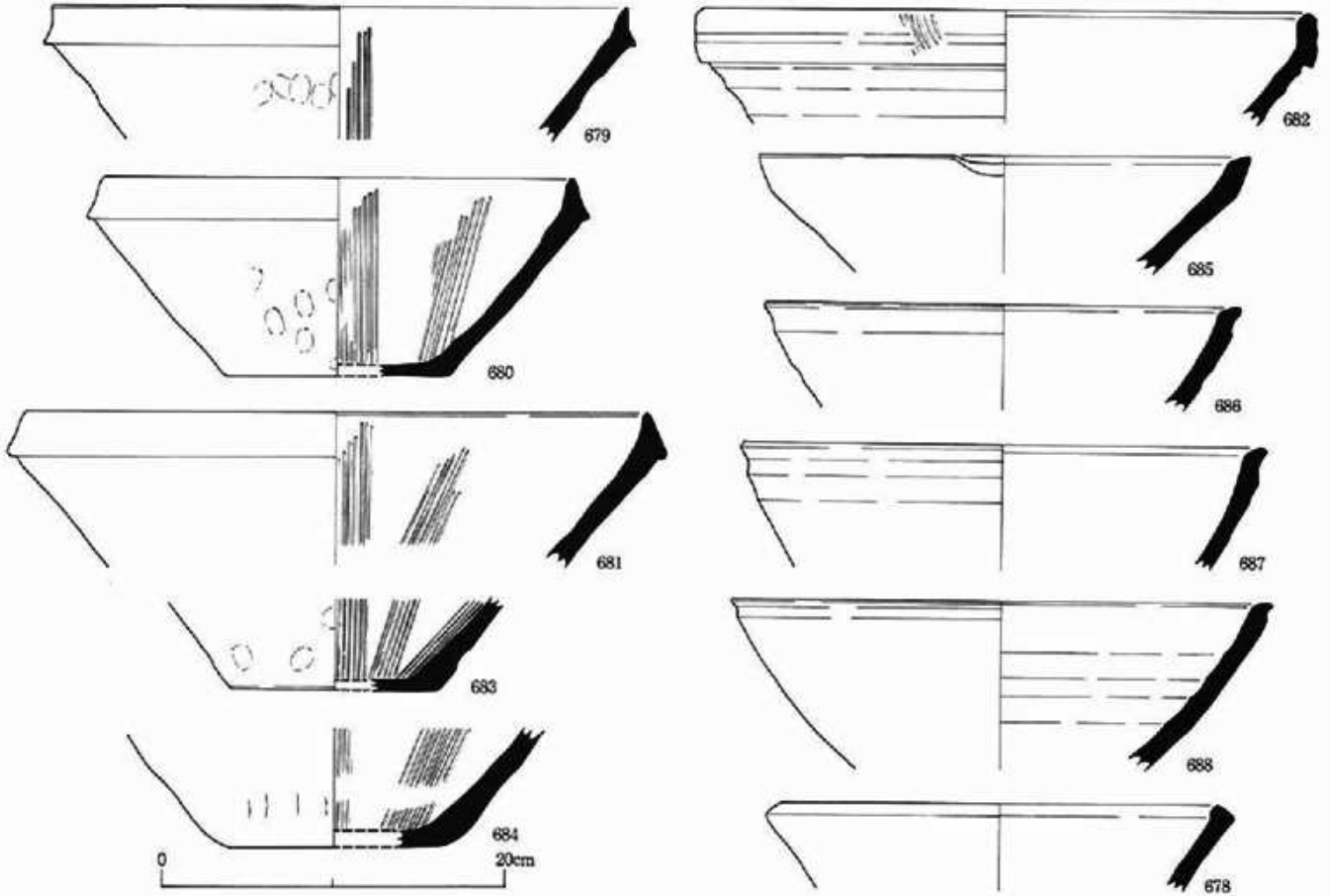
第30図　遺物包含層出土瓦器実測図



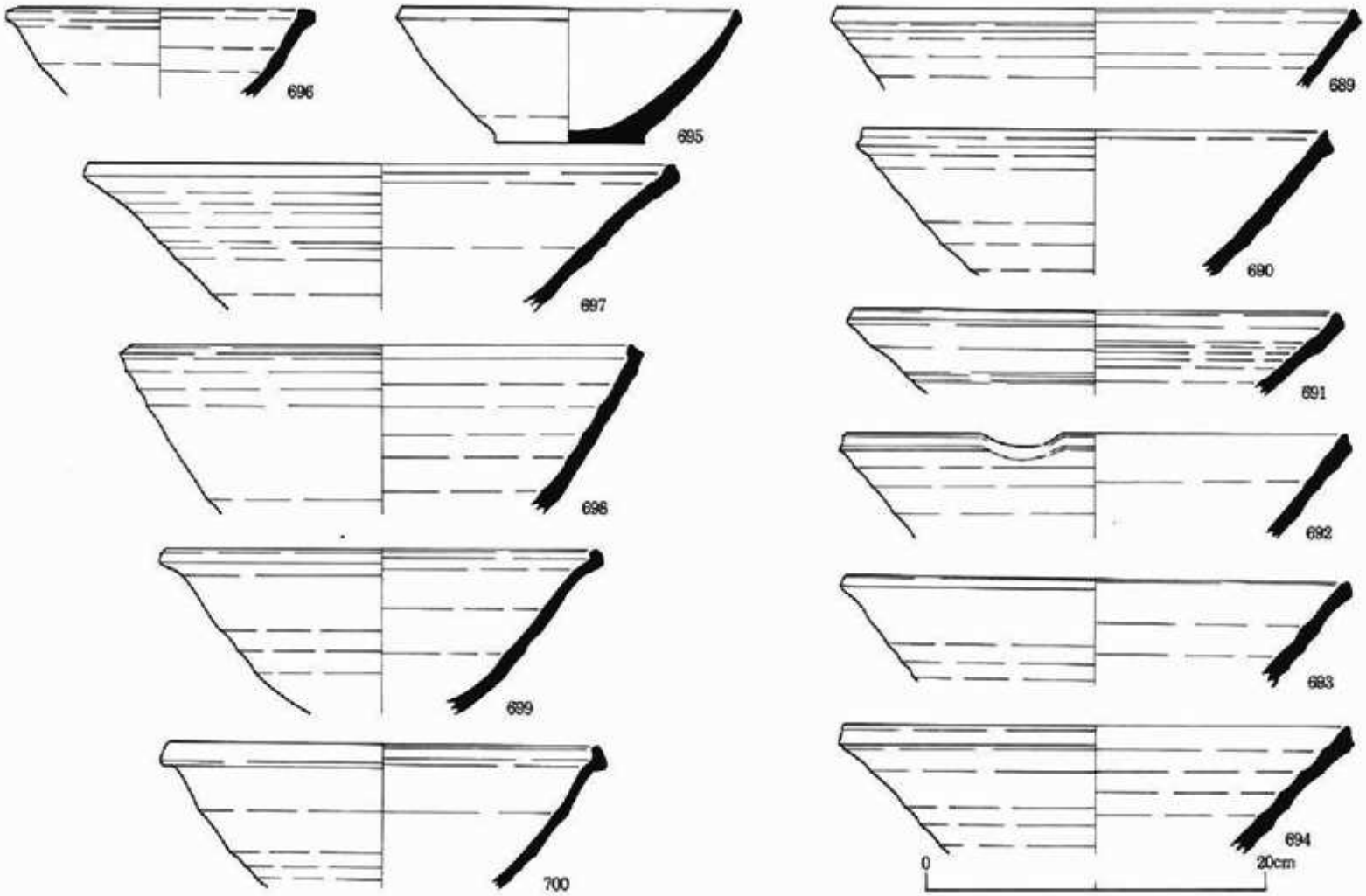
第31図　遺物包含層出土瓦器実測図



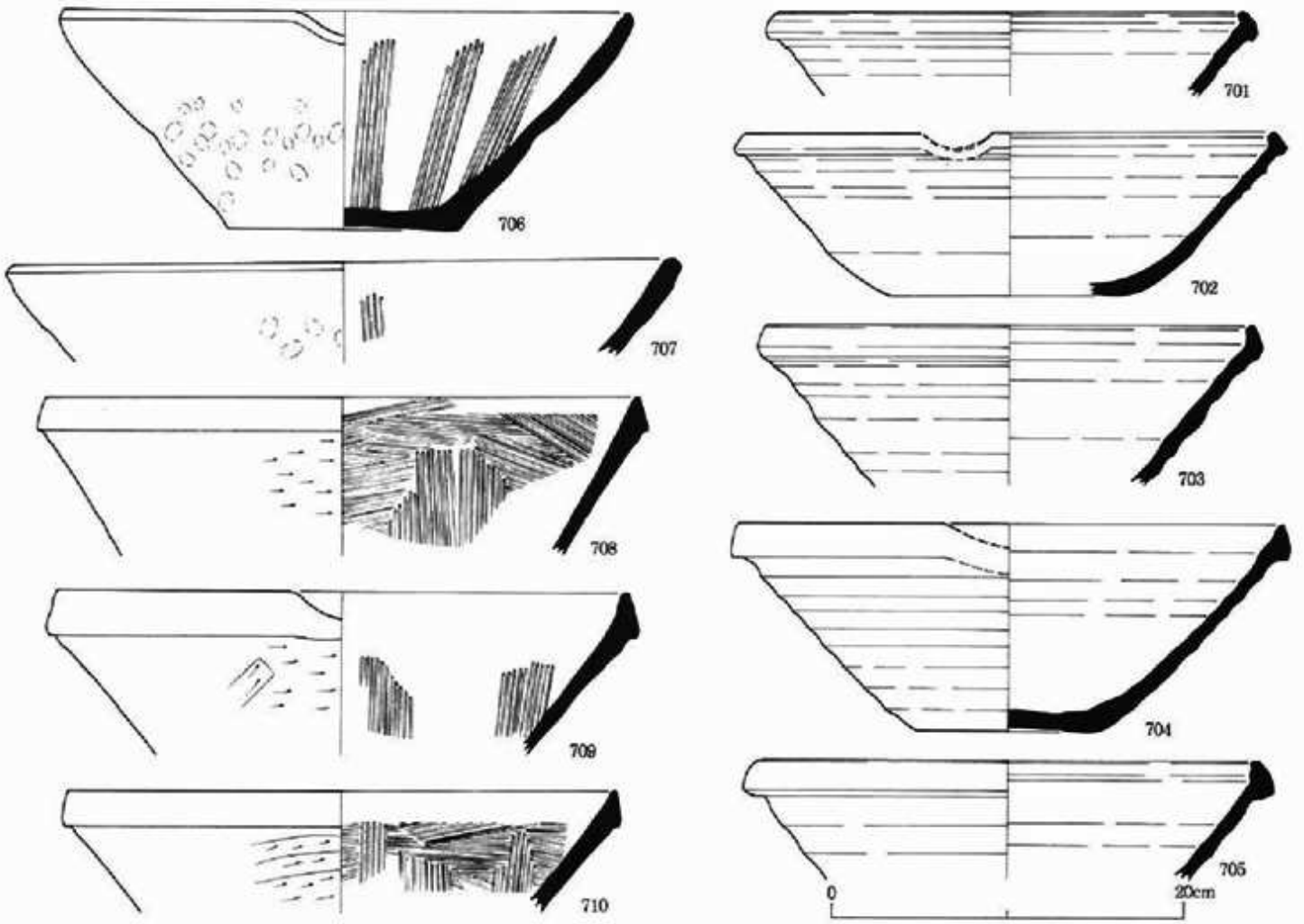
第32図　遺物包含層出土瓦器実測図



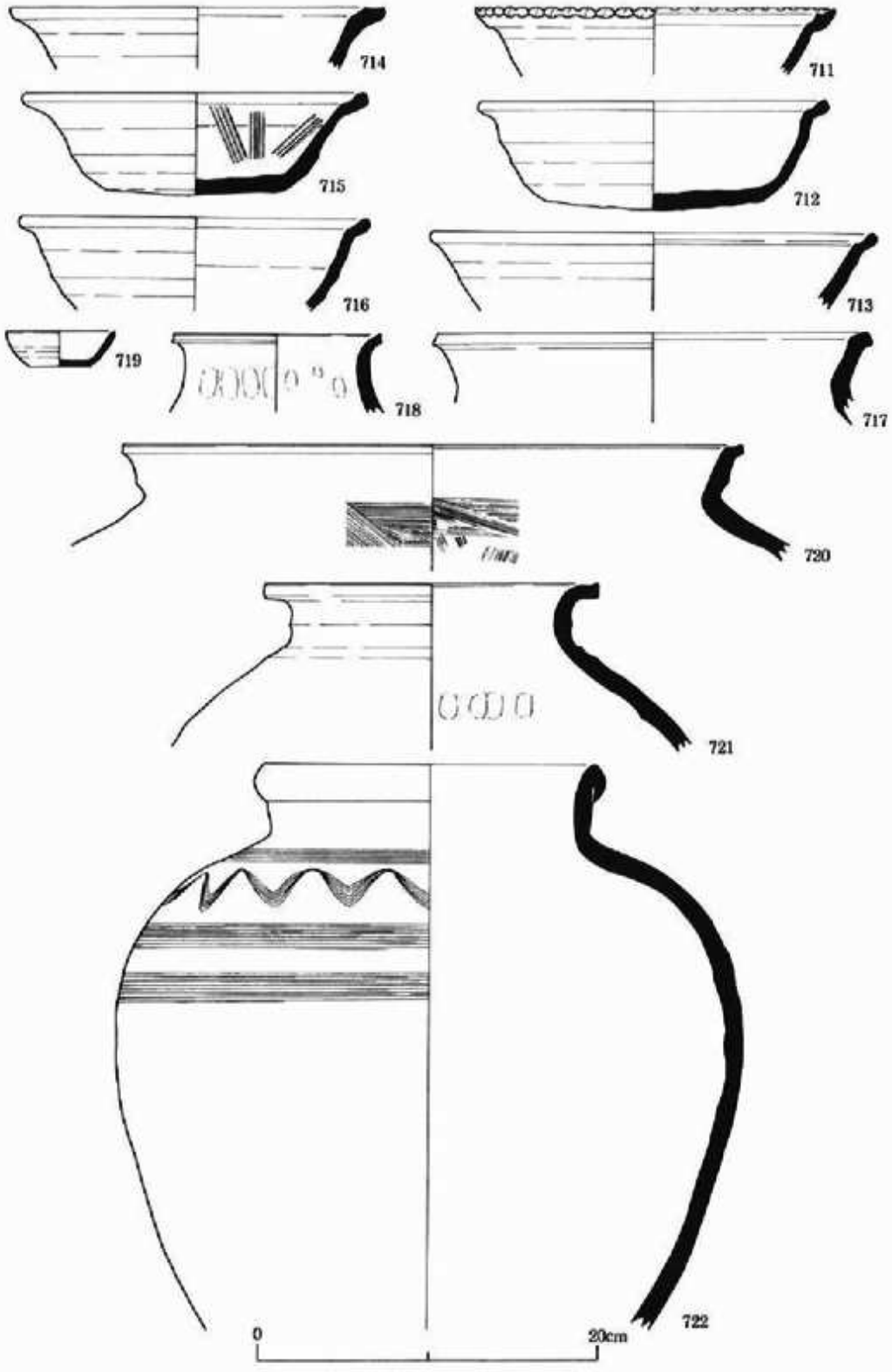
第33図　遺物包含層出土陶器実測図



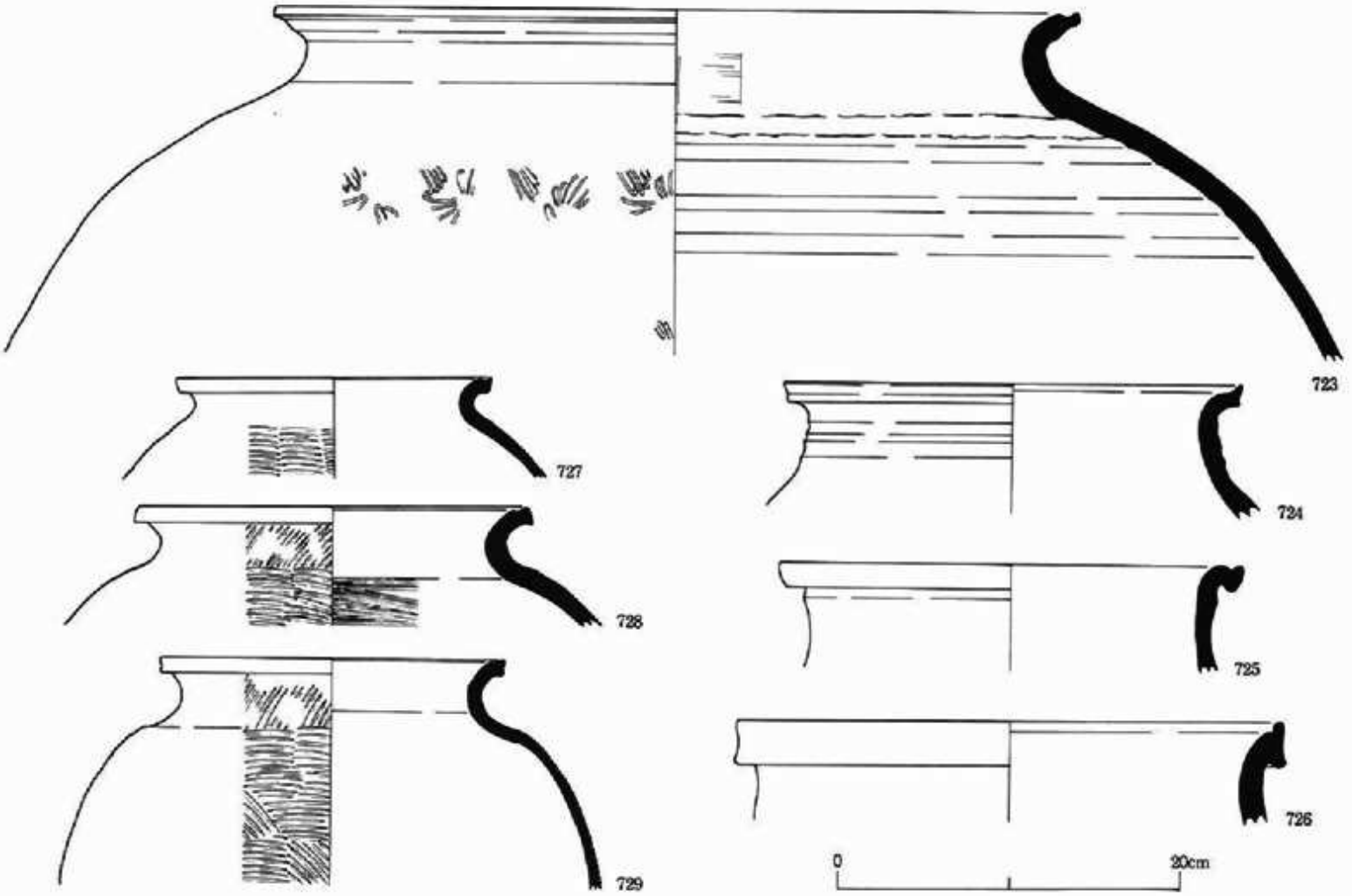
第34図　遺物包含層出土須恵器実測図



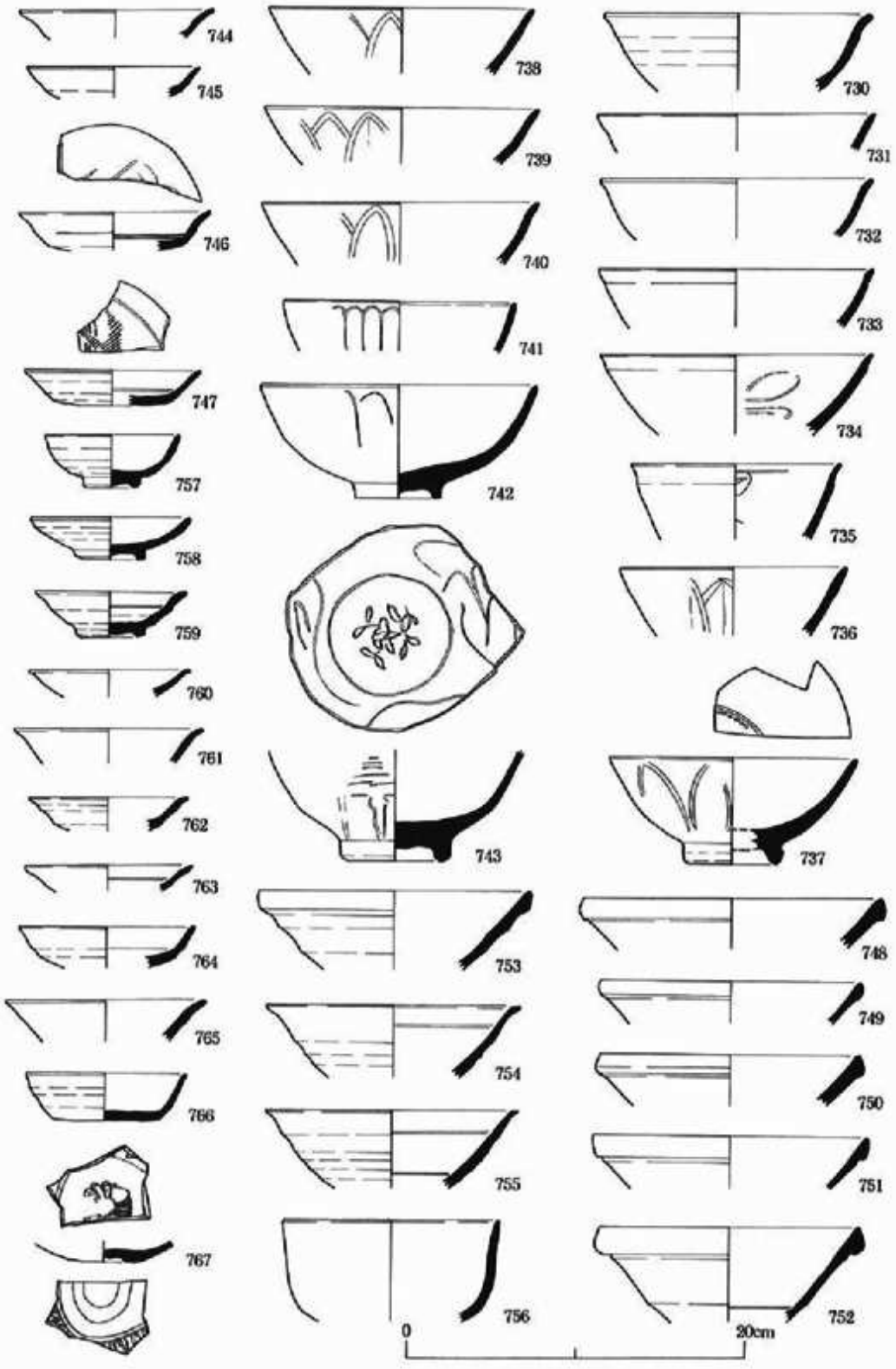
第35図　遺物包含層出土須恵器・瓦器実測図



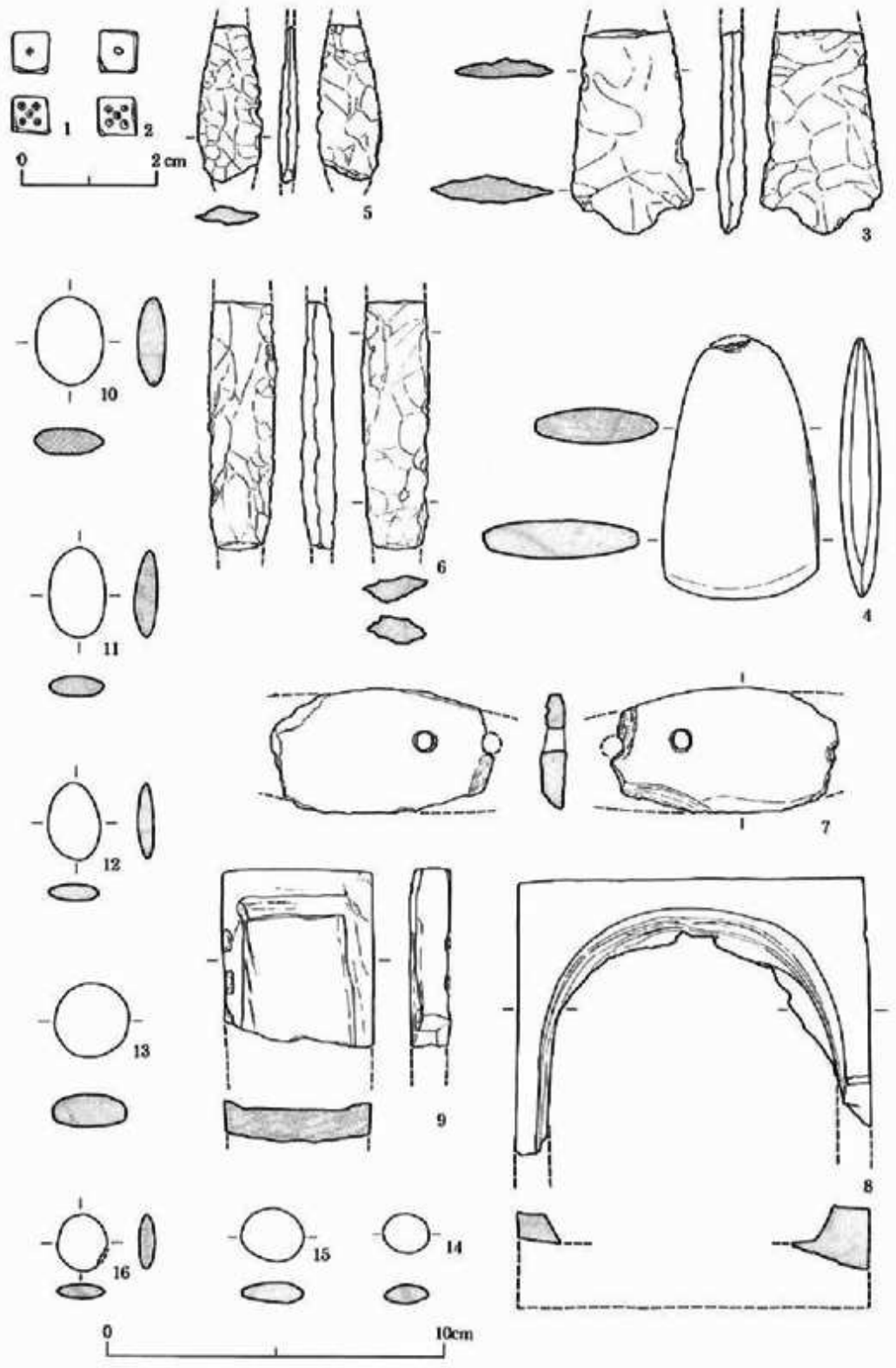
第36図　遺物包含層出土陶器実測図



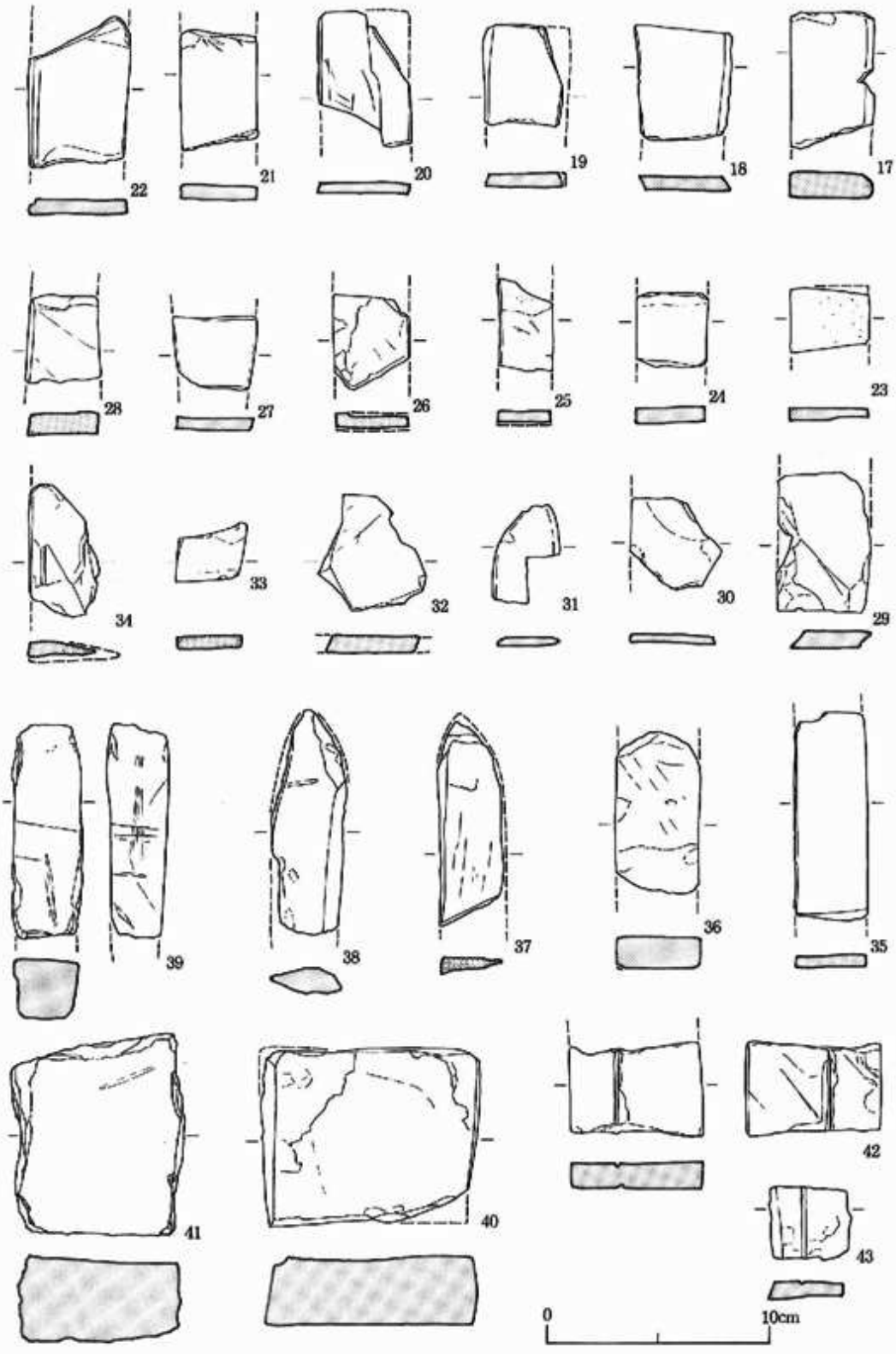
第37図　遺物包含層出土陶器・須恵器実測図



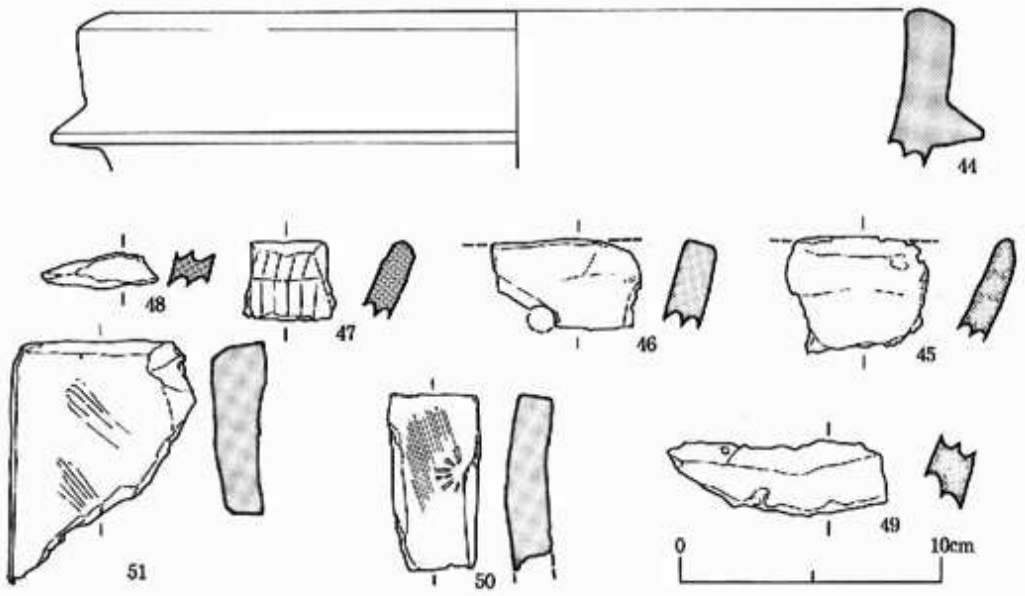
第38図　遺物包含層出土磁器実測図



第39図　石器・骨製品実測図


22
21
20
19
18
17
28
27
26
25
24
23
34
33
32
31
30
29
39
38
37
36
35
41
40
42
43
0
10cm

第40図　石器実測図



第41図　石器実測図

10～16は碁石である。円形や楕円形を呈し、大きさも大小がある。全体的に丁寧に研く。13は灰色、他は黒色である。歴史時代。

17～43は砥石である。幅が狭く、細長いものが多い。厚さも薄いものが大部分である。研ぎ痕の残るものもある。42・43は細い溝がある。歴史時代。

44～51は滑石製の石鍋である。44は体部が外上方に伸び、口縁端部が丸く終わる。口縁部のやや下に断面が三角形の鍔を削る。45～47は口縁部、48・49は体部の破片である。46は孔を穿つ。50・51は石鍋を二次加工しており、面を持つ。50は菊花状の文様を削る。歴史時代。

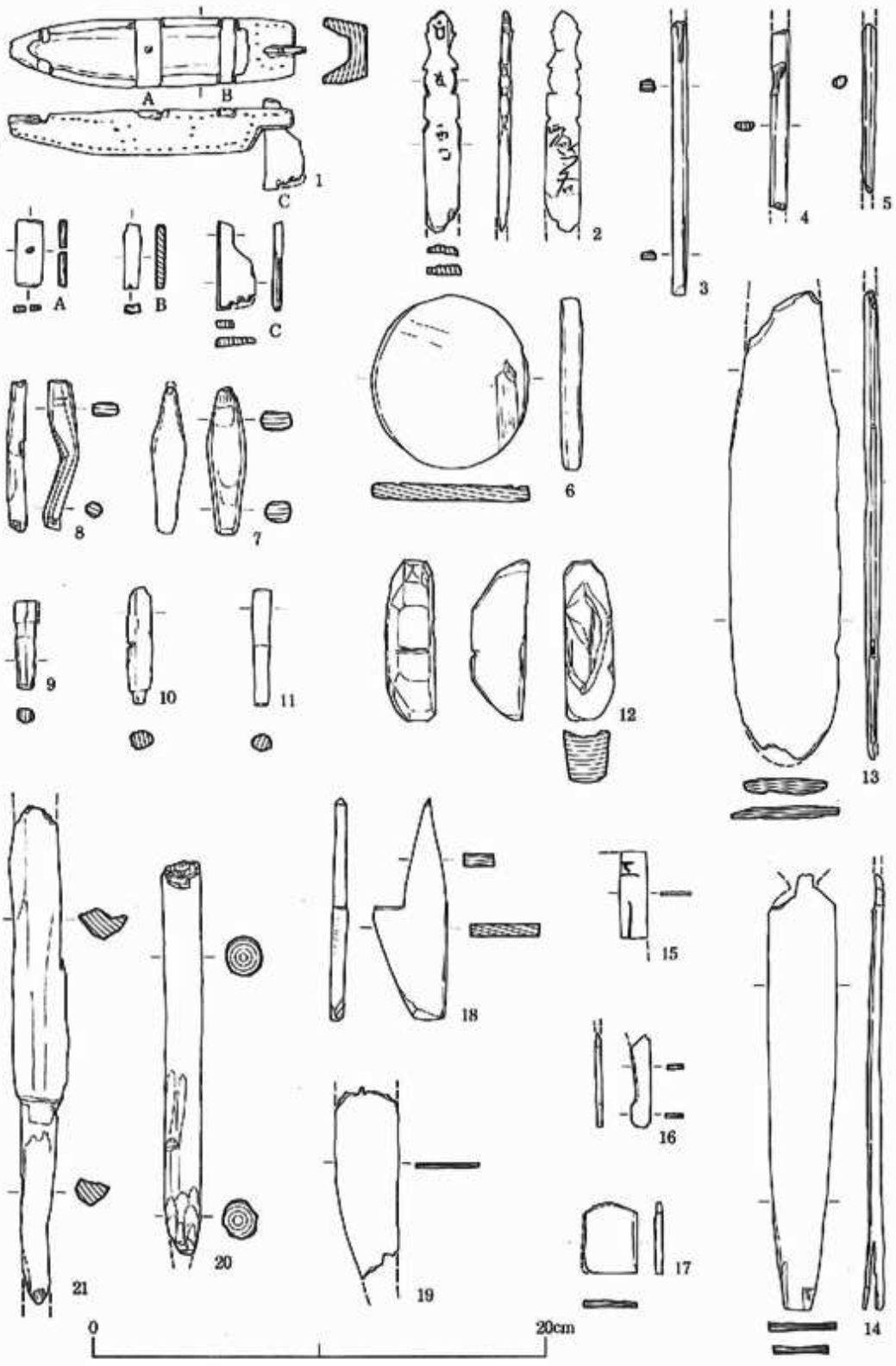
3．骨製品（第39図）

1・2はサイコロである。1辺が約6㎜を測るが、やや長方形を呈する。各面に1～6の小円孔を穿つ。2は二次焼成を受け、黒く焦げる。骨製品で記しているが、他の材質の可能性もある。焼土坑より土師器（60）と出土した。平安時代後期。

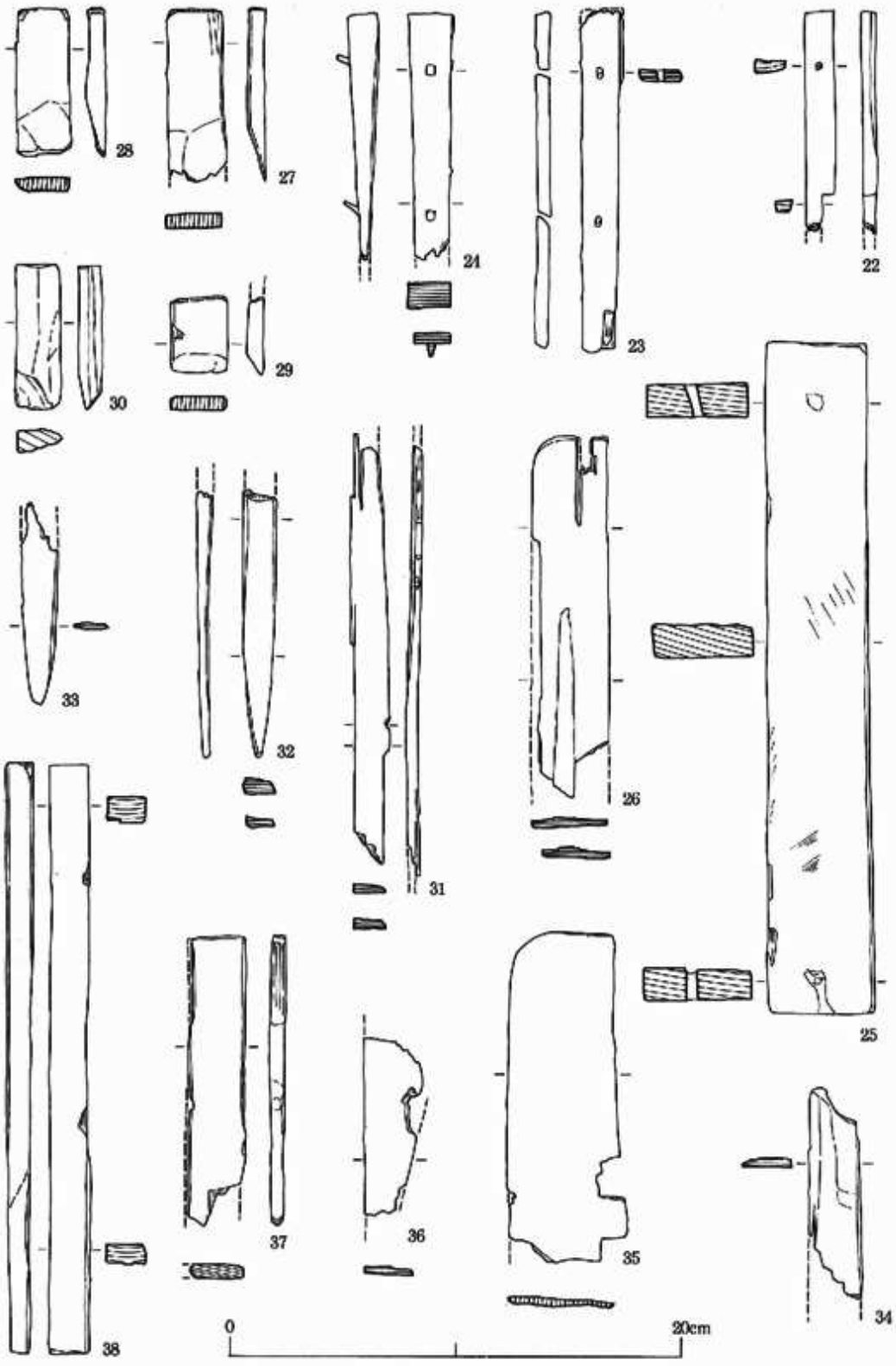
4．木製品（第42・43図）

木製品はA地区の落ち込み2より出土した。すべて15世紀のものである。以下、各木製品ごとに説明を記す。挿図の横断面図に描かれた弧は木取りを表す。また、樹種は同定したものではなく、肉眼観察によるものである。

1はミニチュアの船である。A～Cは各部品である。船体、台座、梶を組み合わした船である。船体は船首がやや尖り、船尾が直線的に終わる。船体は内側をU字型に刳り、底が平底である。船尾の断面はL字型を呈し、梶を挿入する切り込みを入れる。梶は下部に向かって幅広になる。船体上面の3ヵ所に台座を設置する抉りを入れる。中央の台座は帆柱の穴を施す。船



第42図　木製品実測図



第43図　木製品実測図

体の側面と船尾上面には釘を打った表現の刻点がある。全長12.4cm、最大幅3.0cm、最大厚2.0cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

2は五輪塔形板塔婆である。下部を欠損し、乾燥による変形が生じる。板材の両側縁に抉りを入れ塔婆とする。両面に凡字などの墨書が残る。残存長9.7cm、幅1.5cm、最大厚0.5cmを測る。針葉樹の柾目材を使用する。

3～5は箸である。すべて欠損しており、全形の判るものはない。棒材を荒く削って仕上げる。1は残存長12.1cm、径0.5cm、2は残存長8.0cm、径0.8cm、3は残存長7.5cm、径0.6cmを測る。針葉樹の割り材を使用する。

6は曲物容器の底である。全体を円形に削って仕上げる。径7.6cm、最大厚0.8cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

7は用途不明の木製品である。棒材の両端を細く削り、中央が最も幅広になる。残存長6.4cm、最大径1.4cmを測る。針葉樹の割り材を使用する。

8は用途不明の木製品である。棒材の一端を丸く、他の一端をL字形に削る。全長6.8cm、最大径1.0cmを測る。針葉樹の割り材を使用する。

9は用途不明の木製品である。棒材の一端を丸く、他の一端を瘤状に削る。全長4.0cm、最大径1.0cmを測る。針葉樹の割り材を使用する。

10は用途不明の木製品である。棒材の一端を細く削る。全長5.2cm、最大径1.0cmを測る。針葉樹の割り材を使用する。

11は用途不明の木製品である。棒材の両端を丸く削る。全長5.2cm、最大径0.8cmを測る。針葉樹の割り材を使用する。

12は用途不明の木製品である。形状は台形を呈する。側縁は直線的、小口は丸く削る。上面に溝状の切り込みを入れる。全長7.2cm、最大幅2.1cm、最大厚2.4cmを測る。針葉樹の割り材を使用する。

13は杓子である。掘り部と身の先端部を欠損する。全体的に細長く仕上げる。残存長20.8cm、最大幅4.9cm、最大厚0.7cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

14は用途不明の木製品である。板材の一端を尖り気味に削り、他の一端の両側縁に抉りを入れる。残存長19.2cm、最大幅3.0cm、最大厚0.4cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

15は墨書の残る木製品である。文字は不明である。残存長3.8cm、残存幅1.2cm、最大厚0.2cmである。針葉樹の板目材を使用する。

16は用途不明の木製品である。小口の上部に抉りを入れる。残存長4.1cm、残存幅1.0cm、最大厚0.3cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

17は将棋の駒状を呈する木製品である。小口の一端を山形に、他の一端を直線的に削る。全長3.1cm、残存幅2.4cm、最大厚0.3cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

18は用途不明の木製品である。板材の一側縁をL字形に、他の一側縁を丸く削る。全長9.7cm、最大幅3.2cm、最大厚0.6cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

19は用途不明の木製品である。板材の一側縁を丸く、他の一側縁を直線的に削る。残存長8.5cm、最大幅3.0cm、最大厚0.2cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

20は杭である。小口の一端を鋭利に尖らす。円周部は自然面で残す。残存長17.2cm、径1.6cmを測る。針葉樹の棒材を使用する。

21は角材である。残存長22.0cm、径2.0cm測る。針葉樹の割り材を使用する。

22は有孔抉り入り板である。小孔を1孔と抉りを1ヶ所に施す。残存長9.6cm、最大幅1.3cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

23は有孔板である。小孔を2孔穿つ。全長15.0cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

24は有孔板である。小孔を2孔穿つ。孔内には木釘が残る。残存長10.9cm、最大幅2.0cm、最大厚1.1cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

25は有孔板である。小孔を2孔穿つ。全長29.5cm、最大幅4.4cm、最大厚1.4cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

26は有孔板である。小孔を1孔穿つ。小口は丸く削る。残存長16.0cm、最大幅3.4cm、最大厚0.4cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

27は用途不明の木製品である。小口の一端を斜めに削る。残存長7.6cm、最大幅2.6cm、最大厚0.6cmを測る。針葉樹の柾目材を使用する。

28は用途不明の木製品である。小口の一端を斜めに削る。全長6.4cm、最大幅2.3cm、最大厚0.6cmを測る。針葉樹の柾目材を使用する。

29は用途不明の木製品である。小口の一端を斜めに削る。残存長3.4cm、最大幅2.5cm、最大厚0.6cmを測る。針葉樹の柾目材を使用する。

30は用途不明の木製品である。小口の一端を斜めに削る。全長6.6cm、最大幅2.0cm、最大厚1.0cmを測る。針葉樹の柾目材を使用する。

31は用途不明の木製品である。側縁に刻みを入れる。残存長19.0cm、最大幅1.6cm、最大厚0.4cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

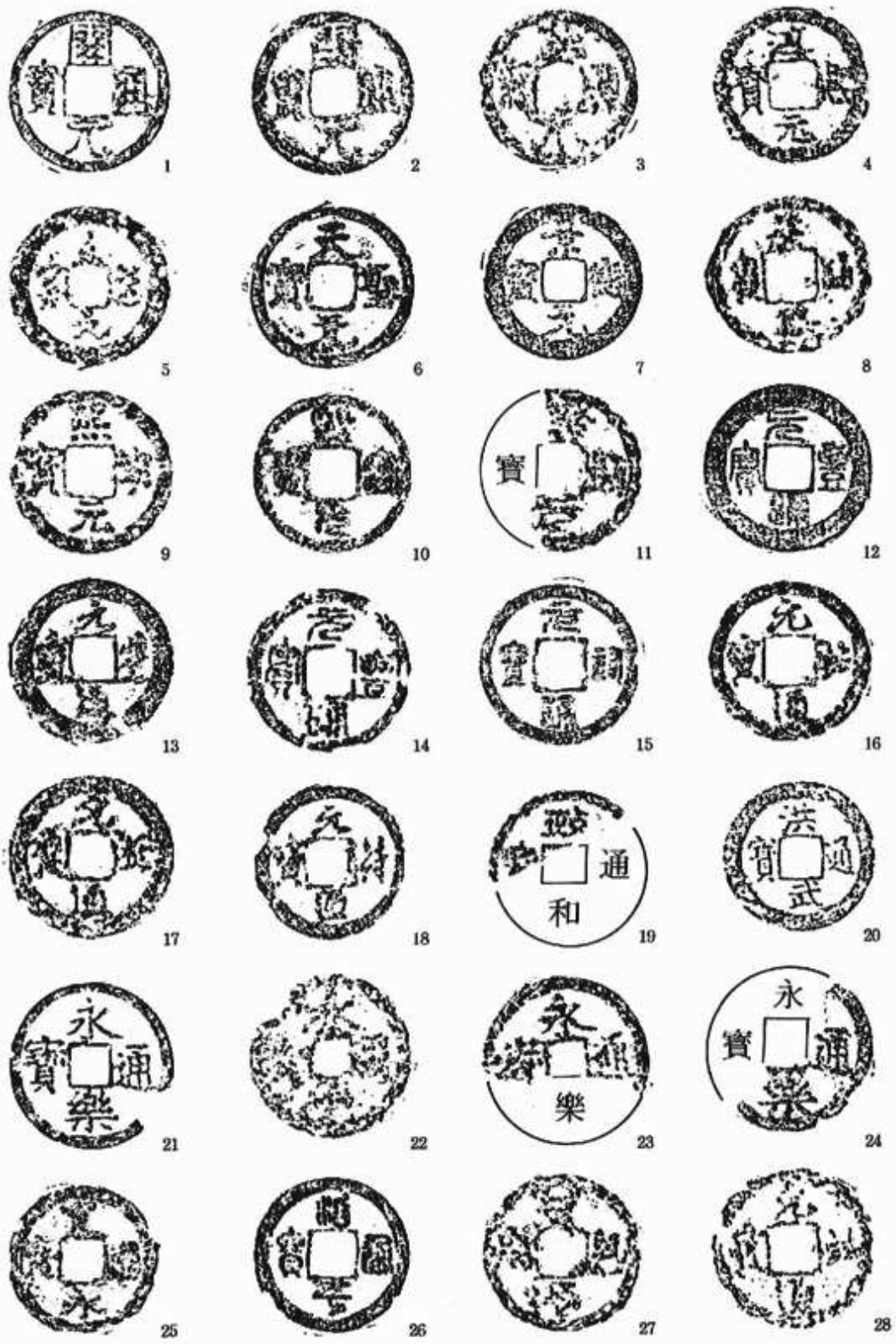
32は尖頭板である。小口の一端を尖らす。残存長11.8cm、最大幅1.5cm、最大厚0.8cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

33は尖頭板である。小口の一端を尖らす。残存長9.0cm、最大幅1.6cm、最大厚0.4cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

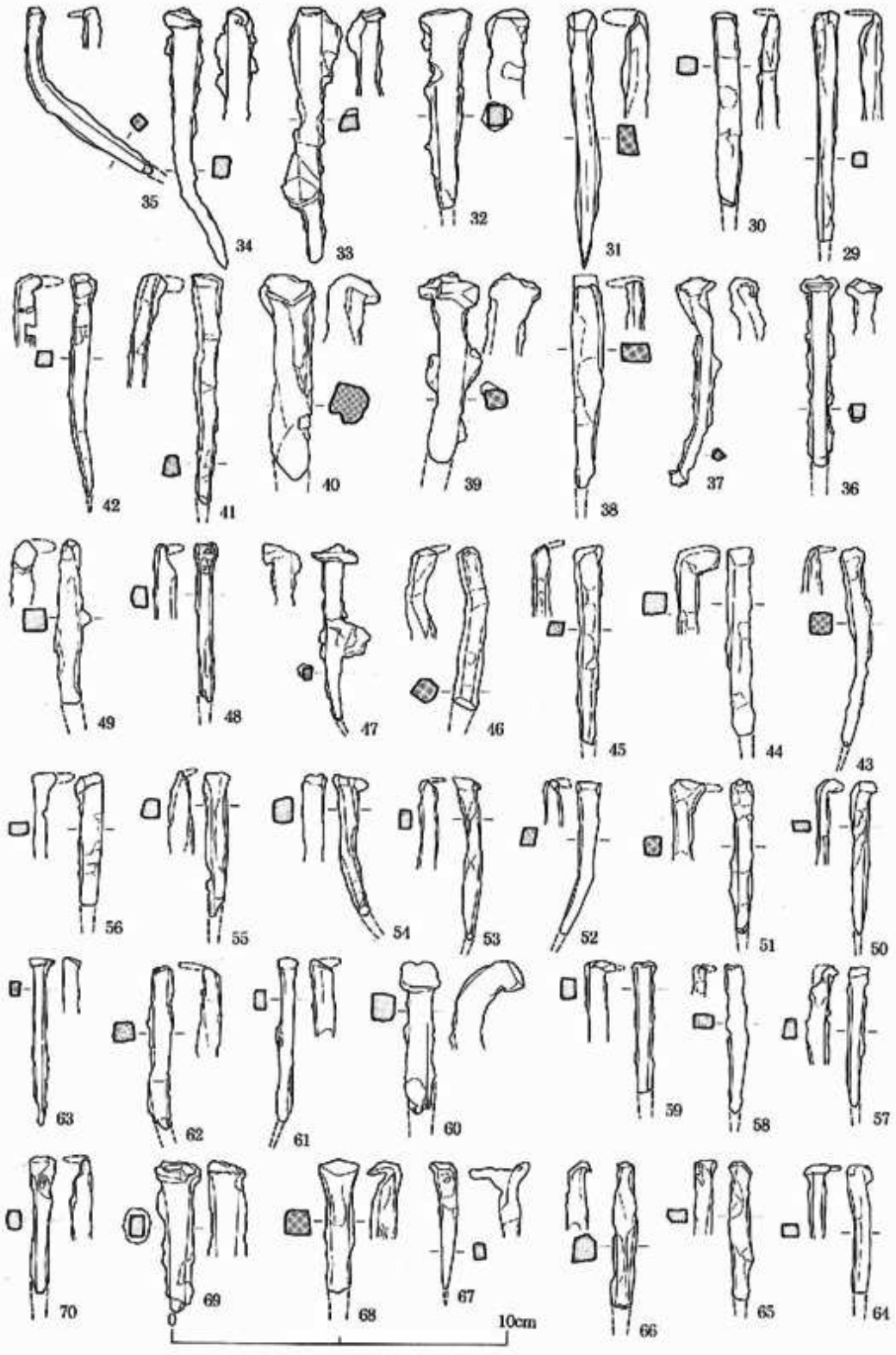
34は抉り入り板である。小口の一端を抉る。残存長9.4cm、最大幅2.3cm、最大厚0.5cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

35は板材である。小口の一端を丸く削る。残存長14.5cm、最大幅5.2cm、最大厚0.3cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

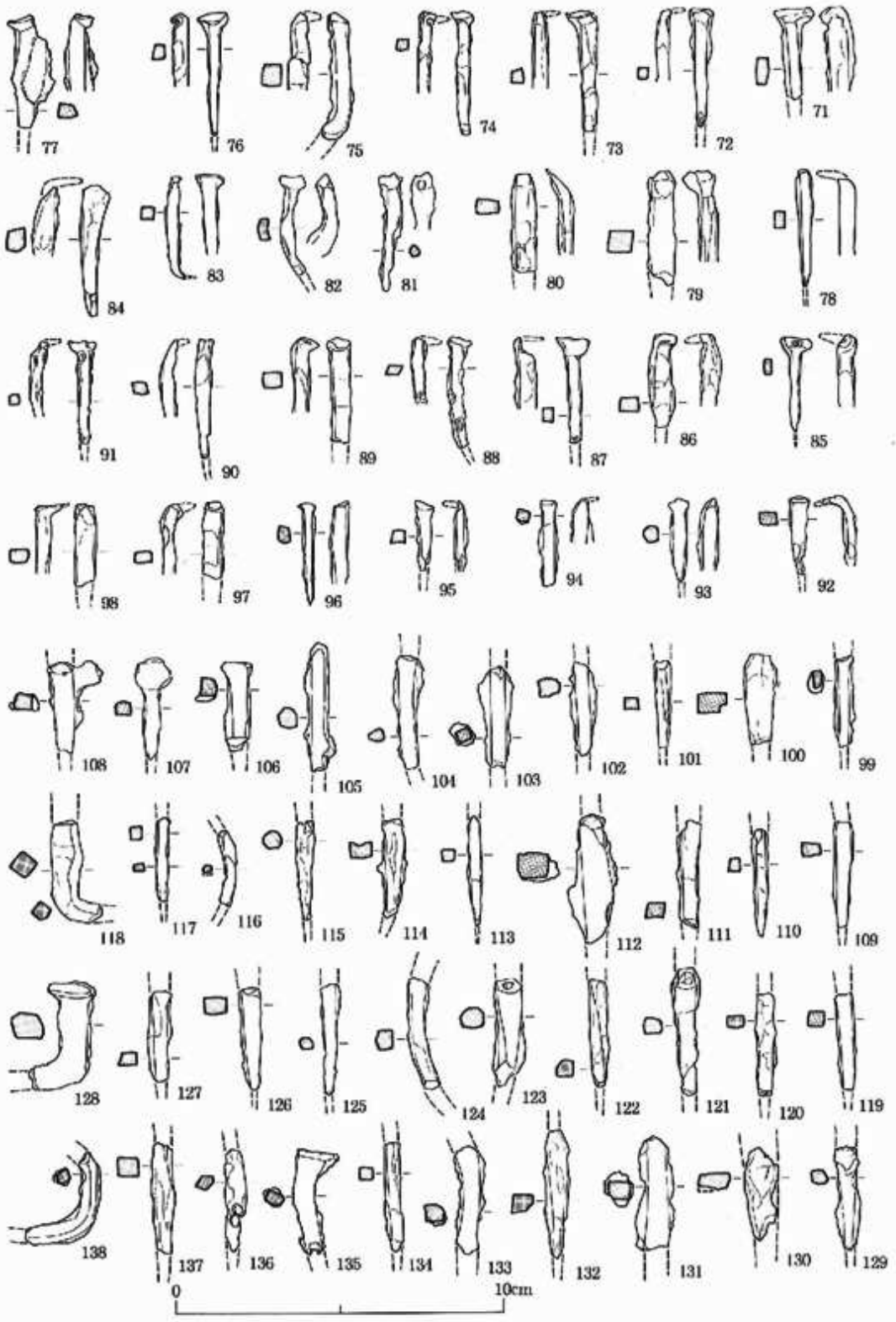
36は板材である。上部に向かって幅広になる。残存長8.0cm、最大幅2.6cm、最大厚0.3cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
寶
12
13
14
15
16
17
18
19
和
20
武
21
永
寶
通
樂
22
23
樂
24
永
寶
通
樂
25
26
27
28

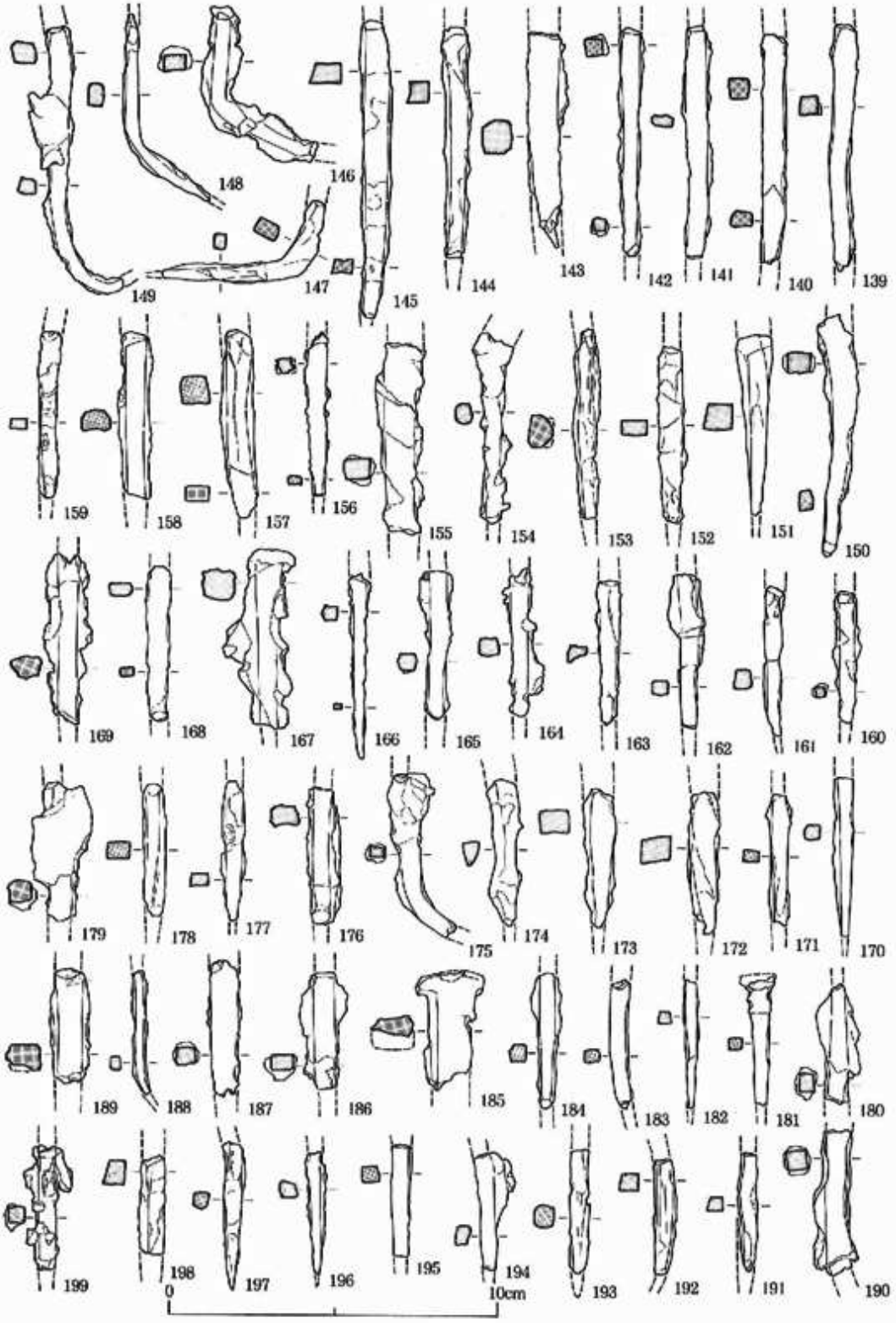
第44図　銭貨拓影（実寸）



第45図　金属製品実測図



第46図　金属製品実測図



第47図　金属製品実測図

37は板材である。残存長12.9cm、最大幅2.4cm、最大厚0.8cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

38は板材である。全長26.2cm、最大幅1.8cm、最大厚1.2cmを測る。針葉樹の板目材を使用する。

5．金属製品（第44～47図）

金属製品は銭貨と鉄釘がある。各地区の遺構、遺物包含層より出土した。銭貨は総数が28枚である。唐銭は開元通宝（1～3）がある。北宋銭は淳化元宝（4）、至道元宝（5）、天聖元宝（6）、景徳元宝（7）、嘉祐通宝（8）、熙寧元宝（9～11）、元豊通宝（12～14）、元祐通宝（15～17）、元符通宝（18）、政和通宝（19）がある。明銭は洪武通宝（20）、永楽通宝（21～24）がある。他に寛永通宝（25）と文字の判読不可能なもの（26～28）がある。銭種は14種類あり、開元通宝、熙寧元宝、元豊通宝、元祐通宝、永楽通宝が大部分である。保存状態の悪いものが多い。穴蔵より出土した13・17・20・22・23は二次焼成を受けて黒色に変化している。29～171は鉄釘である。頭部は逆L字形を呈し、先端部に向かって細くなる。横断面が方形や長方形を呈する。大形と小形のものがある。

6．土製品（第48図）

土製品は平安後期～近世のものが遺物包含層より出土した。

1～3は型作りの土仏である。蓮座に座した半肉彫りの阿弥陀如来である。手を下で合掌する。やや摩滅しているが顔は目や口が残る。光背を有し、縁辺には円形浮文を配する。下部より上部に向かって棒状の円孔が残っており、製作時の痕跡と考えられる。1は残存高6.7cm、最大幅4.9cm、2は全高8.4cm、最大幅5.0cm、3は残存高3.4cm、残存幅4.0cmを測る。平安時代後期以降。

4は型作りの土仏である。袈裟状の衣が表現されている。上部より斜めに棒状の円孔が残っており、製作時の痕跡と考えられる。残存高6.1cm、最大幅5.4cm測る。平安時代後期以降。

5は土製品で記しているがミニチュア甑の可能性が高い。体部が大きく外上方に伸び、口縁端部が丸く終わる。内外面に接合痕が残る。底部は焼成前に小孔を穿つ。時期不明。

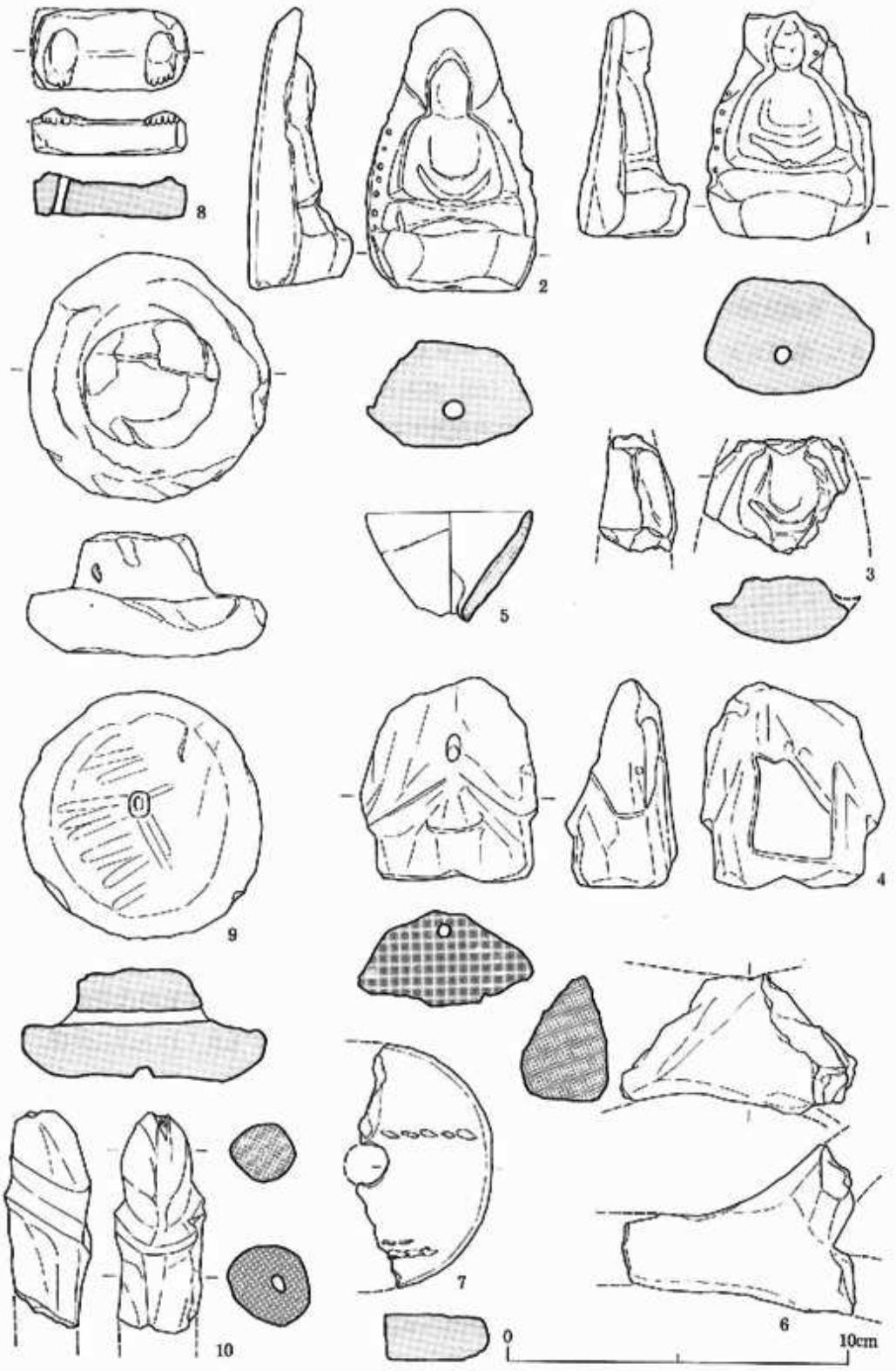
6は土馬である。体部の一部が残り、他は欠損する。平安時代後期。

7は瓦を転用した円盤状土製品である。瓦の円周部を研磨し、中央部に円孔を穿つ。外面に縄目による叩き痕がある。時期不明。

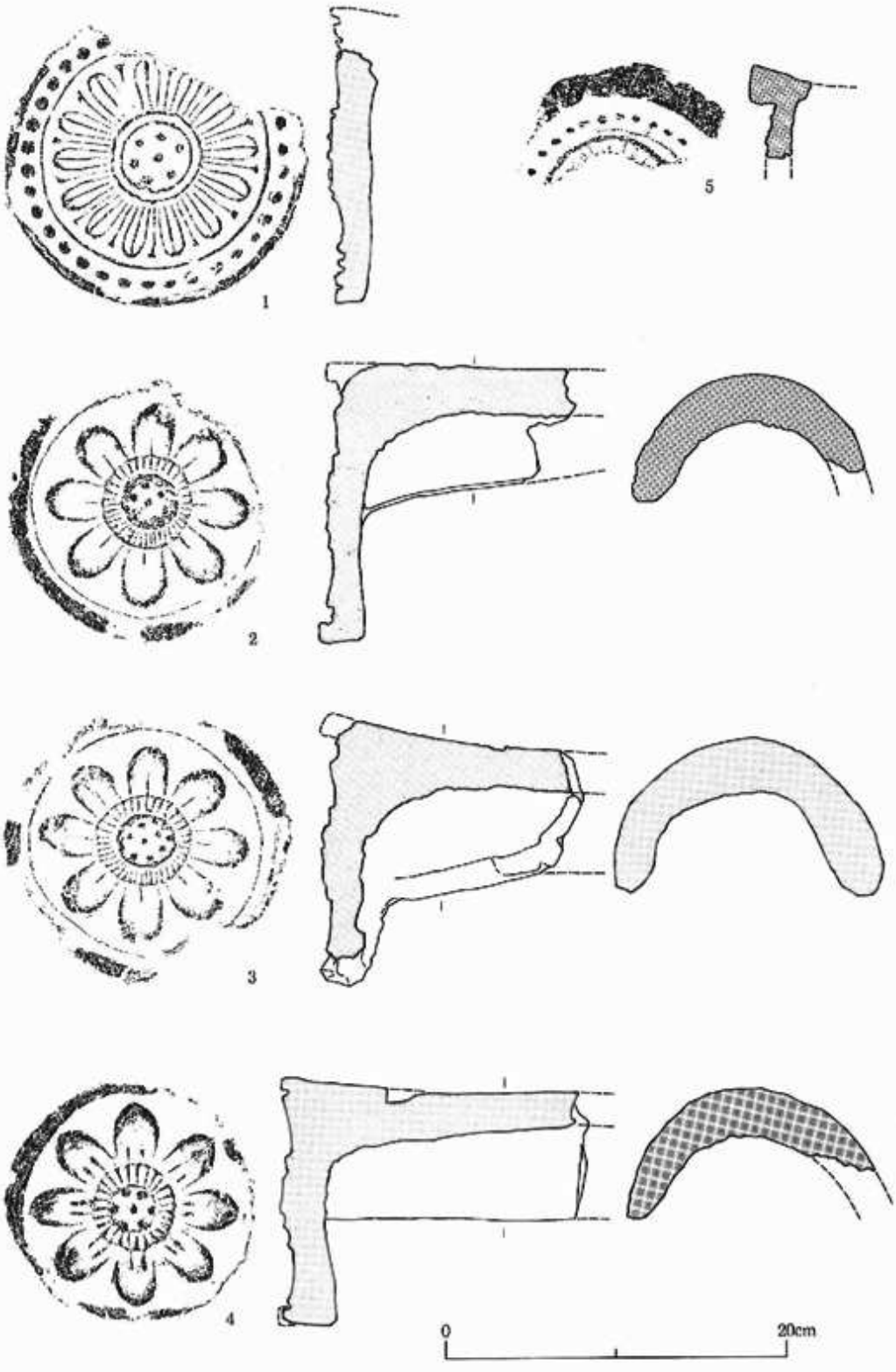
8は板に足を描いた土製品である。板は隅丸長方形を呈し、陽刻の足を施す。短辺の片側に小円孔を1孔穿つ。近世。

9は当て具状を呈する土製品である。円形の中央に山形を呈する握り部を施す。体部は外上方に反る。裏面中央が丸く凹む。握り部に小孔が貫通する。時期不明。

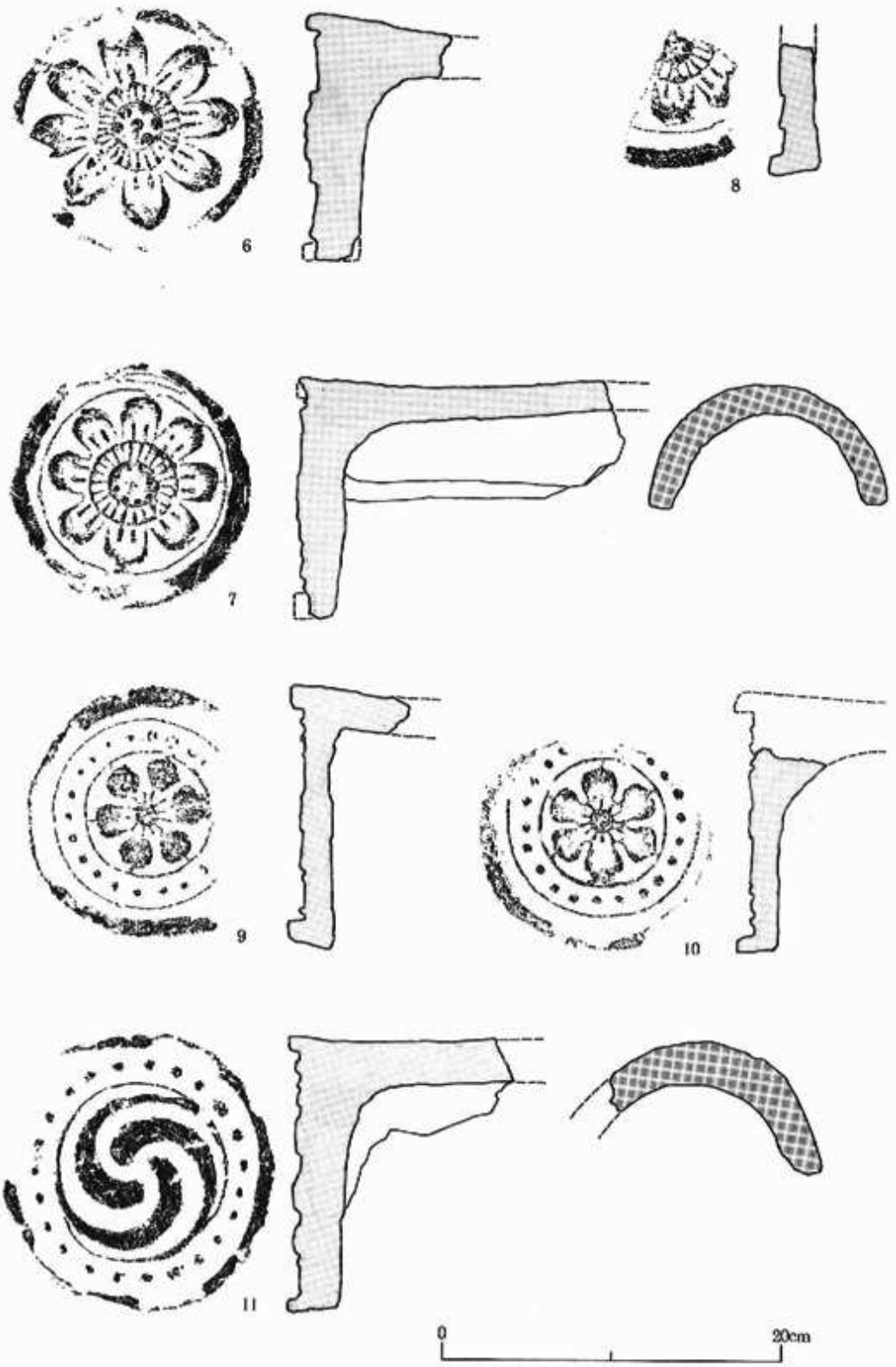
10は男根状土製品である。下部を欠損する。中央に小孔を穿つ。時期不明。



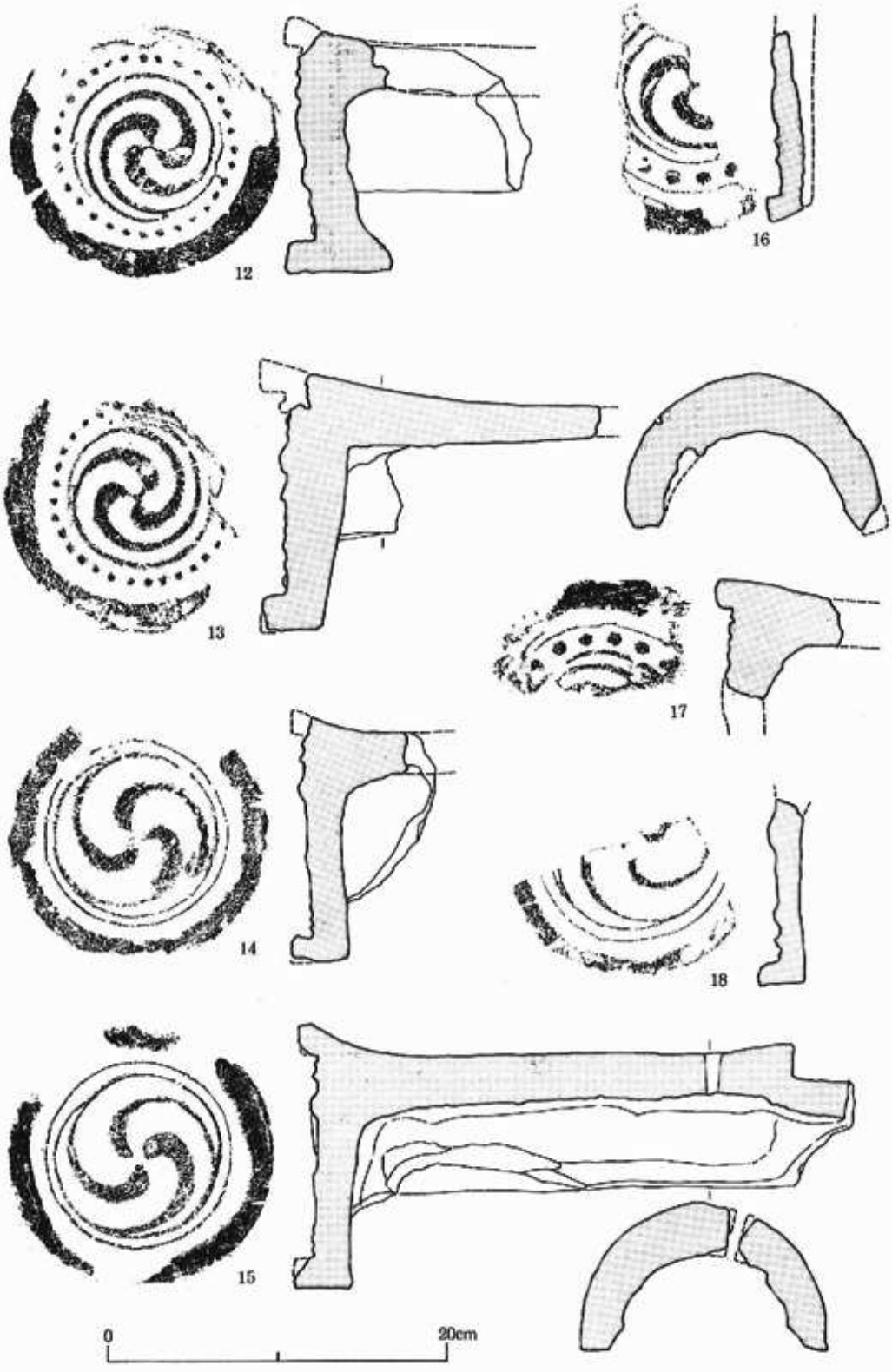
第48図　土製品実測図



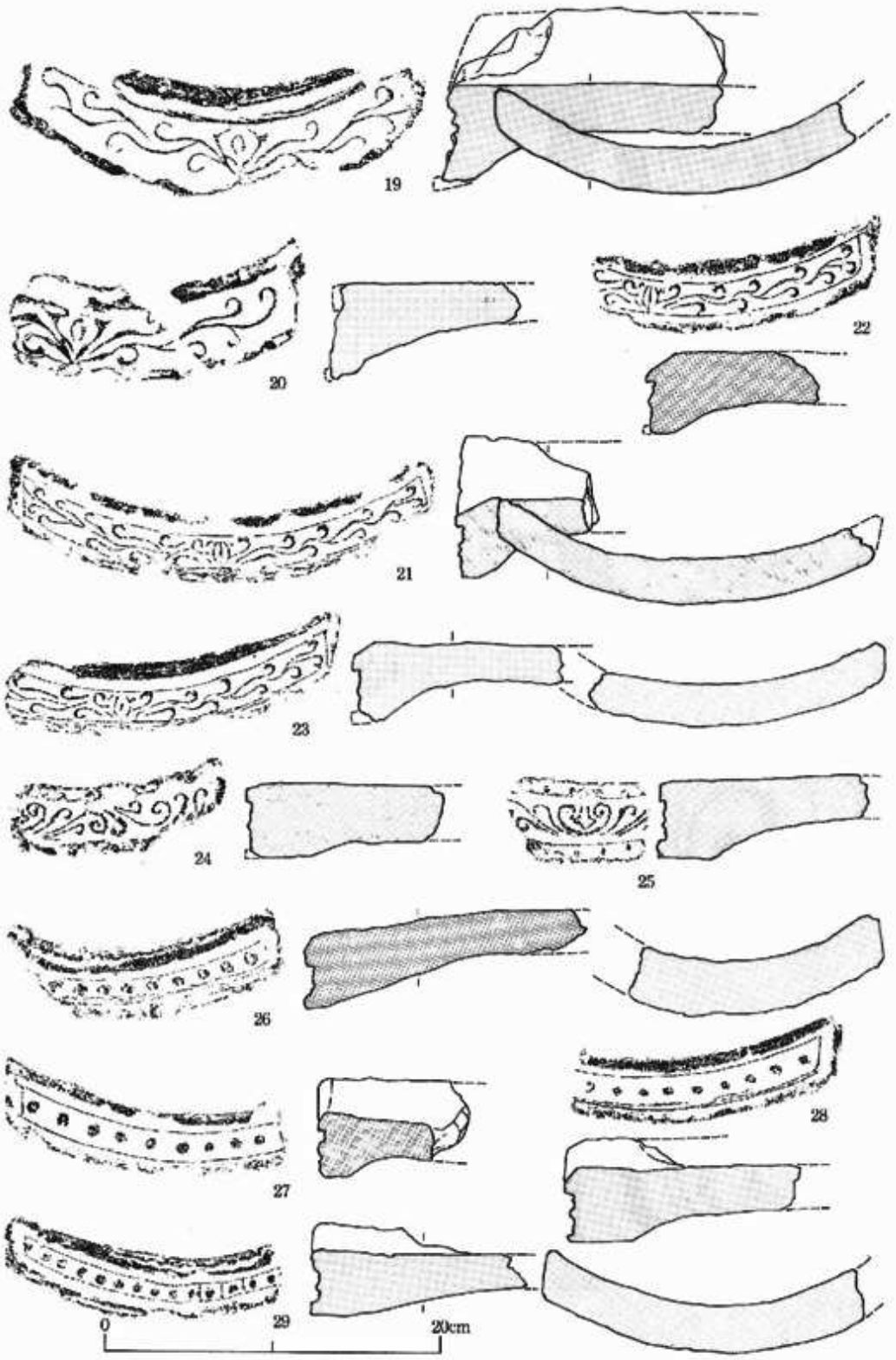
第49図　瓦拓影・実測図



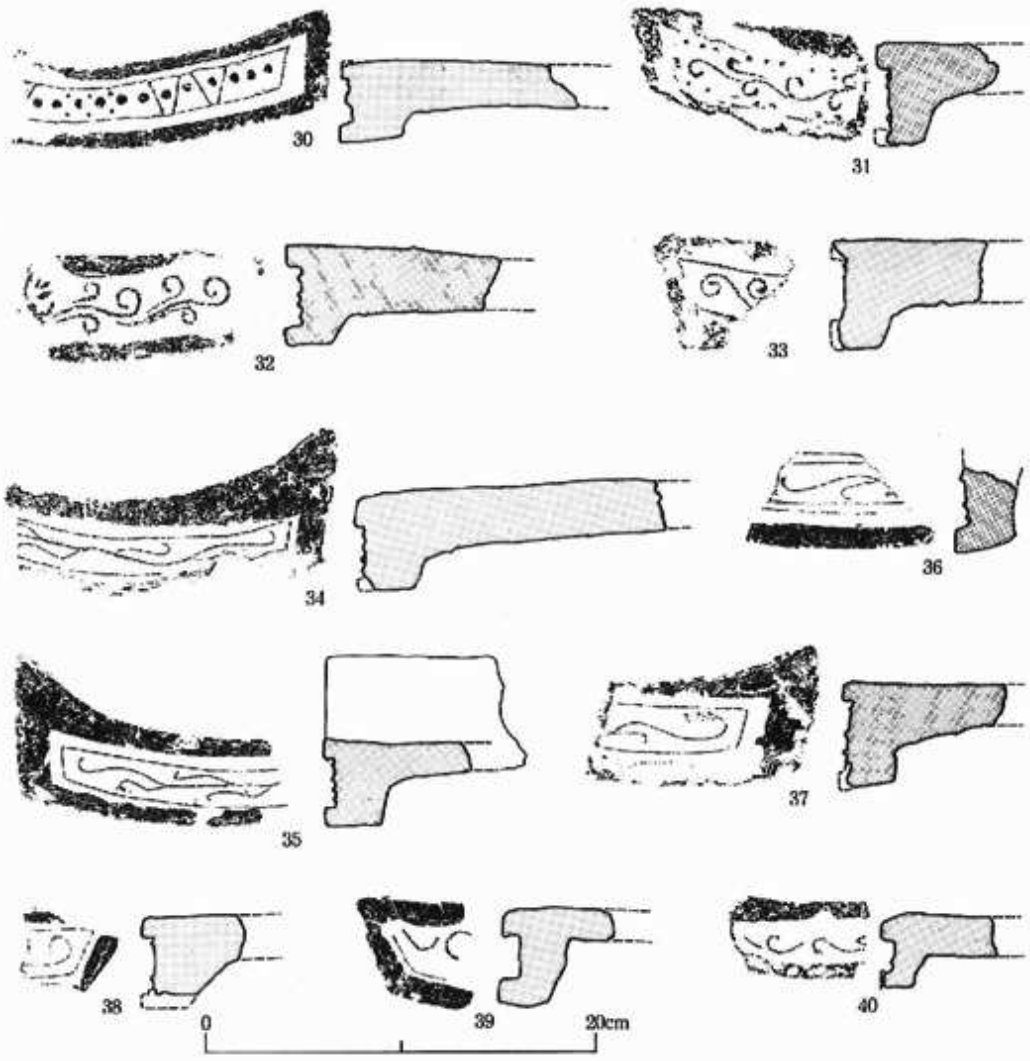
第50図　瓦拓影・実測図



第51図　瓦拓影・実測図



第52図　瓦拓影・実測図



第53図　瓦拓影・実測図

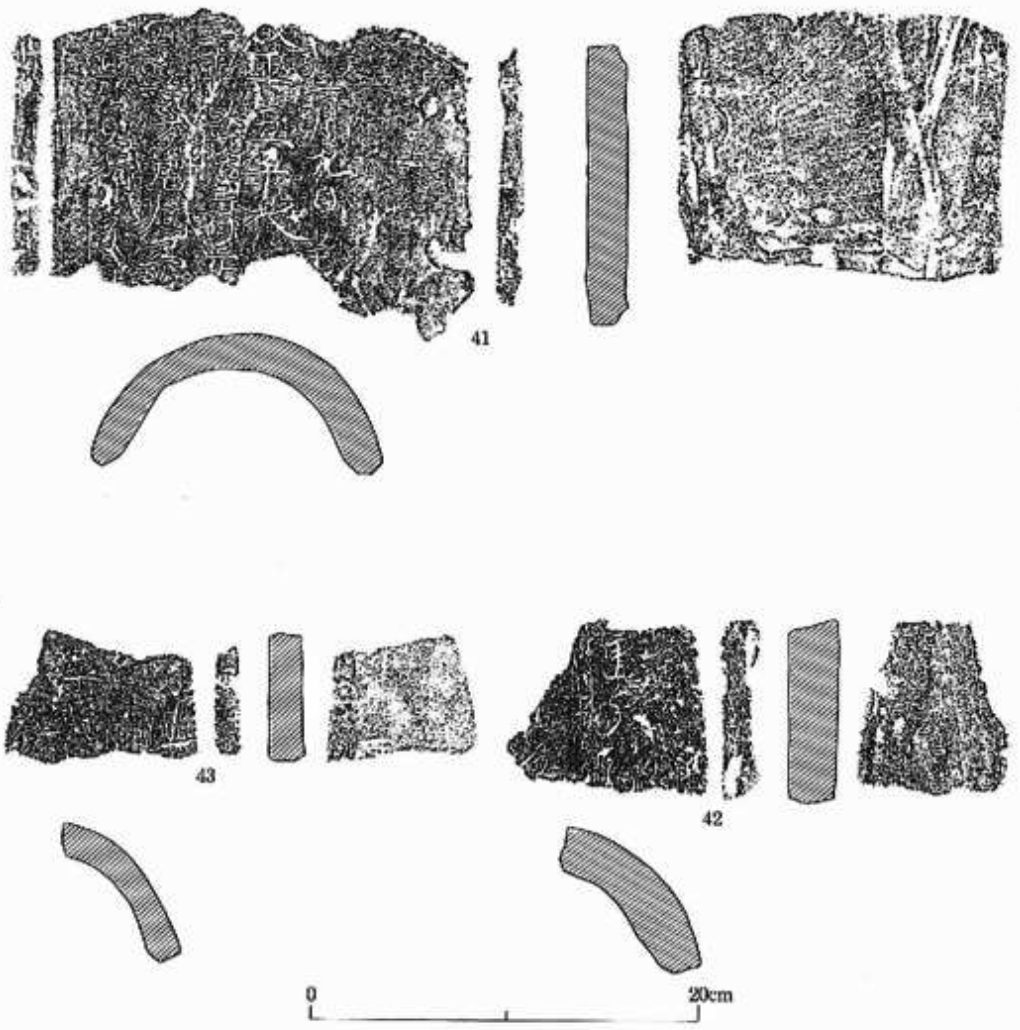
7．瓦（第49～56図）

瓦は飛鳥～室町時代のものが多量に出土している。丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦、飾り瓦などがある。出土量は丸瓦、平瓦が多い。

1は素弁蓮華文軒丸瓦である。外区と内区の境に一条の圏線を廻らす。内区は中房に1＋6の蓮子と13枚の蓮弁を配す。外区には連珠を施す。内面はナデで仕上げる。東大阪市河内寺跡出土の端丸瓦第II形式と同形式である。飛鳥時代後期。

2・3は素弁蓮華文軒丸瓦である。中房に1＋8の蓮子を配し、その周辺に雄芯帯と8枚の蓮弁を施す。蓮華文の外側には一条の圏線を廻らす。丸瓦凸面はケズリ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。堺市法華寺跡より同形式が出土。平安時代後期。

4・6は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房に1＋6の蓮子を配し、その周辺に雄芯帯と8枚の蓮弁を施す。丸瓦凸面はケズリ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。瓦当と丸瓦の境は接合時



第54図　瓦拓影・実測図

の強いユビナデが残る。平安時代後期。

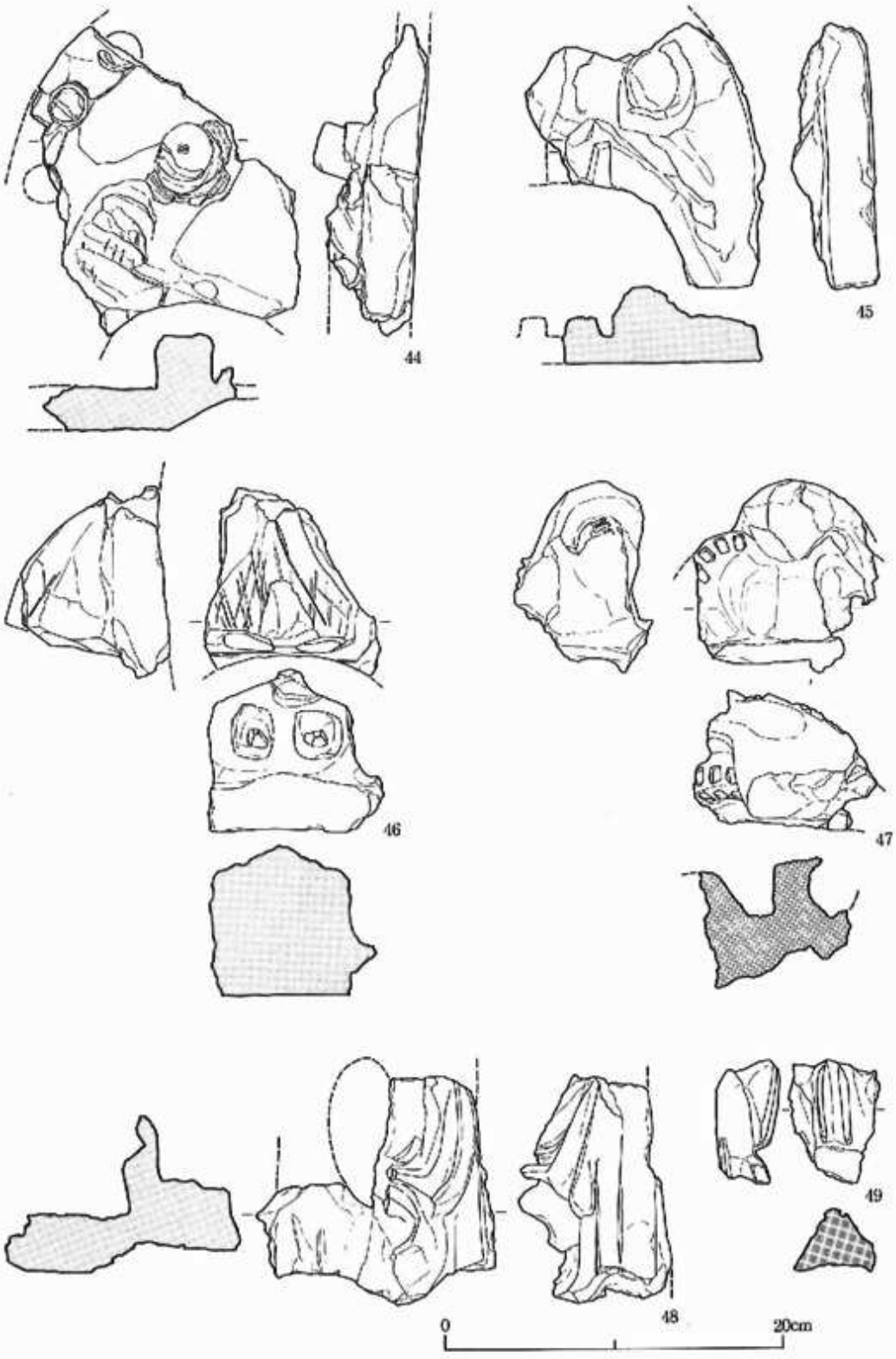
5は連珠が残る軒丸瓦である。内面に剝離痕が残る。時期不明。

7・8は複弁蓮華文軒丸瓦である。中房に1＋8の蓮子を配し、その周辺に雄芯帯と8枚の蓮弁を施す。蓮華文の外側には一条の圏線を廻らす。丸瓦凸面はケズリ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。平安時代後期。

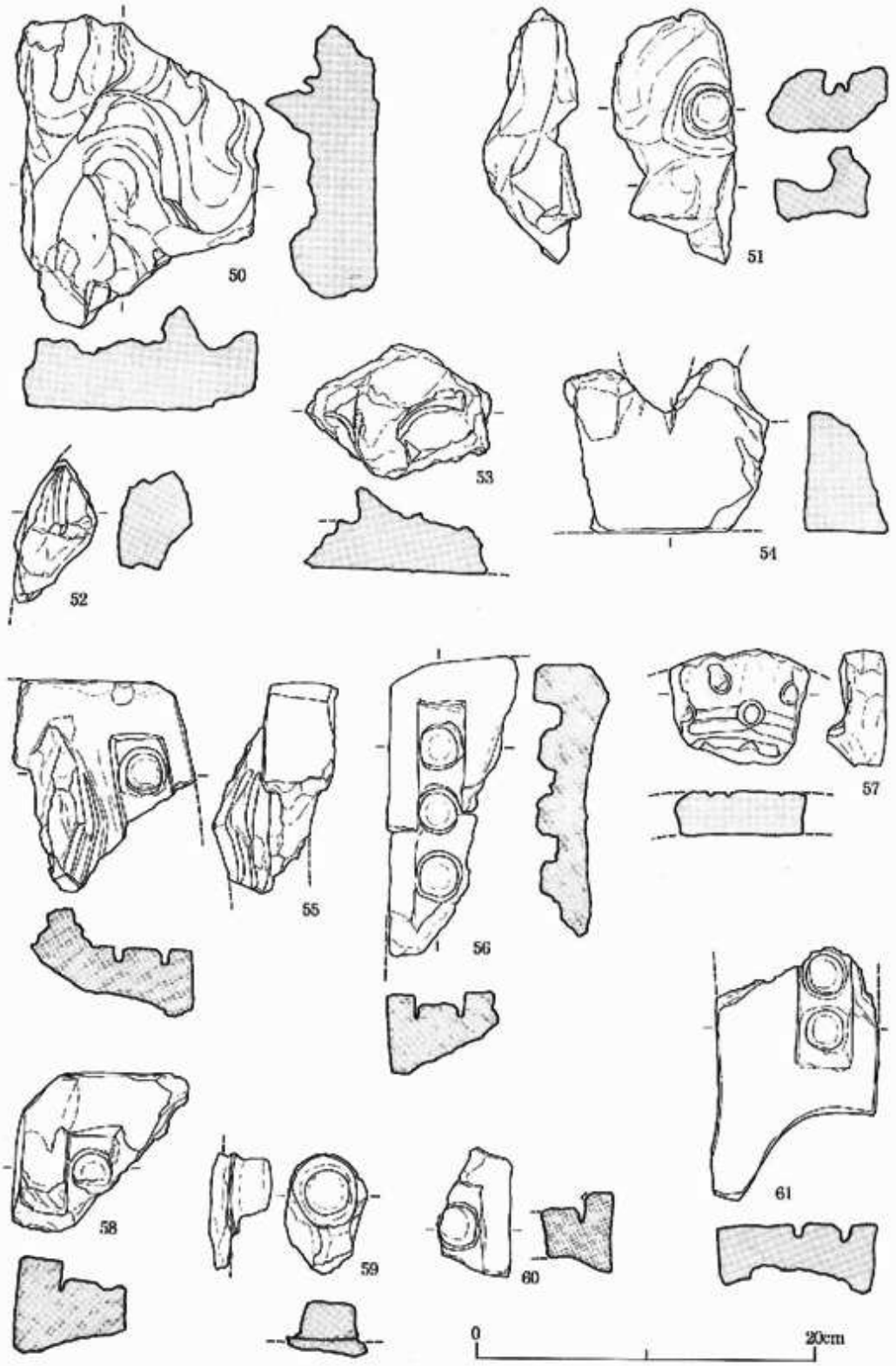
9・10は素弁蓮華文軒丸瓦である。中房の蓮子は消失する。雄芯帯と6枚の蓮弁を施す。蓮華文の外側に2条の圏線を廻らす。圏線間に連珠を施す。丸瓦凸面はケズリ、凹面はナデで仕上げる。東大阪市若江遺跡より同形式が出土。平安時代後期～鎌倉時代。

11は巴文軒丸瓦である。中央に右廻りの三巴文を配し、外側に連珠を廻らす。丸瓦凸面はケズリ、凹面は布目の後を粗いナデで仕上げる。瓦当内面はケズリ。平安時代後期～鎌倉時代。

12・13は巴文軒丸瓦である。中央に左廻りの三巴文を配し、外側に連珠を廻らす。丸瓦凸面はケズリ、凹面はナデで仕上げる。室町時代。



第55図　瓦実測図



第56図　瓦実測図

14・15は巴文軒丸瓦である。中央に右廻りの三巴文を配し、外側に一条の圏線を廻らす。丸瓦凸面はナデ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。15は釘穴が残る。室町時代。

16・17は巴文軒丸瓦である。中央に左廻りの三巴文を配し、外側に連珠と一条の圏線を廻らす。内面はナデで仕上げる。室町時代。

18は巴文軒丸瓦である。中央に左廻りの三巴文を配し、外側に一条の圏線を廻らす。内面はナデで仕上げる。鎌倉時代。

19・20は均整唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎である。中心花より左右に6本の支葉が派生する。平瓦凸面はナデで仕上げ、凹面は布目が残る。平安時代後期。

21～23は均整唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎である。瓦当に界線を有する。界線内には中心花より左右に10本の支葉が派生する。平瓦凸面はナデ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。平安時代後期。

24・25は均整唐草文軒平瓦である。顎は曲線顎である。中心花より左右に9本の支葉が派生する。周縁に連珠を配する。平瓦凸面はナデで仕上げ、凹面は布目が残る。奈良時代。

26は連珠文軒平瓦である。顎は曲線顎である。界線内に連珠を配する。平瓦凹凸面の仕上げは不明。鎌倉時代～室町時代。

27・28は連珠文軒平瓦である。顎は曲線顎である。瓦当の文様は26と同様であるが界線の幅が広い。平瓦凸面はナデで仕上げ、凹面は布目が残る。鎌倉時代～室町時代。

29は連珠文軒平瓦である。顎は曲線顎である。界線内に連珠を配し、中央は縦の線3本を施す。平瓦凹凸面はナデで仕上げる。鎌倉時代。

30は連珠文軒平瓦である。顎は段顎である。界線内に連珠を配し、中央の上下に小さな3個の連珠と両端に鋸歯文を配す。平瓦凸面はナデで仕上げ、凹面は布目が残る。鎌倉時代。

31は唐草文軒平瓦である。顎は段顎である。唐草文の周囲に連珠を配す。平瓦凸面はナデで仕上げ、凹面は布目が残る。室町時代。

32は均整唐草文軒平瓦である。顎は段顎である。中心花より左右に6本の支葉が派生する。平瓦凸面はナデ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。室町時代。

33は唐草文軒平瓦である。顎は段顎である。界線内に唐草文を配す。平瓦凹凸面はナデで仕上げる。室町時代。

34・35は唐草文軒平瓦である。顎は段顎である。界線内に唐草文を配す。平瓦凸面はナデ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。室町時代。

36・37は唐草文軒平瓦である。顎は段顎である。界線内に唐草文を配す。平瓦凸面はナデ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。室町時代。

38は唐草文軒平瓦である。顎は段顎である。界線内に唐草文を配す。平瓦凸面はナデ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。室町時代。

39は唐草文軒平瓦である。顎は段顎である。唐草文を配す。調整は不明。室町時代。

40は唐草文軒平瓦である。顎は段顎である。唐草文を配す。平瓦凹凸面はナデで仕上げる。室町時代。

41は文字瓦である。軒丸瓦凸面にヘラ描きによる文字を記す。□癸卯三月九日　□第□　□枚平五千枚□　□二十枚檜二百二十□　□門定房瓦大工藤□　□大島郡貞行字真□の文字が残る。丸瓦凸面はナデ、凹面は布目の後をナデで仕上げる。瓦当と丸瓦の境を強いユビナデで仕上げる特徴から4・6のタイプの軒丸瓦と考えられる。平安時代後期。

42は文字瓦である。丸瓦凸面にヘラ描きによる文字を記す。□理？瓦□、2行目は判読できない。凸面はナデせ仕上げ、凹面に布目が残る。平安時代後期？

43は文字瓦である。丸瓦凸面にヘラ描きによる文字を記す。□薬師院□、2行目は判読できない。凸面はナデせ仕上げ、凹面に布目が残る。平安時代後期？

44～61は飾り瓦である。全形の残るものはない。44は目、46は鼻を表現する。44・55～61は周縁に円形浮文を配する。時期不明。

三日　経覚私要鈔　文明三年六月二十二日条　○大日本史料　第八編之四

六月廿二日甲子、霽

一、遊佐五郎此間(河内名月内也)野崎ニ取陣、然近日打出客坊、追落其所被陣間、河内所々焼云々、

四八　尋尊大僧正記　文明九年九月二十七・二十八・二十九日、十月二・三日条　○大日本史料　第八編之九

九月廿七日、

一於河内国合戦有之、生馬(駒)山之西井山田辺焼之歟、煙共見畢、如何様若江辺歟云々、若江ハ東方遊佐之陣也、仮令三条之トヲリハ西方衛門佐(若狭)陣野崎也、生馬鬼取之トヲリハ若江東方遊佐之陣也、信貴亀瀬之トヲリハ古市郡之誉田興照寺陣也、横大路之トヲリハ山田庄太子也、此等之間ハ仮令或二里三里ニ不可過之、今日焼□□□トヲリ井横大路之トヲリ□(云カ)、然者若江ヱ右衛門佐手押寄、山田辺ヱ越智勢寄歟如何、筒井出陣之間、為留守安楽坊下向之由口遊、又古市出陣□歟之由口遊、無事不信用、

十月二日、雨下、

一○(略)中畠山左衛門督政長者在京都公方御陣、手物遊佐河内守長直在若江城、仍連々合戦、誉田城、往生院城、客坊城合四ヶ所之内、客坊城ハ去月廿七日実落之畢、大和国越智、古市筒井以下一国面々両方ニ相語之間、悉以去月末進発河内国畢、十市以下両方ニ勢相分寄済々又有之、所詮悉以出陣也、

史料1　客坊城関係の資料

Ⅳ まとめ

1　多量の瓦が出土したことから、この地に存在したことが明らかな寺院については、A1地区に基壇跡とみられる20cm程の高まりが検出された。石列で北側を画し、東及び南に雨落ち溝がめぐるこの高まりは、すでに上部が削平され、礎石とみられる石もすべて原位置を動いている。また、西半分は15世紀代に築かれた石垣2によって切り取られ、全体の平面規模を知ることができない。この15世紀の石垣築造とC地区平坦面を造り出した整地は、寺院基壇上に建物が存在した状態では行い得ないことから、整地前に崖崩れなどの自然災害によって基壇の西側が崩壊する事態が生じており、それを修復するために石垣2を築き、崩れた土砂を客土としてC1地区を中心とした広い平坦地が造成されたと考えられる。C地区客土内に含まれる多量の12世紀～14世紀の遺物の多くも、本来はA1地区に存在したものが土砂崩落とともにC地区に移動し、整地によって混じりあったと推定される。A1地区の基壇上の建物の建立された時代は、基壇跡周辺とくに南側に顕著な瓦溜り出土の軒瓦型式により平安時代後期とみられる。この寺院の寺号については、法性寺かどうかは確証がないため今は客坊廃寺と呼称しておくが、今回出土した瓦のなかに「薬師院」とヘラ書きされたものがあり、院号が明らかになったことは重要な成果の一つである。

2　前掲の文献にその名がみえる客坊城については、15世紀に行われた大規模な造成工事により出現した広い平坦地とそれを囲む石垣や坂道を登る石段そして地下貯蔵庫である穴蔵などがその遺構と考えられる。建物規模を示す遺構は残されていないが、穴蔵の上に建っていた建物はおそらく礎石建物であったと思われる。このほか、A2地区で検出された園池とみられる遺構も出土遺物によって15世紀の遺構とみられ、客坊城内にはこうした園池が存在したことが知られた。もともと平安後期に建てられた寺院を母体とするこの城は、文献上に登場する南北朝～室町前期の城と名の付く多くの施設と同様に、平時は寺院であり、戦時には城として位置付けられるものであったと思われる。

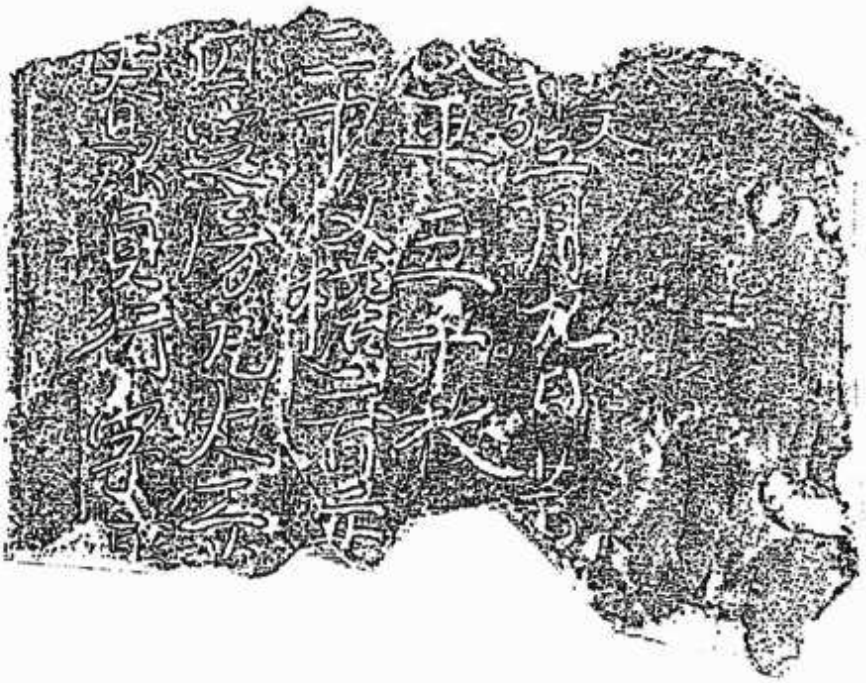
　客坊城は、畠山政長と義就のあいだで繰り広げられた所領争いの結果、文明九年（1477）九月二十七日に義就軍が陥れたとされ、このことを示唆するように穴蔵内には焼けた大量の壁土が落ち込んでいた。戦いの結果、上屋が炎上したことを示すものとみられ、また穴蔵内に貯蔵されていた米も同時に炭化するに及んでいる。その火勢の激しさから、穴蔵内には油なども貯えられていたのではなかろうか。こうした中世の穴蔵の類例として知られる紀州根来寺の遺構では、油が貯えられていたとみられる大甕が穴蔵内に据え置かれた状態で検出されていることからも、こうした推測は可能性がある。

3　13～14世紀には、A2地区南部・B地区南部・C地区等に掘立柱をもつ建物や施設が存在したことも今回の調査で明らかになった。これらは寺院の主要建物とは別に寺域一帯に多くの建物の存在を示すもので、中世寺院の実態が窺える興味深い事実となるものである。

4　B地区において火葬人骨を収めた平安時代の蔵骨器及び近くで火葬の跡とみられる焼土坑

が検出された。これによって、火葬が寺域内で行われたことか明らかとなった。また、火葬土坑内より出土したサイコロは、奈良時代以前よりたびたび禁令が出でていた博戯としての双六遊びが寺院内でも行われていたことを示唆する資料となるものである。

5. 出土遺物のなかで注目されるものとして文字瓦があげられる。軒丸瓦の瓦当を欠く丸瓦部分（第54図41）で、表面にヘラ書きされた34の文字が残るものである。欠損部分を含むこの文字瓦の文は、藤沢一夫氏によって史料２のように解読された。



（寿永二年）
（寛元一年）又は
□□□□癸卯三月九日第□
（丸五千）
□□□枚平五千枚
（鍛二百）
□□□二十枚槍二百二十□（枚）
（願主）（原朝臣）
□□円定房瓦大工藤□□□
（和泉国）
□□□大鳥郡貞行字真□

史料２　文字瓦にヘラ描きされた文字（読み下しは藤沢一夫氏による）

文字瓦に記された内容は、藤沢一夫氏の教示によれば、円定房（僧侶？）が和泉国大鳥郡の瓦工人である藤原貞行に寺の瓦製作を依頼したものである。

文字瓦にみる瓦の種類・量は丸瓦5,000枚、平瓦5,000枚、軒丸瓦220枚、軒平瓦220枚であり、寺の建物規模を考える上で興味深い資料となるものである。

欠損する年号を考える上で注目される事実は、この文字瓦は瓦当を欠くものの瓦当と丸瓦とを接合する部分を強いユビナデによって調整するという特徴がみられることである。この特徴は、今回出土した軒丸瓦のなかでは第50図6・7の瓦当にみられることから、この文字瓦の瓦当も同型式と考えられる。この瓦当文様が平安後期のものとみられること、文字瓦に癸卯の干支が記されていること等から考えると、欠損している年号は寿永二年（1183年）か又は寛元一年（1243年）のどちらかであろうと考えられる。

6　この文字瓦を含めて今回出土した瓦のほぼ全てがいわゆる生駒西麓産の胎土であり、当寺近くの粘土を使用して焼いていたとみられ、近辺に瓦窯が存在したものと思われる。このことから、文字瓦にみられる瓦工人は和泉国大鳥郡より当地に来て瓦を焼いたことが知られるのであり、瓦の注文を受けた工人が寺院のある地に赴いて粘土と燃料を現地調達して近くに窯を構築して操業するという当時の瓦生産のあり方が、考古資料によって明らかになった。

瓦工人が移動したことを示す類例としては、軒丸瓦第49図2・3と同笵とみられるものが堺市法華寺跡より出土している。（近藤康司『和泉古瓦譜・増補版』財団法人小谷城郷土館 1997　P72）

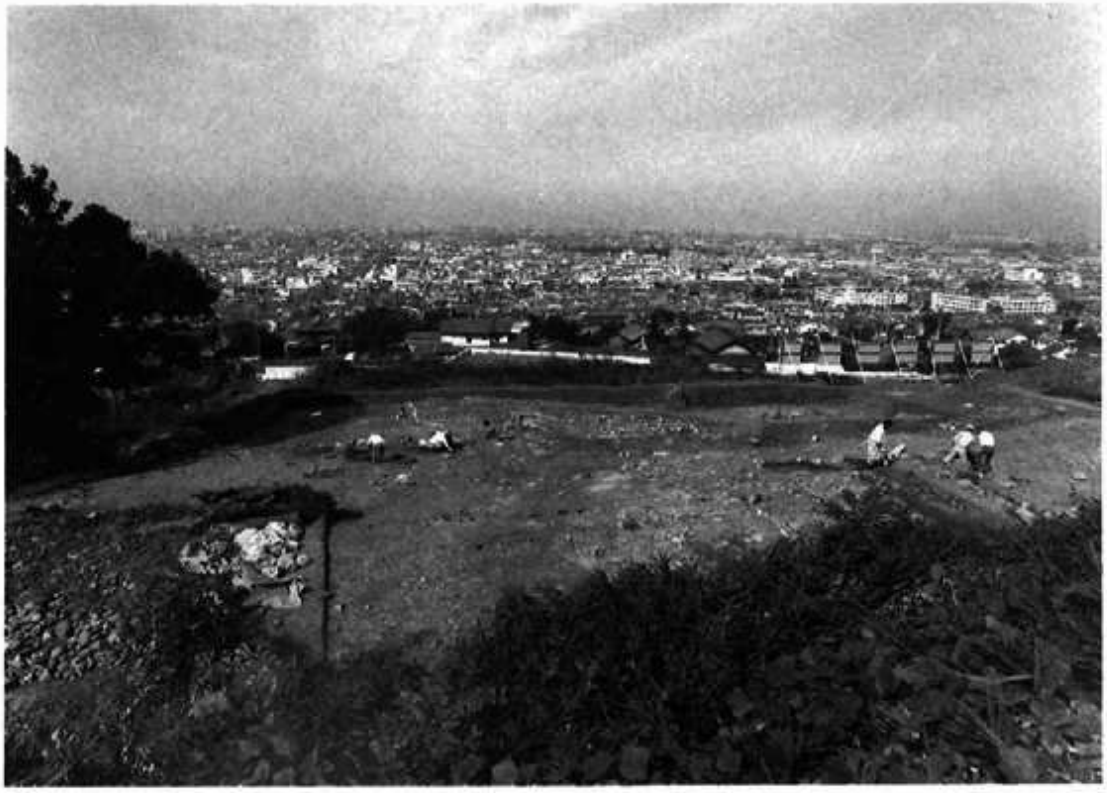
7　第49図1は飛鳥様式の軒丸瓦であり、当地の寺院創建よりも明らかに古いとみられる瓦である。この軒丸瓦と同型式の瓦は、当地の西約500mに位置する河内寺より出土した瓦のなかにみとめられており、胎土も同様である。河内寺は飛鳥後期より継続しており、当地の寺院建立時には併存していたことが知られている。河内寺に葺かれていた古い瓦を、客坊の寺院まで持ってきた可能性とともに、河内寺と客坊の寺院間の関係を考える上で興味深い資料となるものである。

8　出土遺物のなかには、有舌尖頭器や縄文時代の石斧、弥生時代中期の土器、古墳時代6世紀後半の須恵器等も含まれている。このうち弥生中期の土器は、客坊谷を挟んで南に隣接する弥生時代高地性集落の山畑遺跡の範囲が当地にまで拡がっている可能性を示唆するものであり、また6世紀後半の須恵器は当地にかつて後期古墳が存在し、寺院建立時等に行われた整地により消滅したことを示すものである。

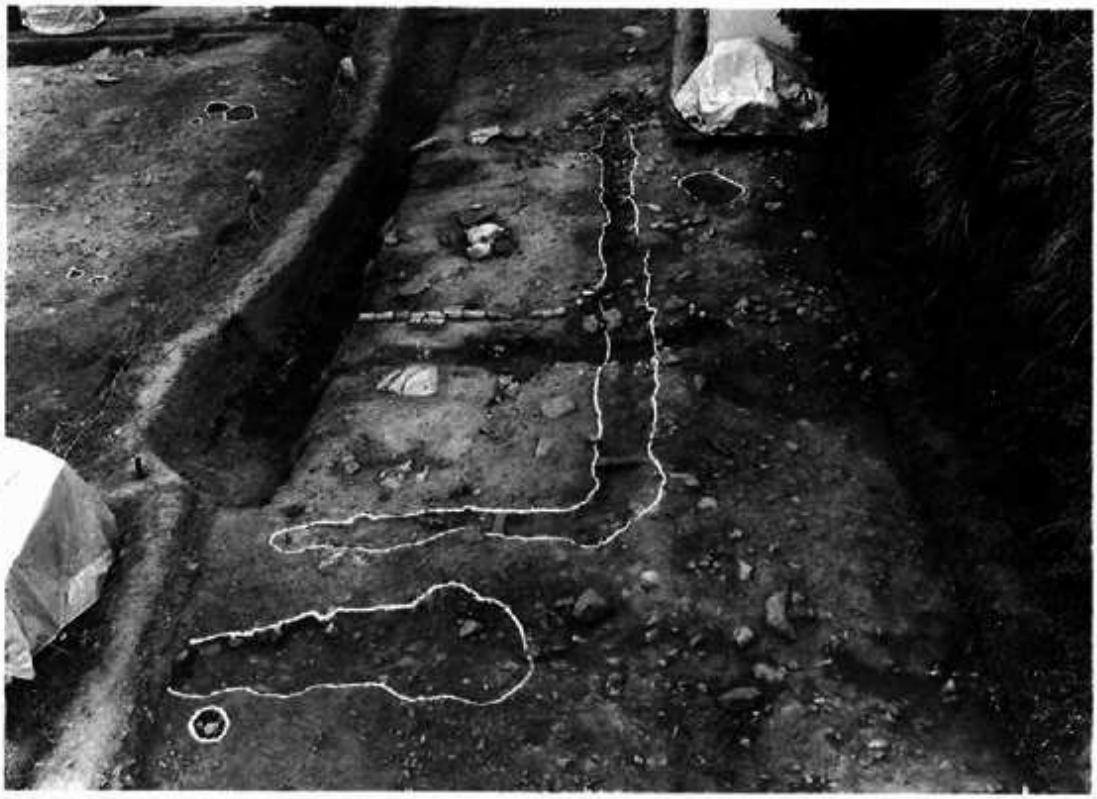
図　　版

図版1　客坊山遺跡群第2次調査　遺構

1　調査地より河内平野をのぞむ



2　調査地南半部と河内平野



1　A1地区基壇跡（南より）

2　同　上（北より）

1　A1地区基壇跡（北より）

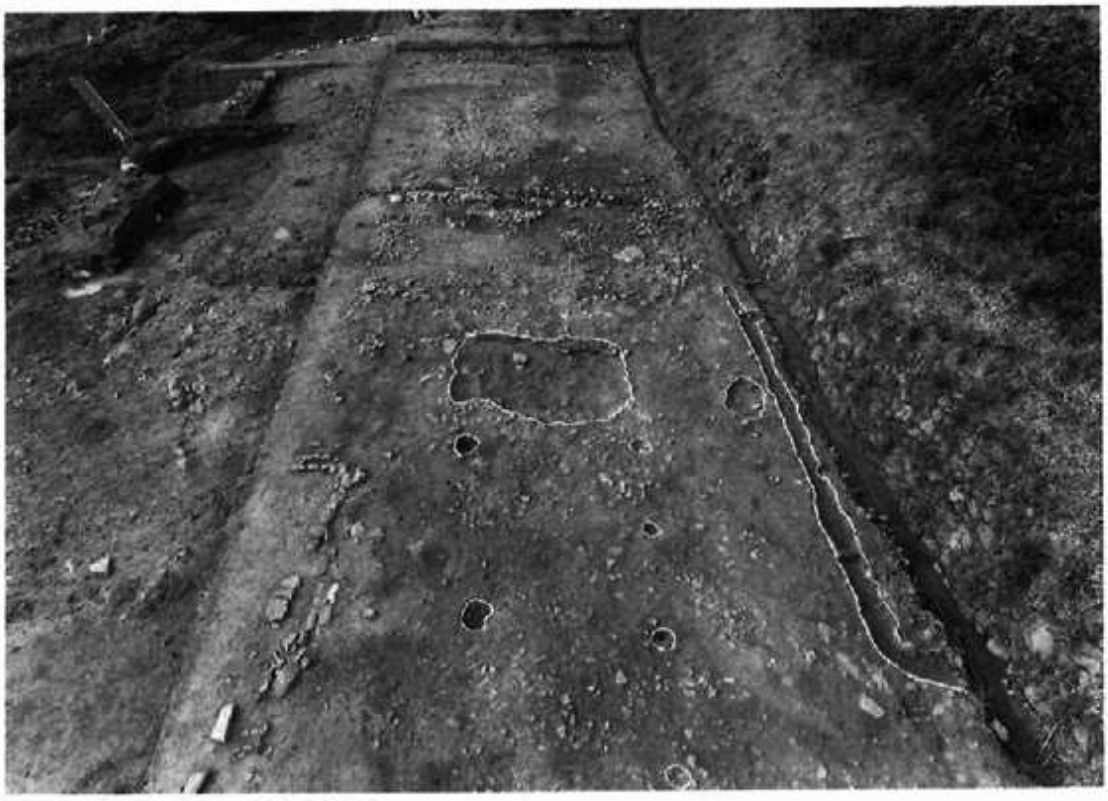
2　A1地区基壇跡北東角の石組暗渠（北西より）

図版4　客坊山遺跡群第2次調査　遺構

1　A1地区石垣1・2、瓦組暗渠（北より）

2　A1地区石垣2（北より）

1　A2地区北部の瓦溜り（西より）



2　A2地区南半部の遺構（南より）

1　A2地区石組溝及び溝内瓦片出土状況（西より）

2　A2地区石組溝全景（西より）

1　A2地区遺構全景（北より）

2　A2地区落ち込み内の木製ミニチュア船出土状況

1　B地区遺構全景（南より）

2　C1地区遺構全景（南より）

1　B地区瓦組暗渠3と石列（東より）

2　同　上（西より）

1　B地区石垣4・5（北西より）

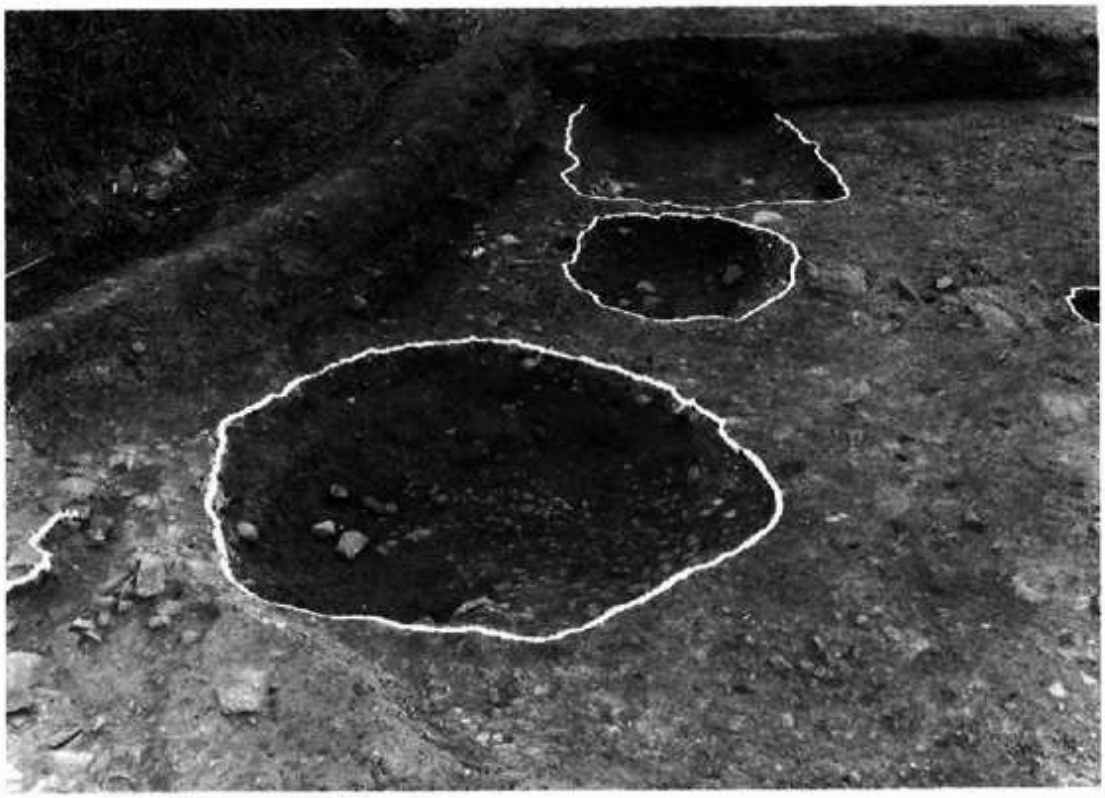
2　B地区石垣6・8（西より）

1　C１地区穴蔵内焼土除去状況（南より）

2　C１地区穴蔵全景（南より）

1　C１地区穴蔵（東より）

2　C′１地区穴蔵（西より）



1　C1地区土坑1～3（北より）

2　C1地区焼土坑・柱穴他（北より）

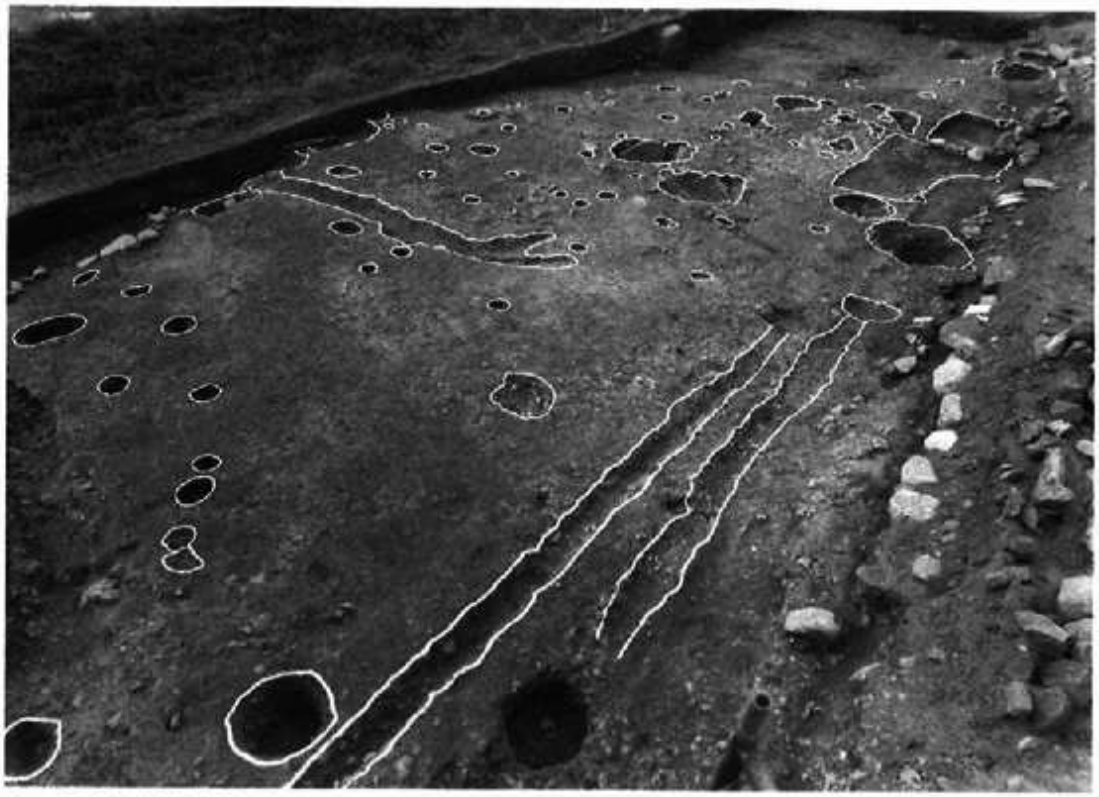
1　C1地区石垣3と石段（北東より）

2　D地区石垣3（北東より）

1　C1地区石垣3を切って築かれた棚田の石垣（西より）

2　同　上

1　C２地区遺構全景（北より）



2　C２地区遺構全景（南東より）

1　D地区地山面全景（北より）

2　D地区土器溜りの土師器小皿出土状況

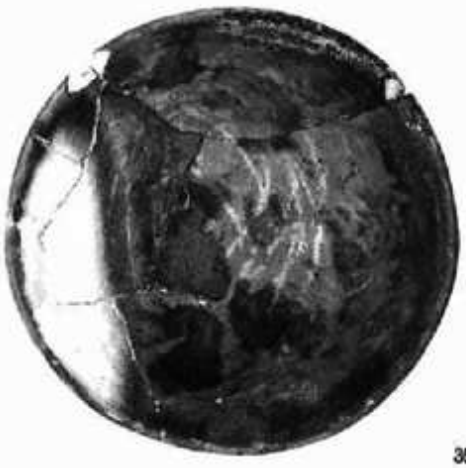
38′

4

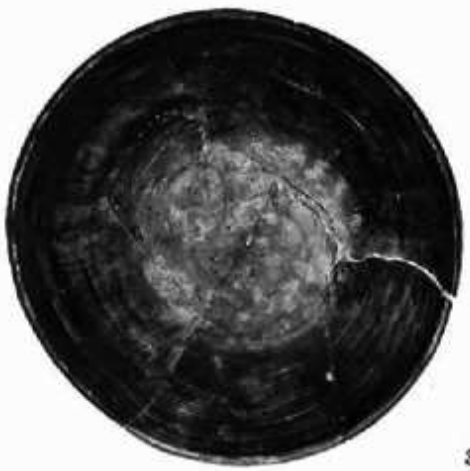
46

38

40



39′



35′

39

35

A 1地区瓦溜 1 出土瓦器香炉、A 2地区落ち込み 2 内出土瓦器椀・土師器皿

86

47

82

48

81

49

94'

50

54

94

58

59

A２地区落ち込み２出土土師器皿、Ｃ１地区焼土坑出土土師器皿・穴蔵出土青磁碗

98

105

102

106

118

121

124

99

100

112

C 1 地区穴蔵出土備前焼甕・瓦器火舎・白磁皿・土師器皿、土坑17出土土師器皿

149

127

113

151

136

340

137

311

140

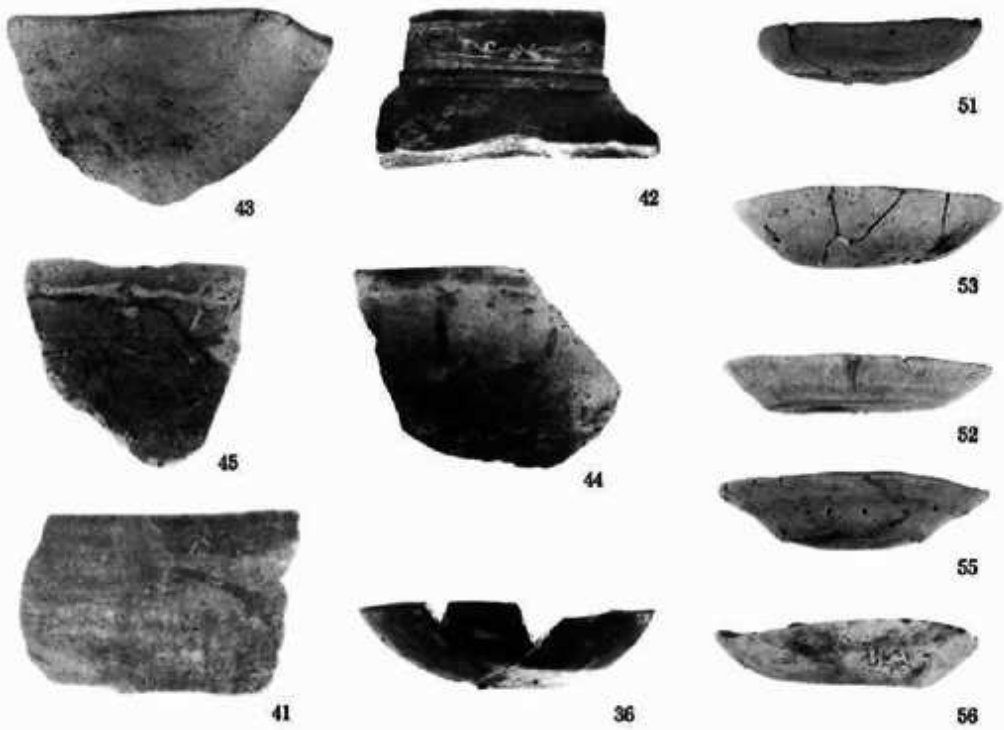
313

142

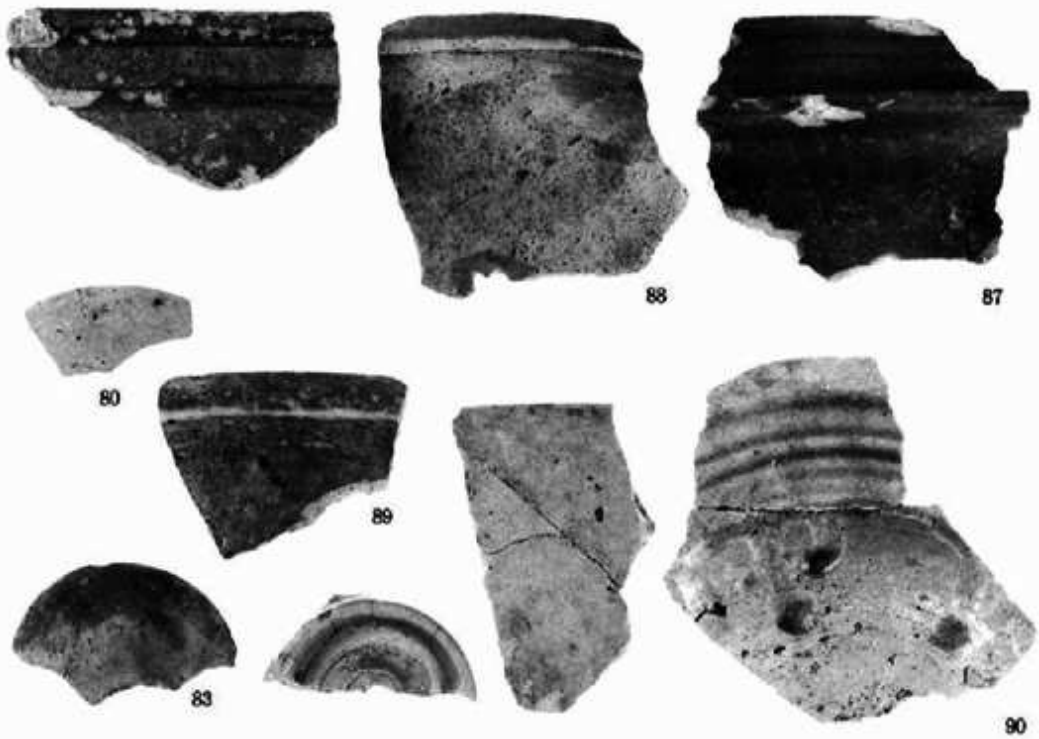
315

141

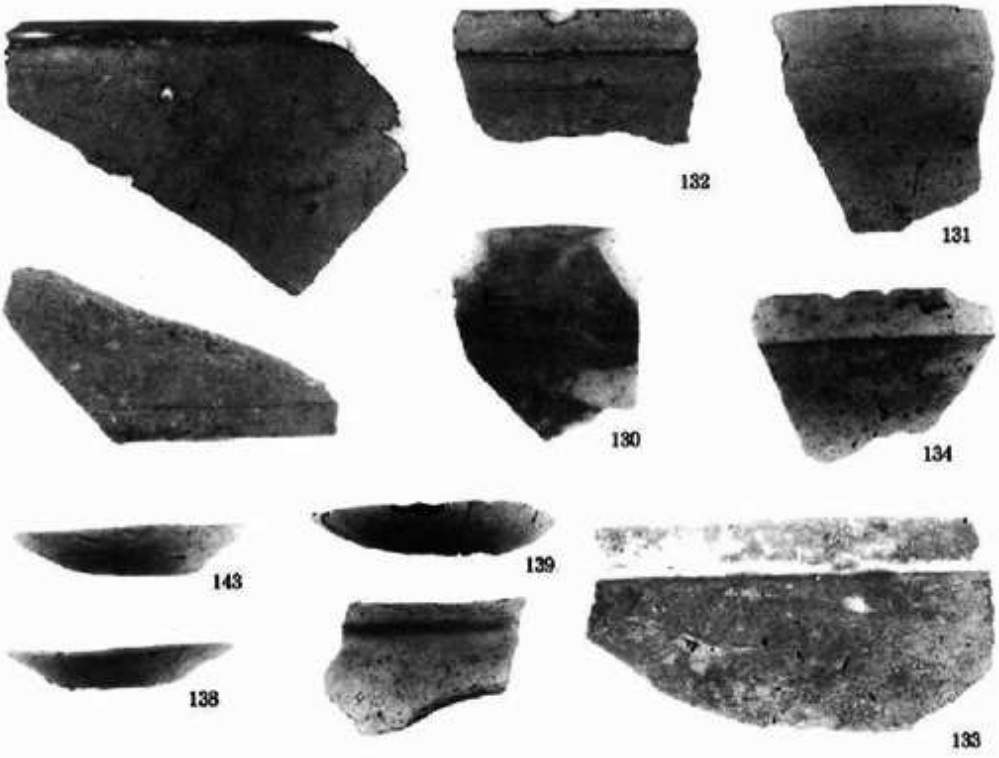
C１地区土坑17出土土師器皿・瓦器椀、C２地区土坑11出土土師器皿、土坑６・９出土瓦器椀、
C１地区溝２出土瓦器壺、D地区土器溜出土瓦器皿



1　A 2 地区落ち込み 2 出土瓦器椀・火舎・摺鉢、土師器皿



2　C 1 地区焼土坑出土瓦器摺鉢・羽釜・火舎、陶器（折り縁皿）、土師器皿



1　C1地区土坑17出土瓦器擂鉢、土師器皿・羽釜

2　D地区土器溜出土土師器皿

325

326

338

330

337

328

364

321

363

遺物包含層出土弥生土器高杯、須恵器壺・高杯、黒色土器椀

404

414

416

418

422

430

377

387

386

388

392

遺物包含層出土土師器羽釜

646

424

665′

433

665

618

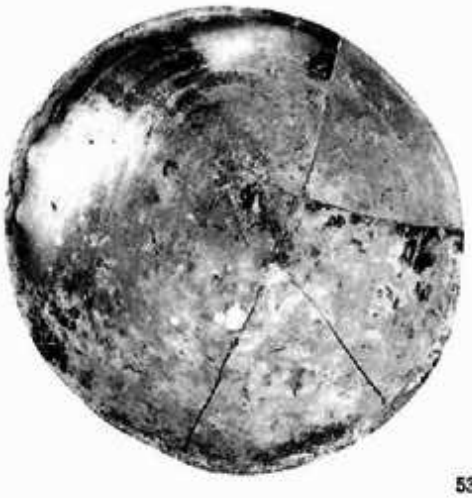
527′

663

527

443

遺物包含層出土土師器羽釜、瓦器羽釜・火舎・水滴・椀



535′

532′

535

532

543′

534′

543

534

遺物包含層出土瓦器椀

530

522

531

525

533

526

536

528

537

529

遺物包含層出土瓦器椀

547

540

548

544

549

541

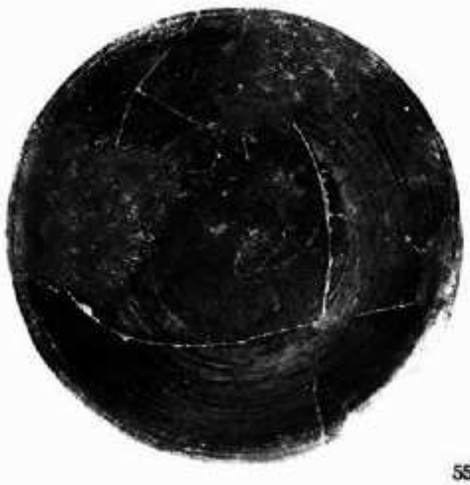
550

542

551

546

遺物包含層出土瓦器椀



559′

556′

559

556

561′

558′

561

558

遺物包含層出土瓦器椀

562

553

567'

554

567

555

567"

557

560

遺物包含層出土瓦器椀

616

613

611

575

590

580

594

583

604

584

601

588

605

589

遺物包含層出土瓦器小椀

715

688

719

680

722

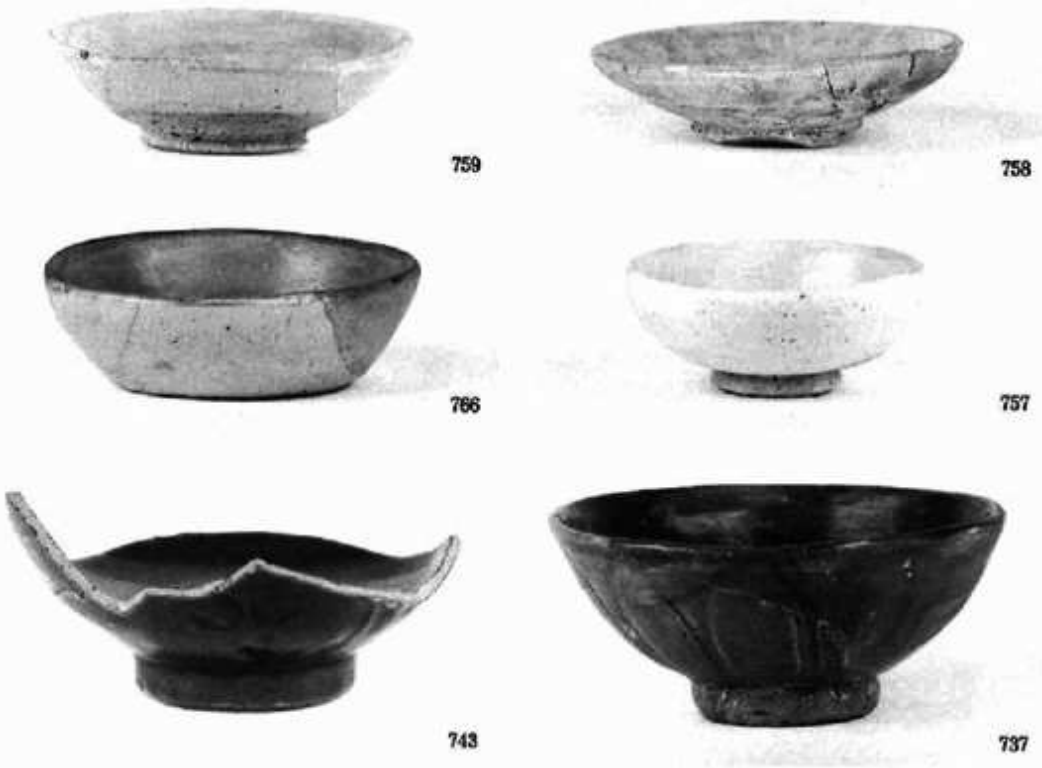
706

704

723

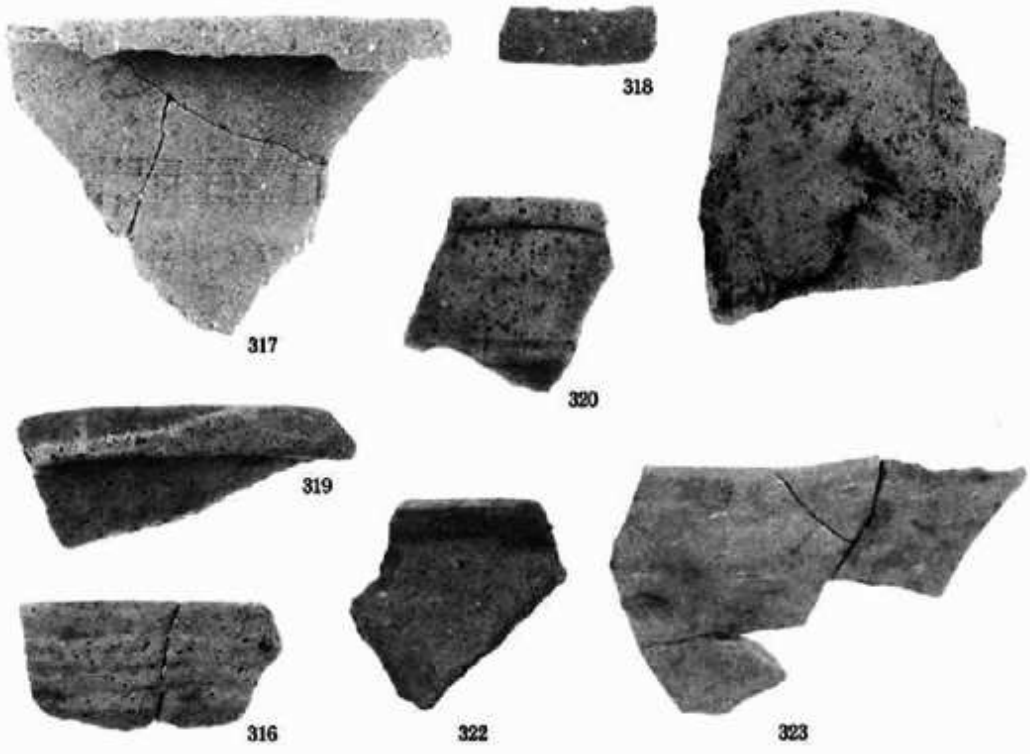
712

遺物包含層出土信楽焼摺鉢、備前焼摺鉢・甕、瀬戸美濃焼皿、常滑焼甕、瓦器摺鉢、須恵器捏鉢

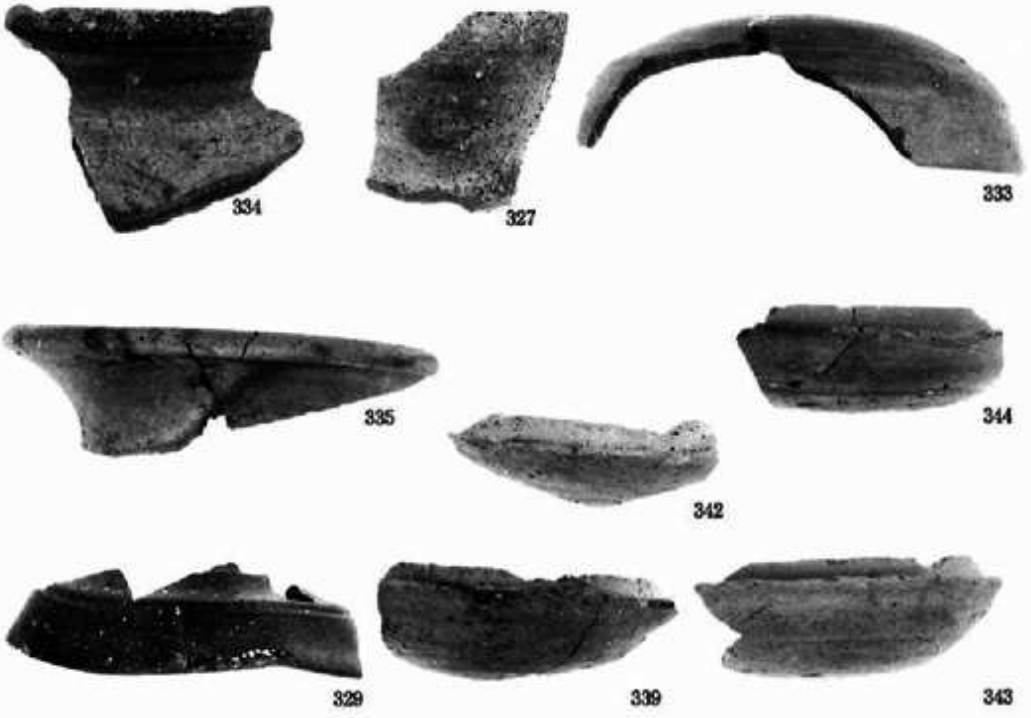


1　遺物包含層出土白磁小碗・皿、青磁碗

2　遺物包含層出土土師器皿



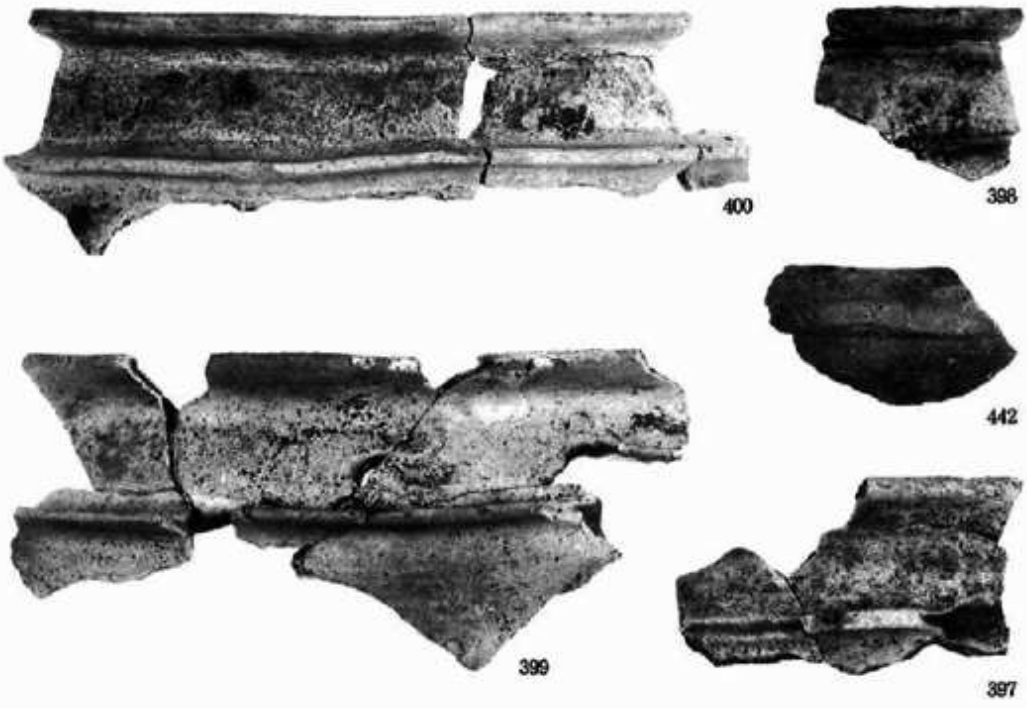
1　遺物包含層出土弥生土器壺・鉢・甕、土師器甑



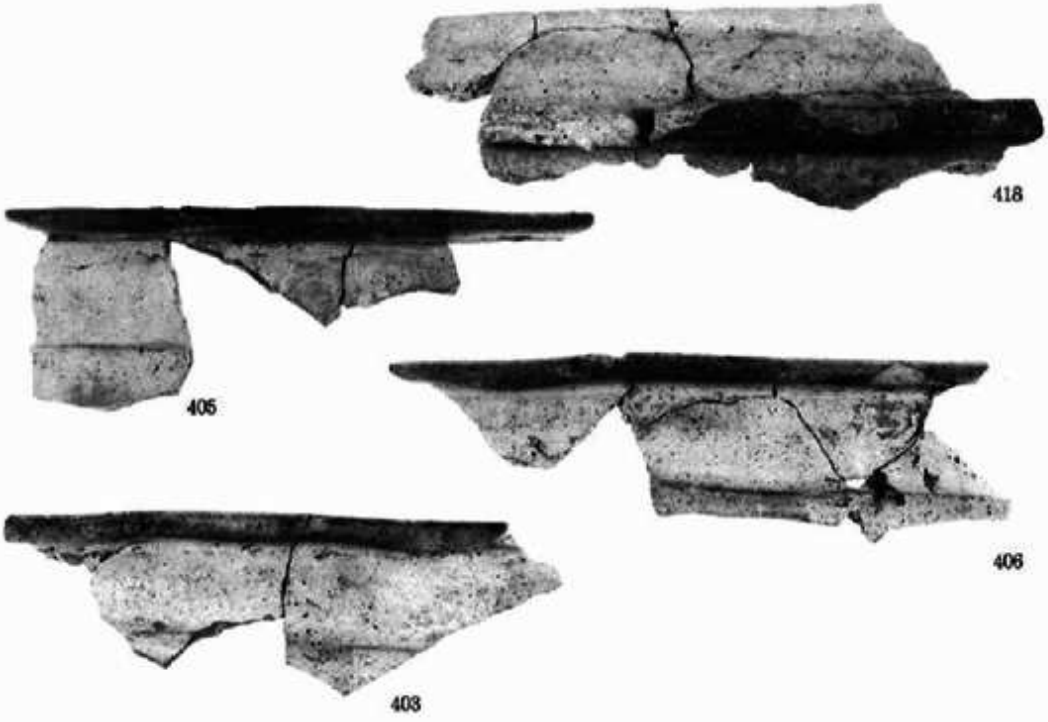
2　遺物包含層出土須恵器甕・提瓶・杯・蓋・脚

1　遺物包含層出土土師器羽釜

2　遺物包含層出土土師器羽釜



1　遺物包含層出土土師器羽釜



2　遺物包含層出土土師器羽釜

413

406

415

407

1　遺物包含層出土土師器羽釜

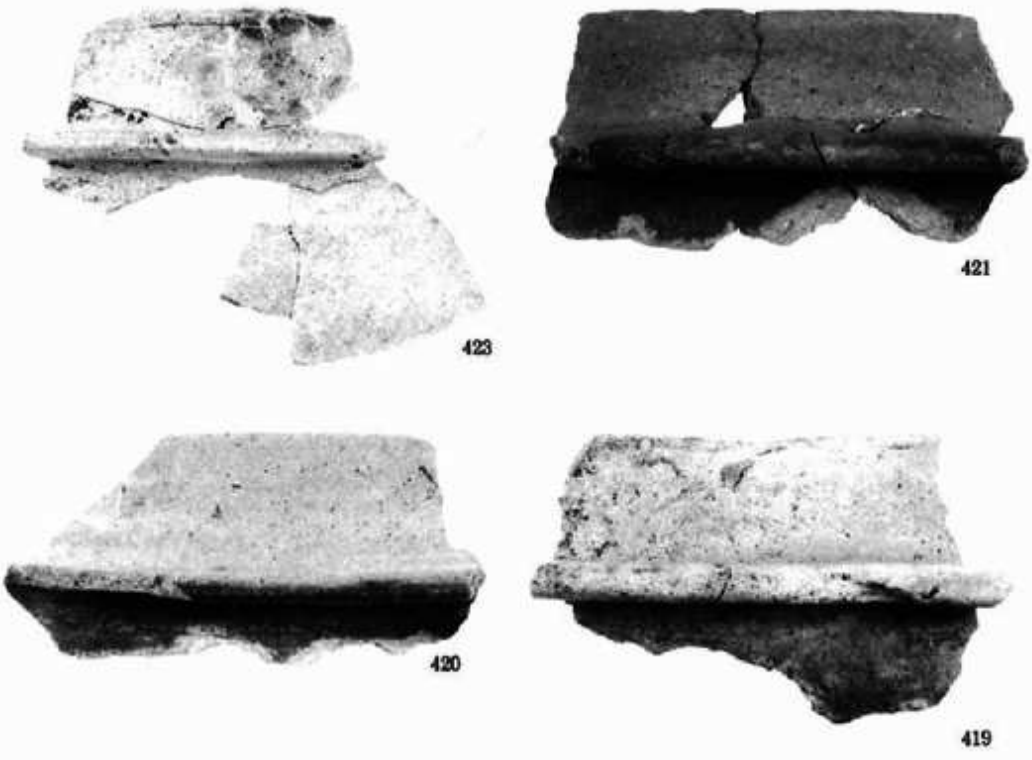
410

412

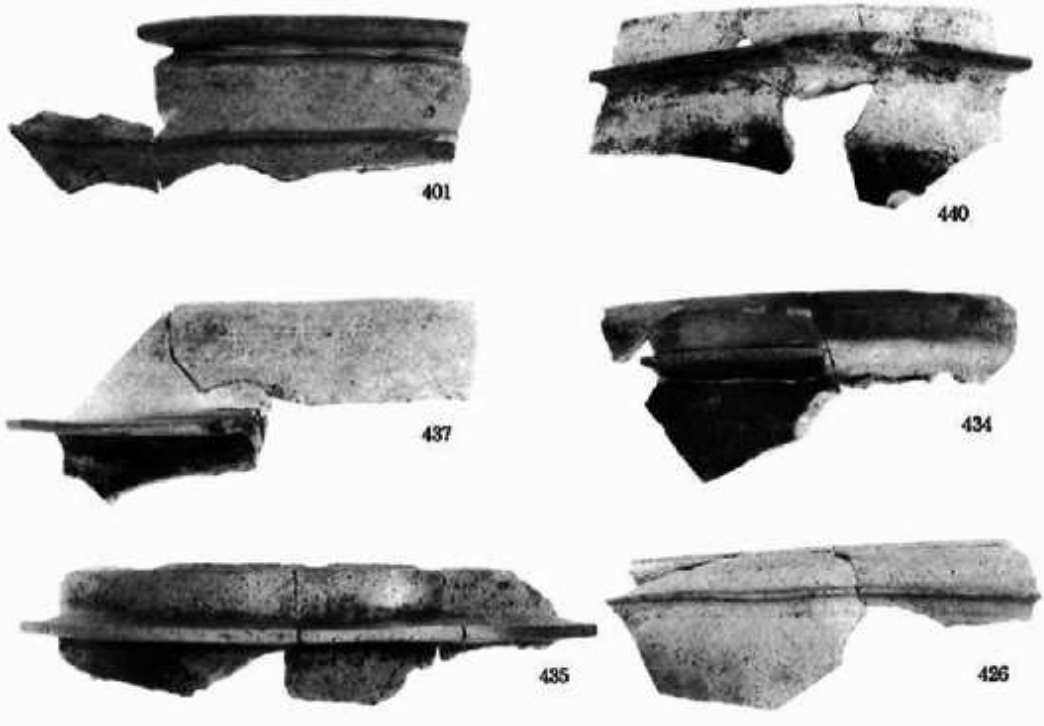
411

409

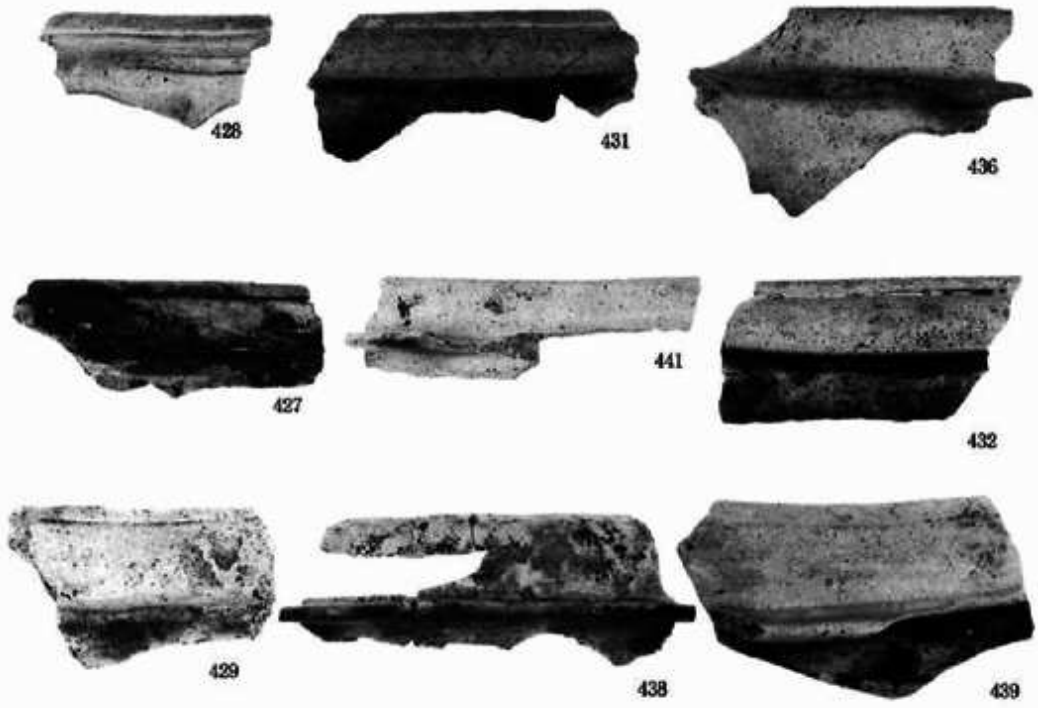
2　遺物包含層出土土師器羽釜



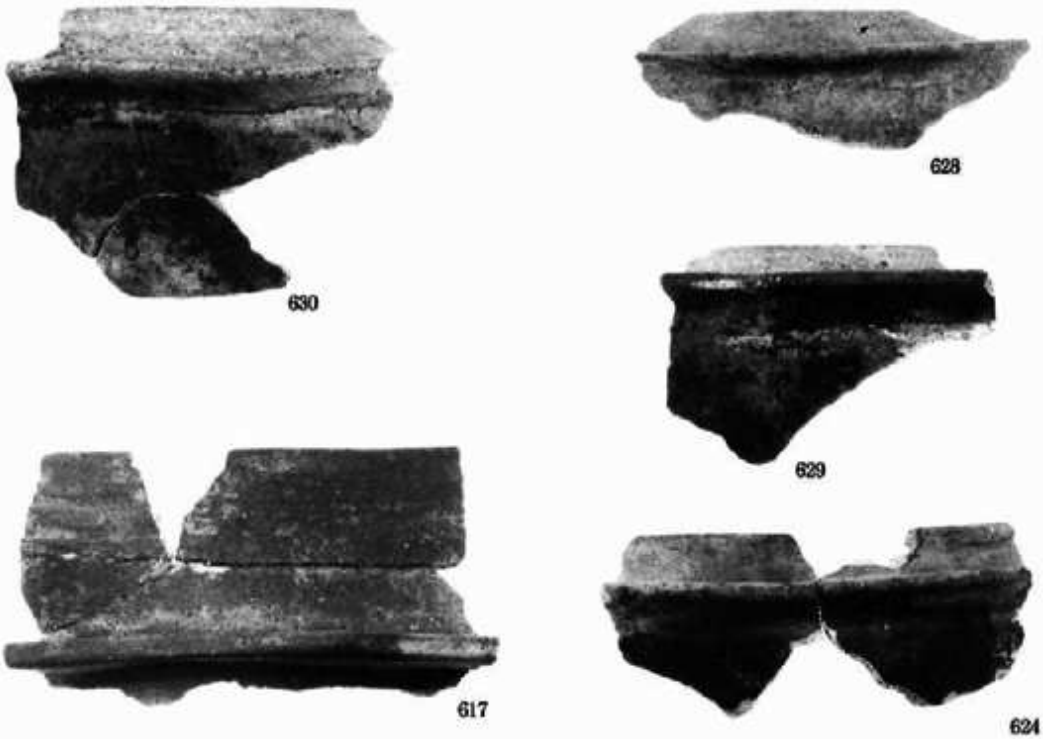
1　遺物包含層出土土師器羽釜



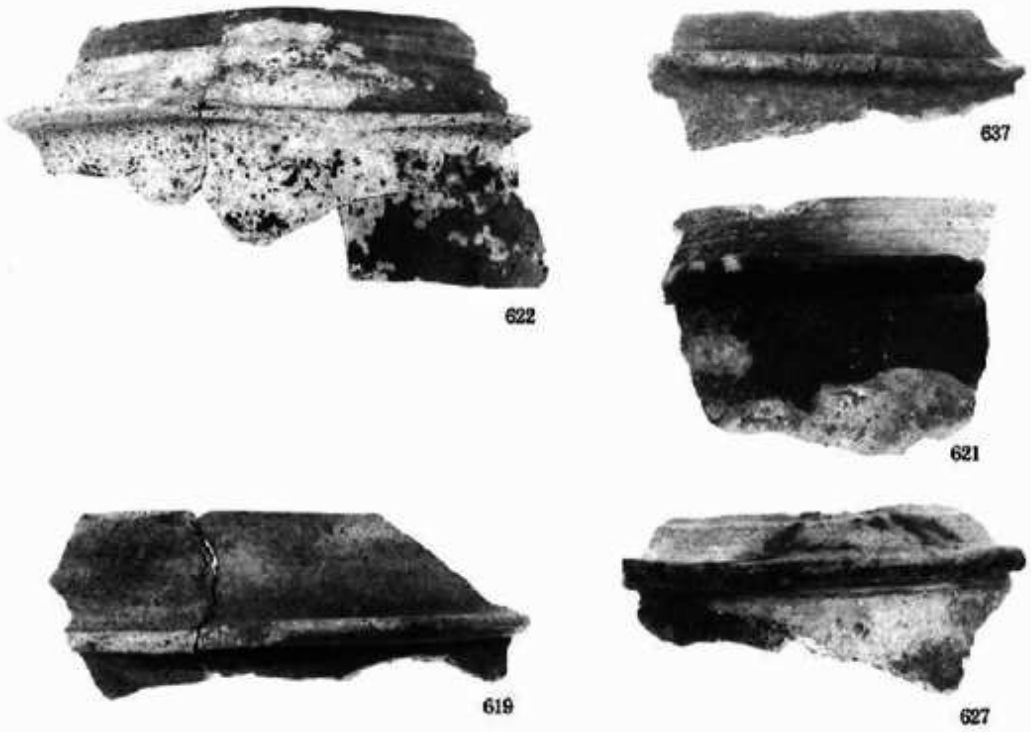
2　遺物包含層出土土師器羽釜



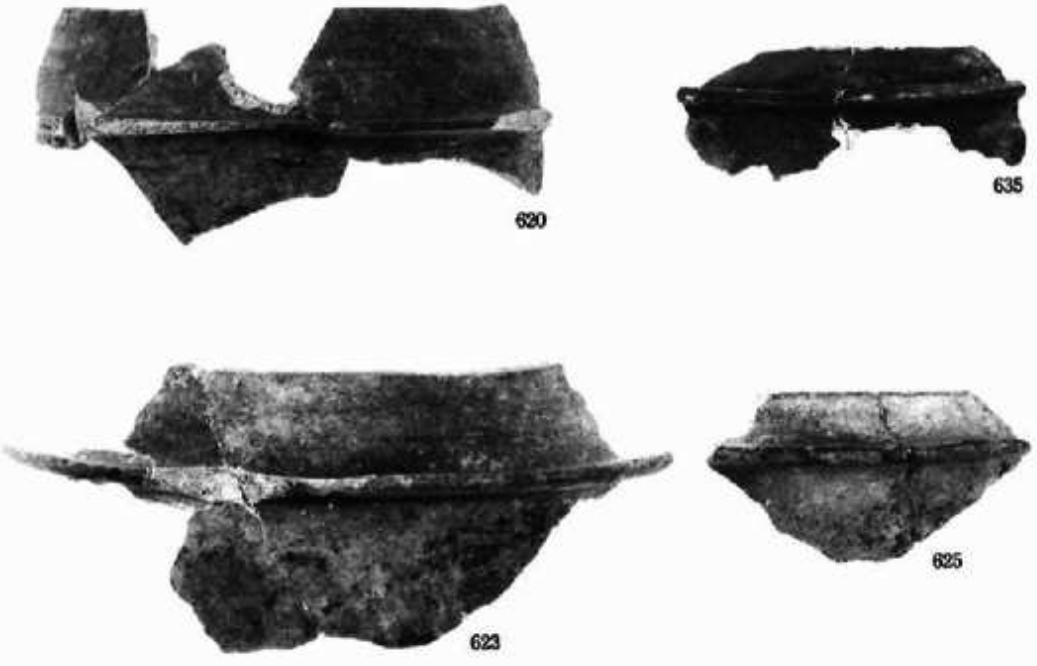
1　遺物包含層出土土師器羽釜



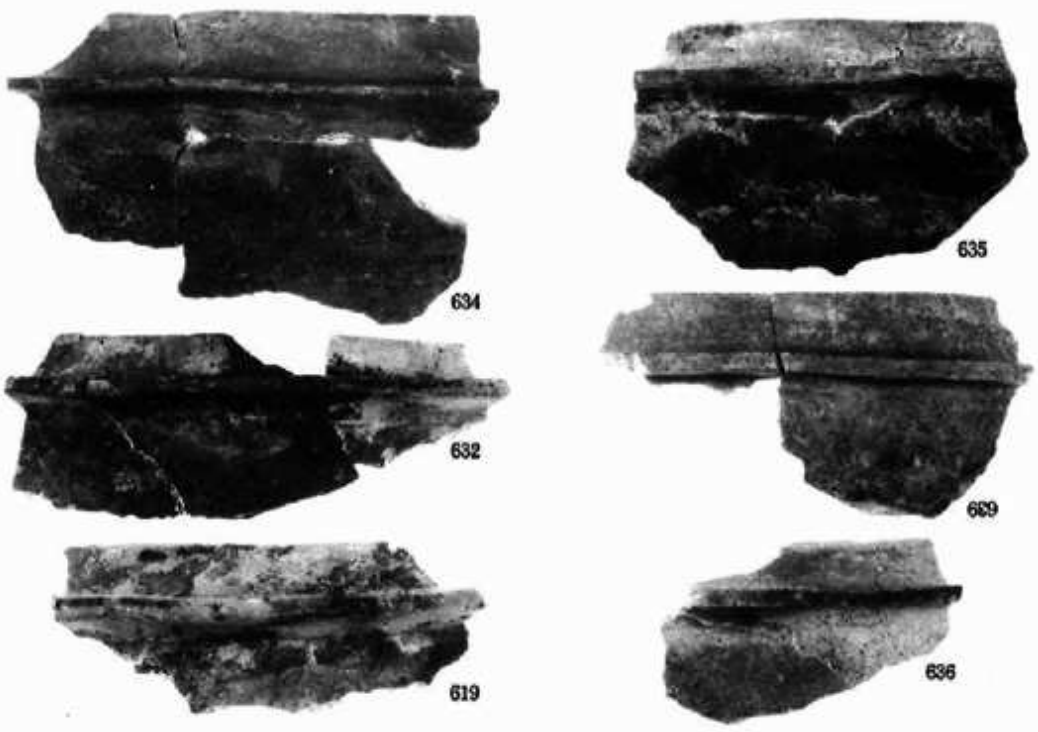
2　遺物包含層出土瓦器羽釜



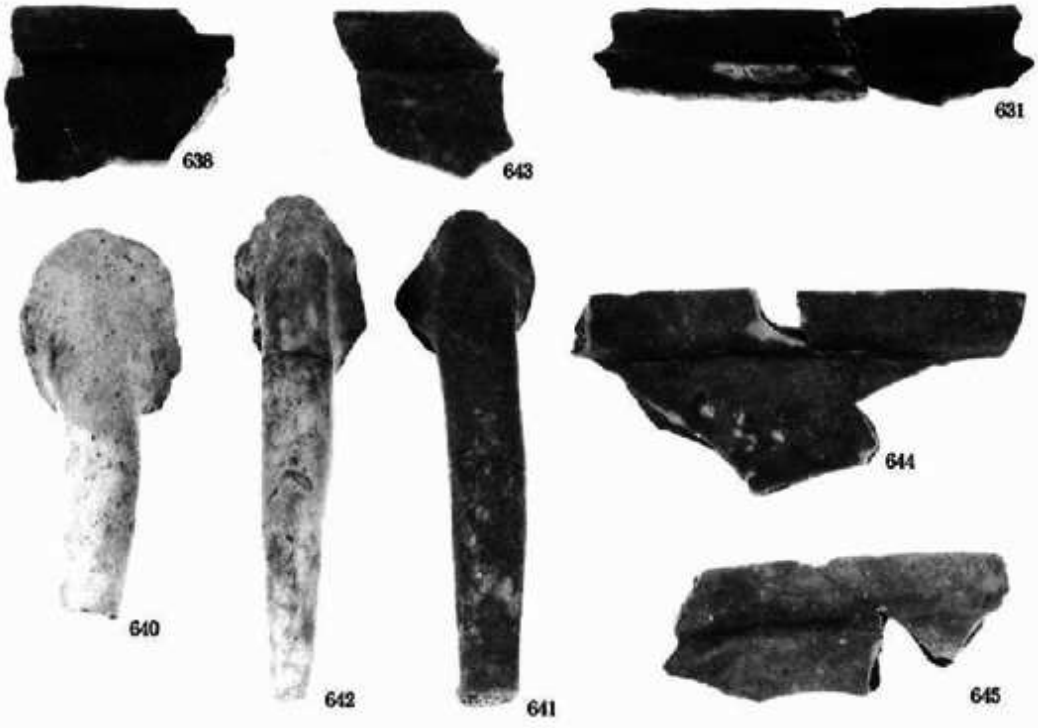
1　遺物包含層出土瓦器羽釜



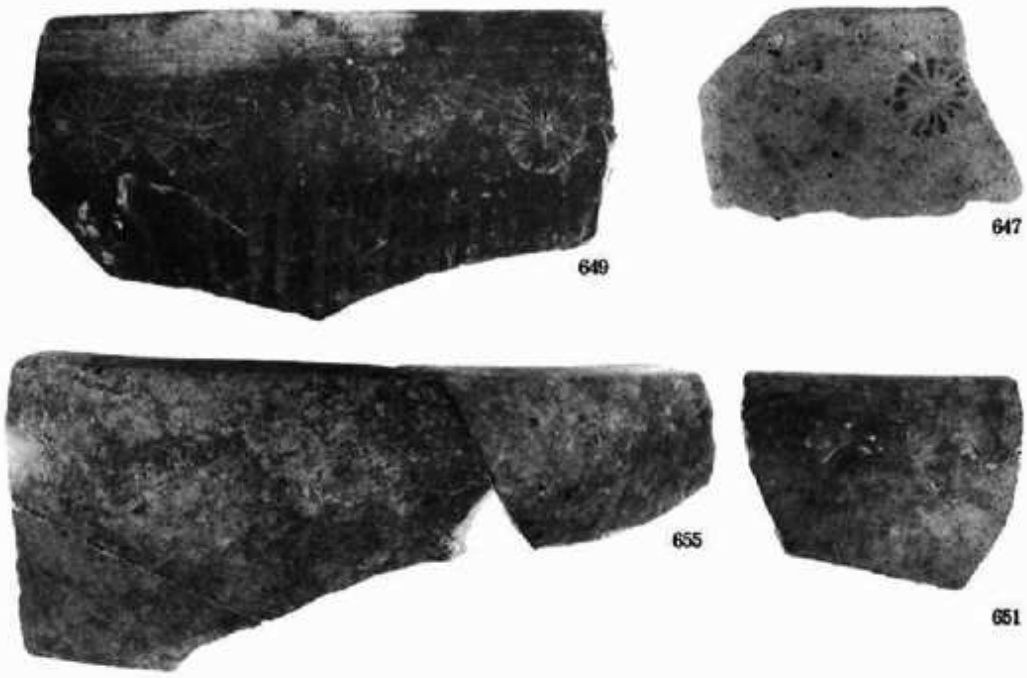
2　遺物包含層出土瓦器羽釜



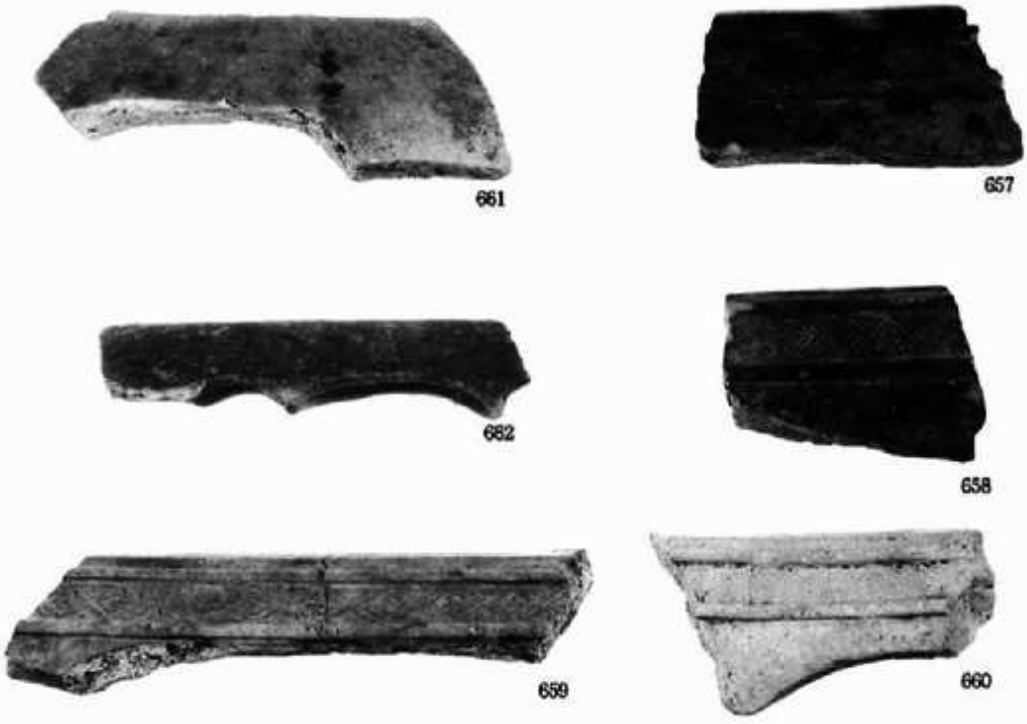
1　遺物包含層出土瓦器羽釜



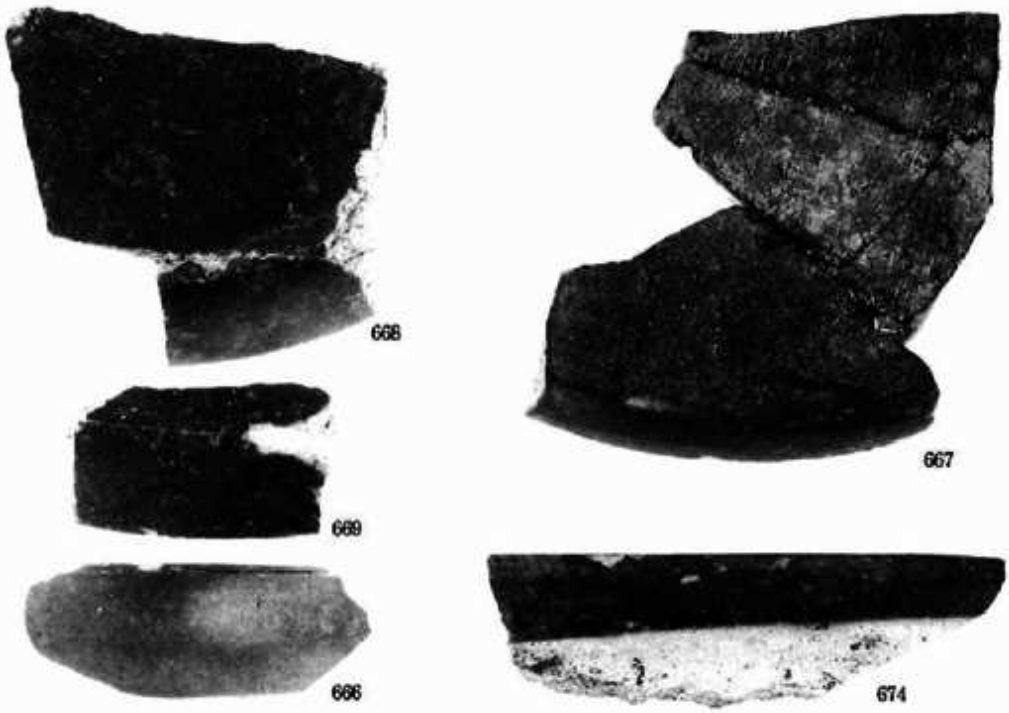
2　遺物包含層出土瓦器羽釜・鍋



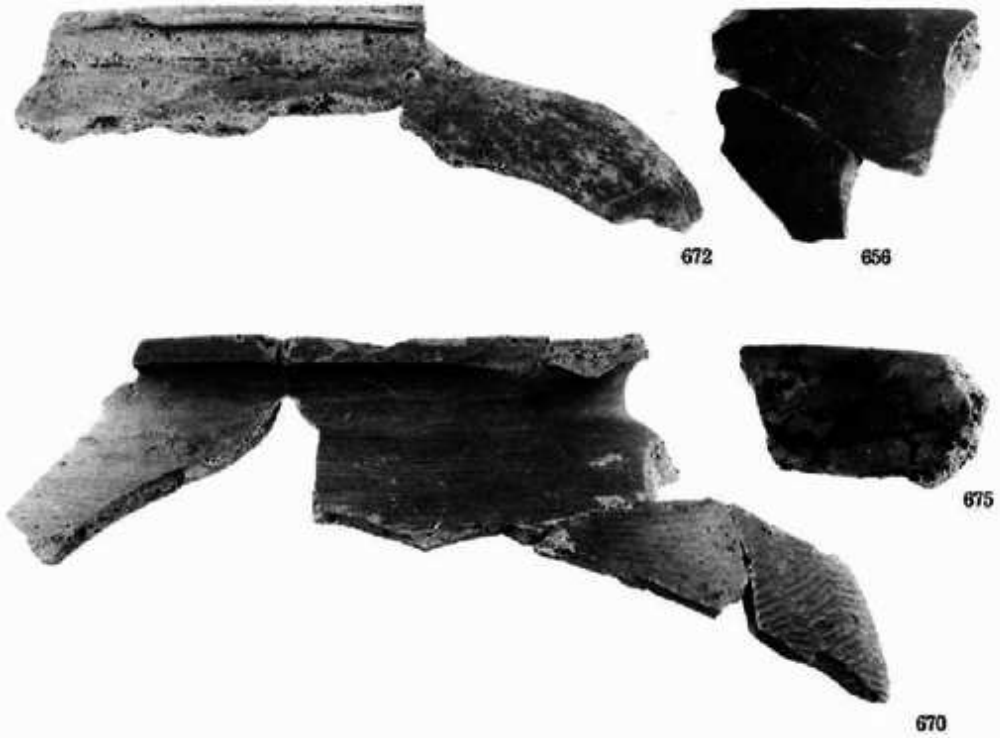
1　遺物包含層出土瓦器火舎



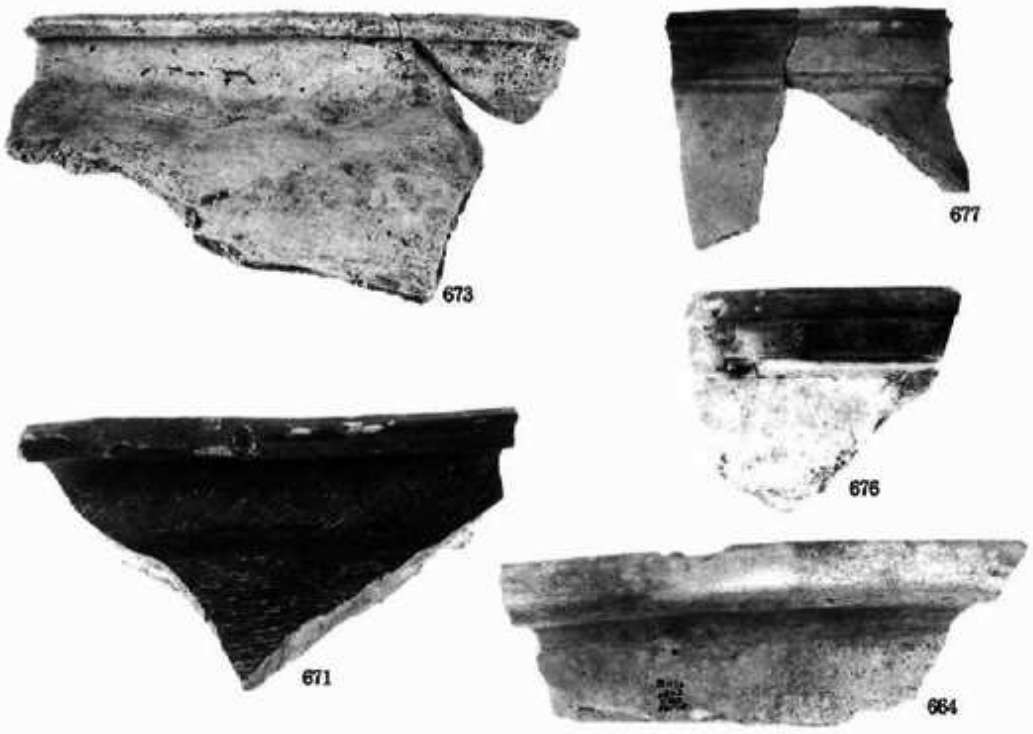
2　遺物包含層出土瓦器火舎



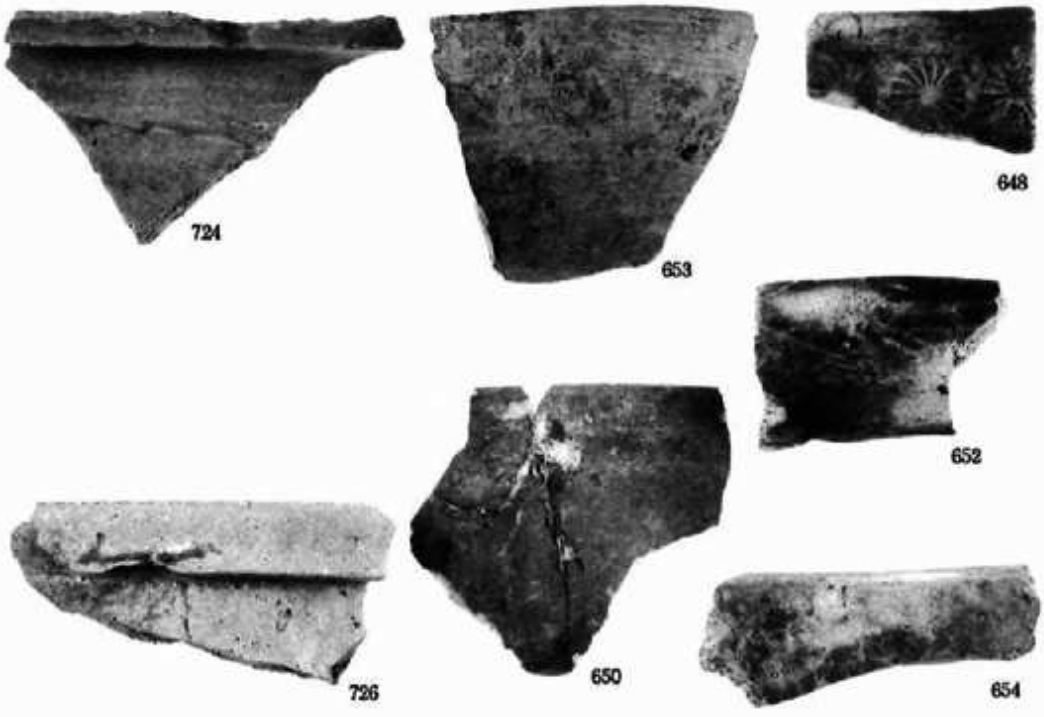
1　遺物包含層出土瓦器香炉・蓋・深鉢



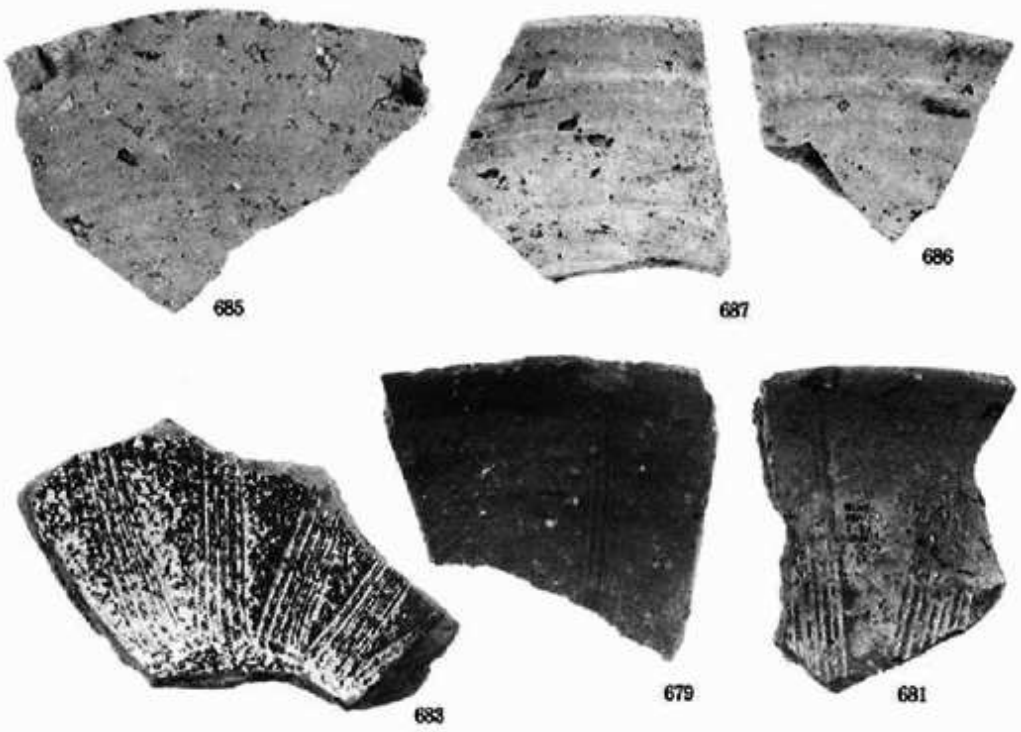
2　遺物包含層出土瓦器火舎・深鉢・甕



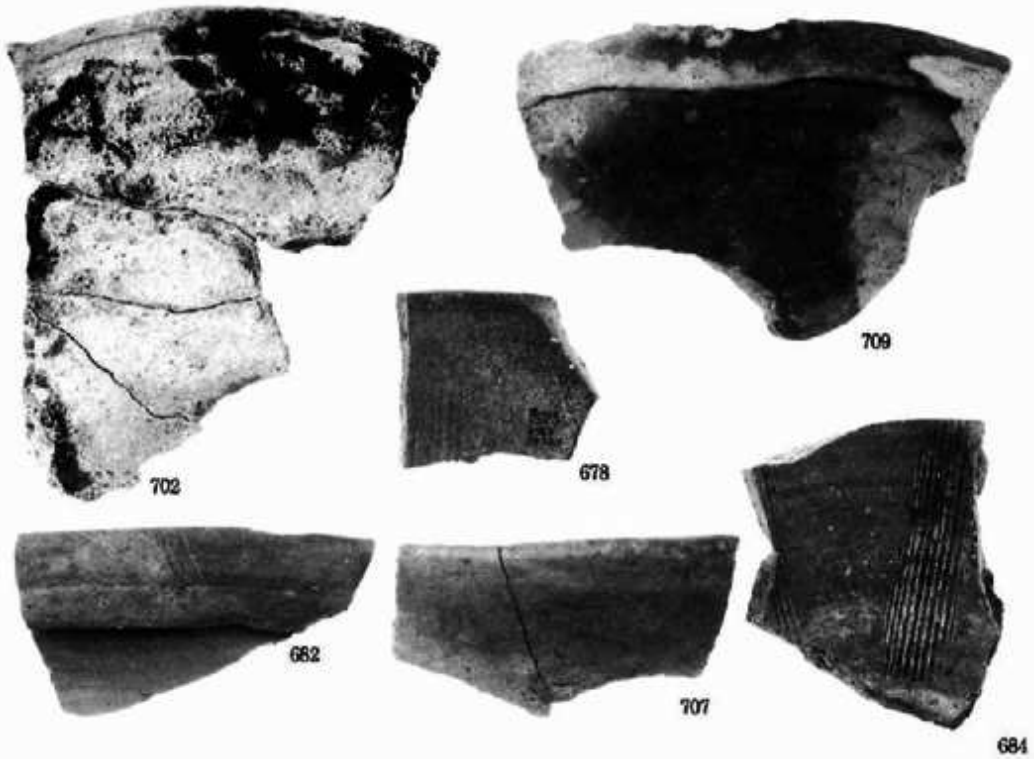
1　遺物包含層出土瓦器深鉢・甕



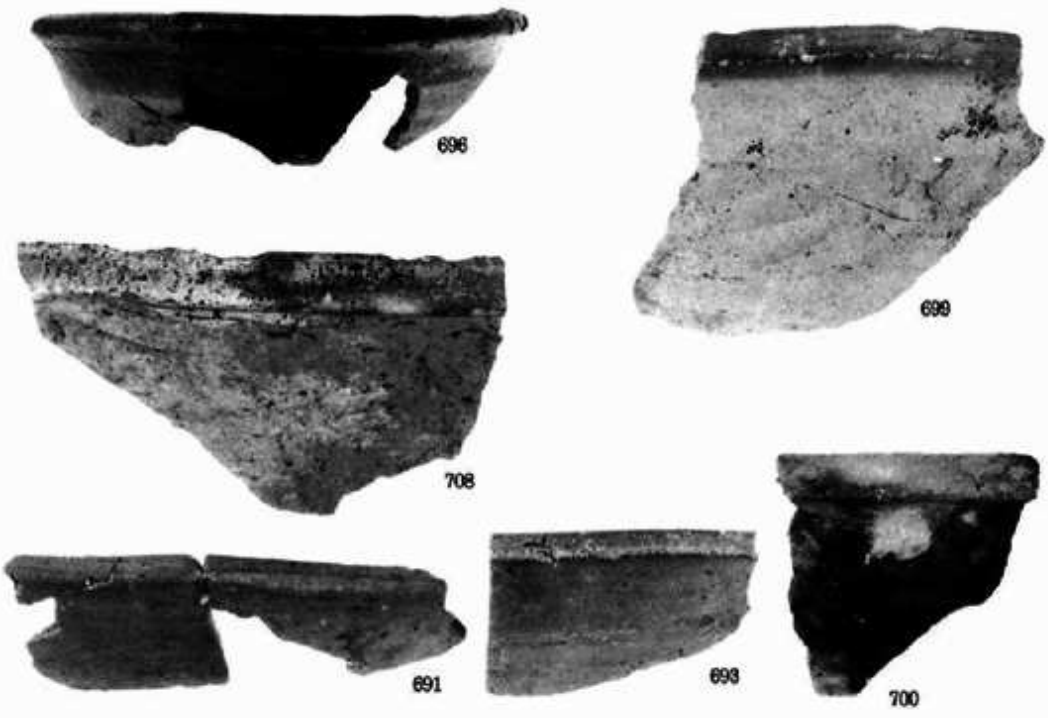
2　遺物包含層出土瓦器火舎・常滑焼甕



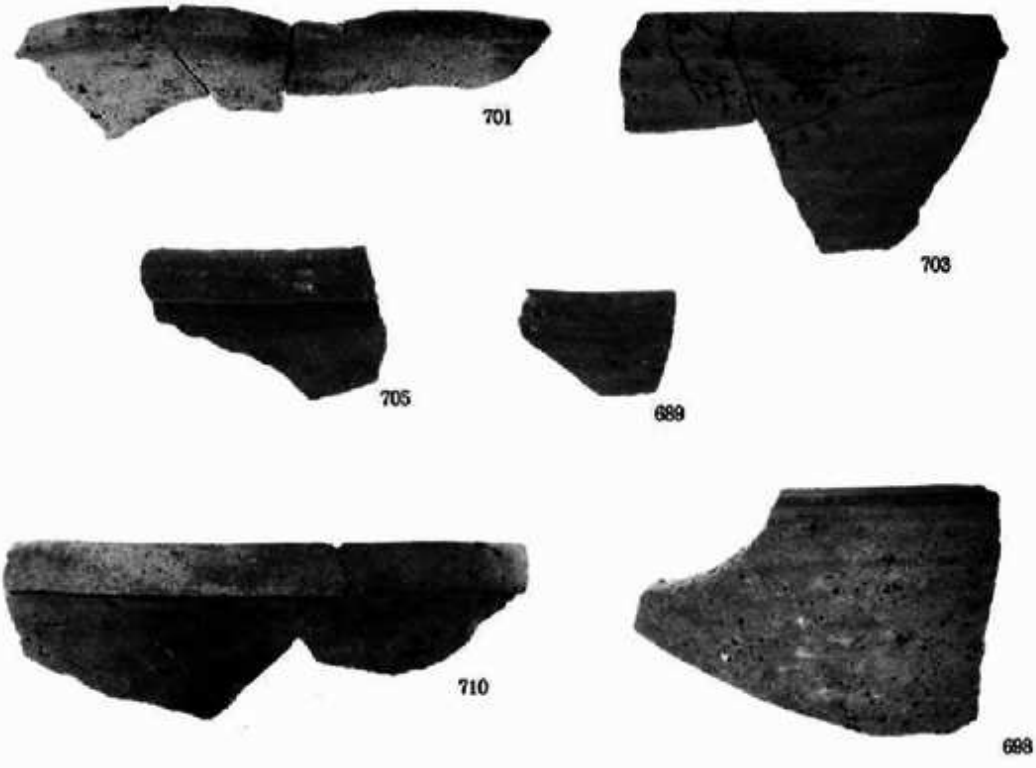
1　遺物包含層出土備前焼擂鉢、信楽焼捏鉢



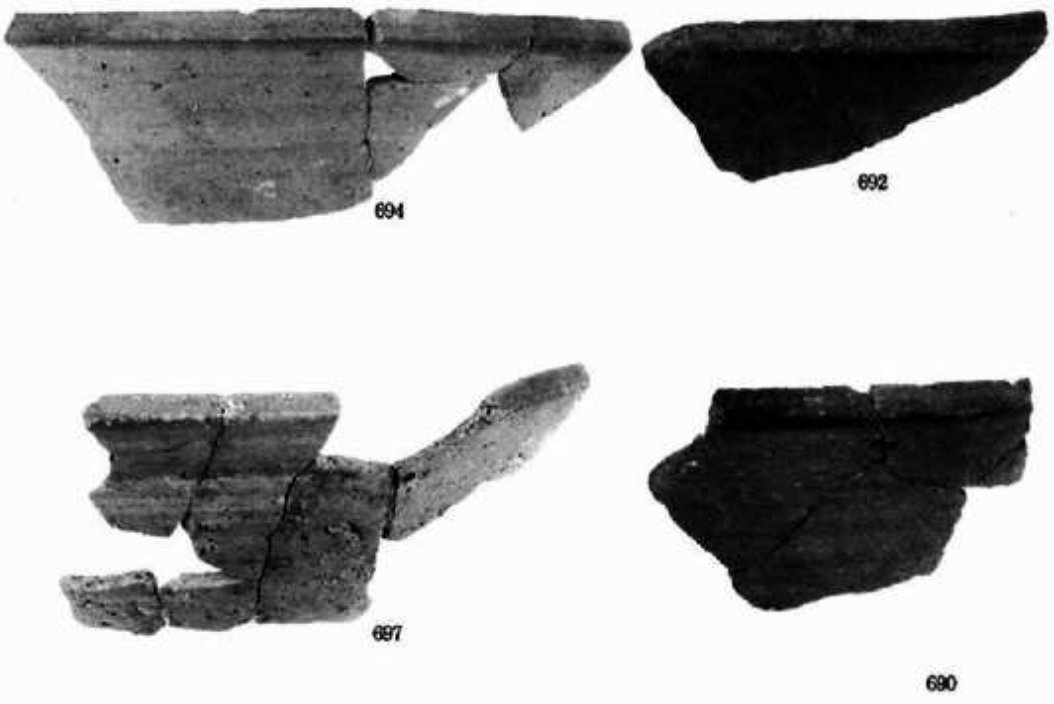
2　遺物包含層出土備前焼擂鉢、瓦器擂鉢、須恵器捏鉢



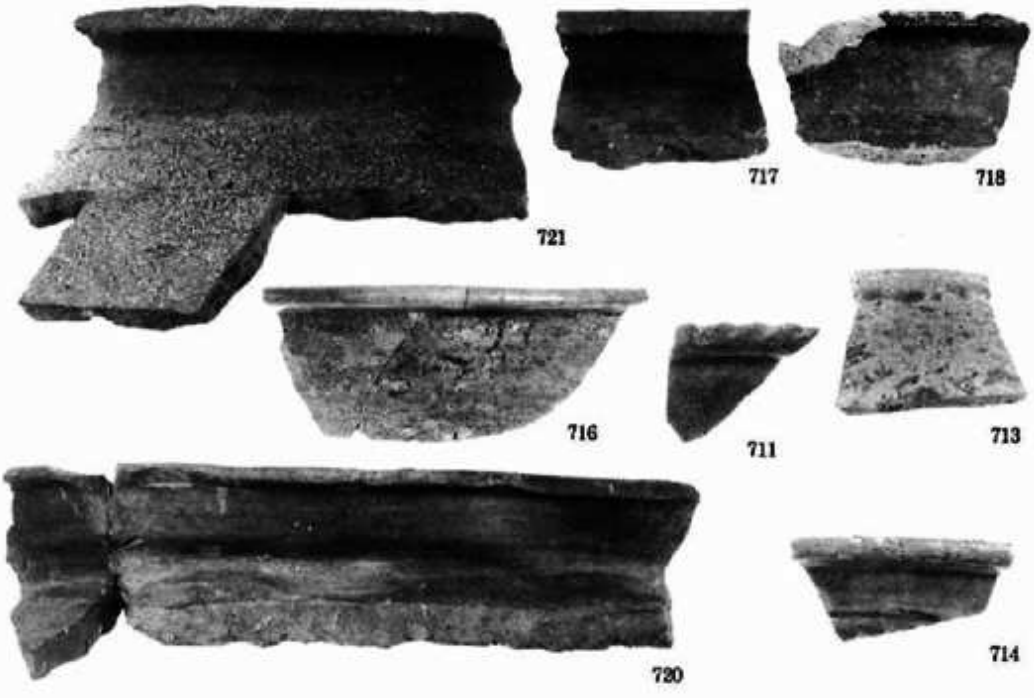
1　遺物包含層出土瓦器擂鉢、須恵器捏鉢



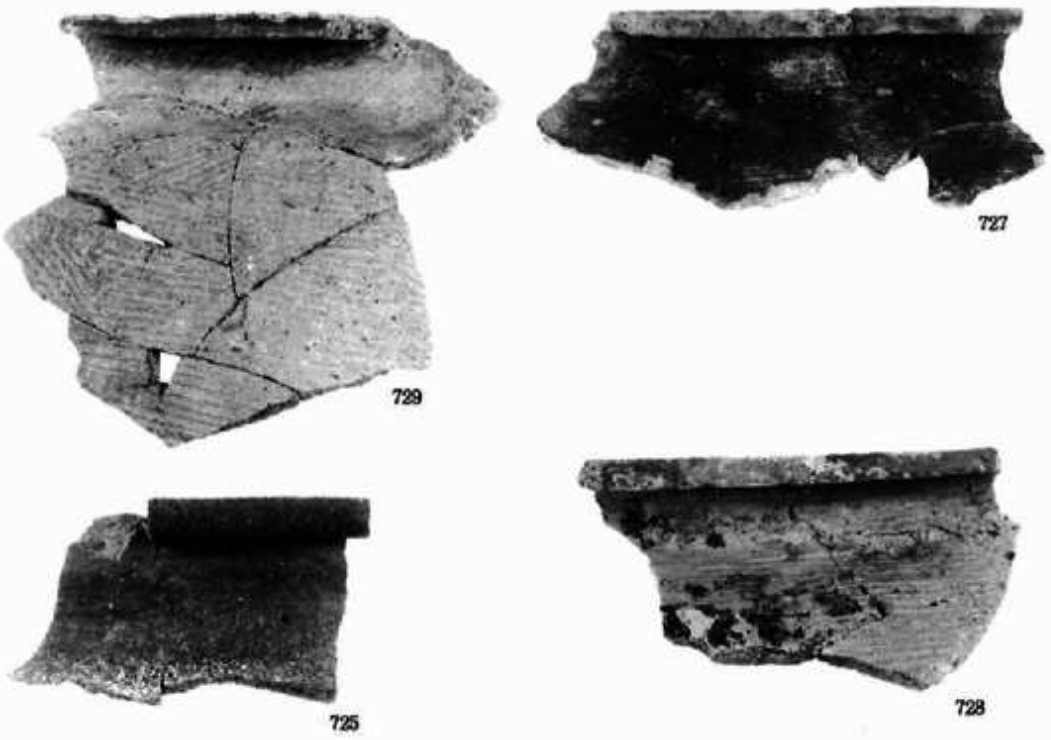
2　遺物包含層出土瓦器擂鉢、須恵器捏鉢



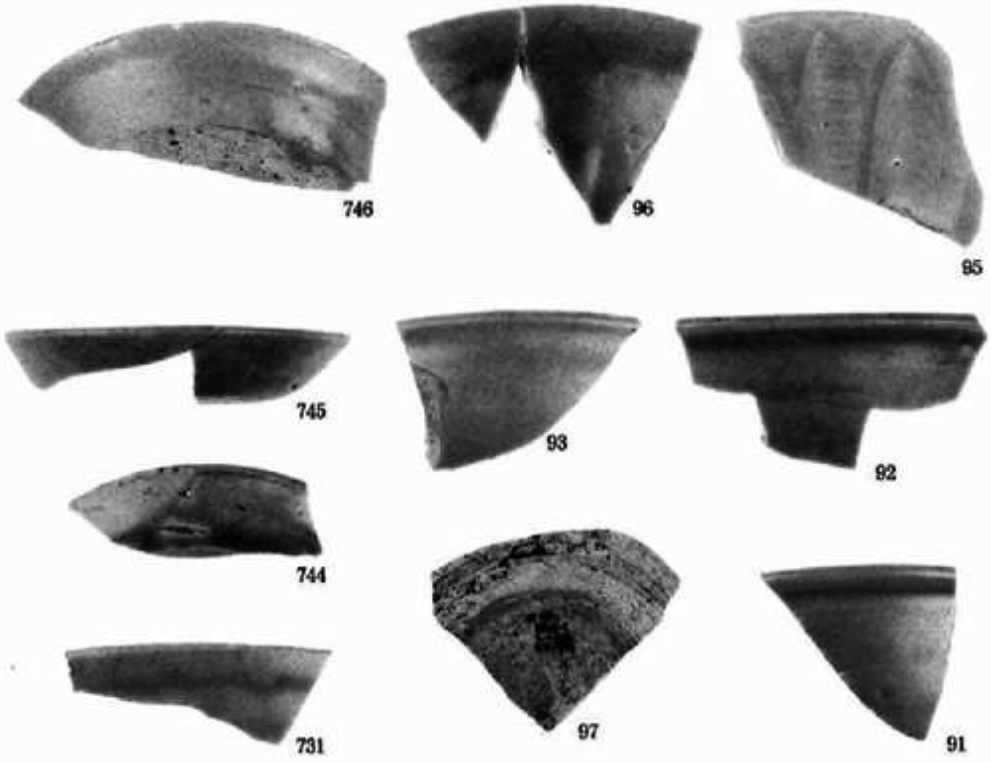
1　遺物包含層出土須恵器捏鉢



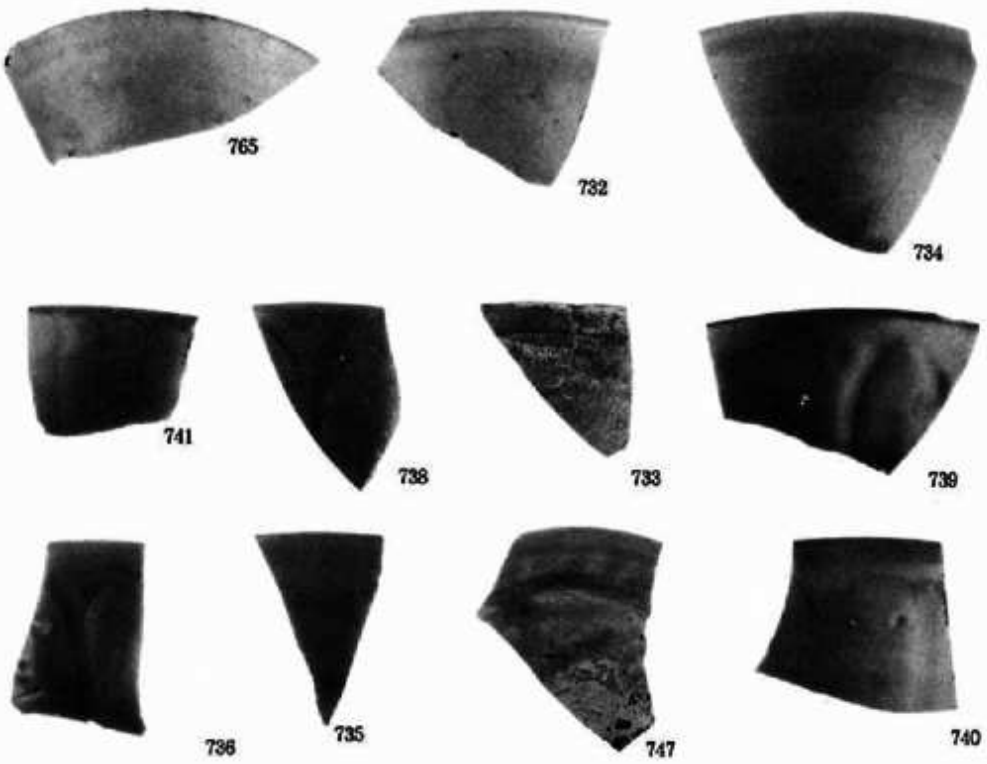
2　遺物包含層出土備前焼甕、瀬戸美濃焼折縁皿、陶器甕



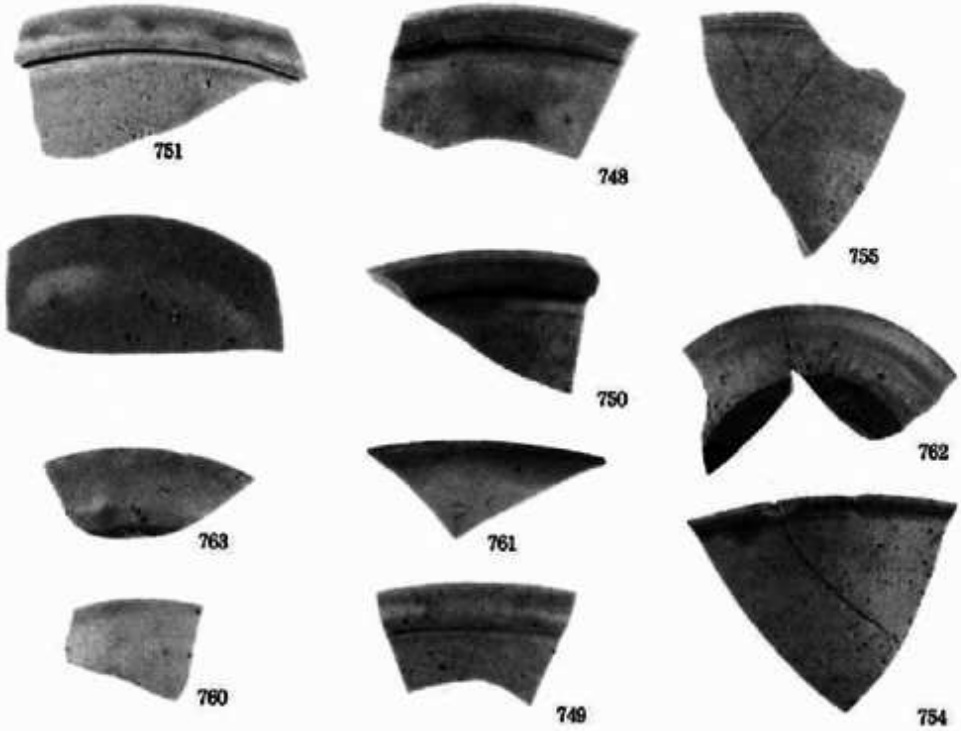
1　遺物包含層出土常滑焼、須恵器甕



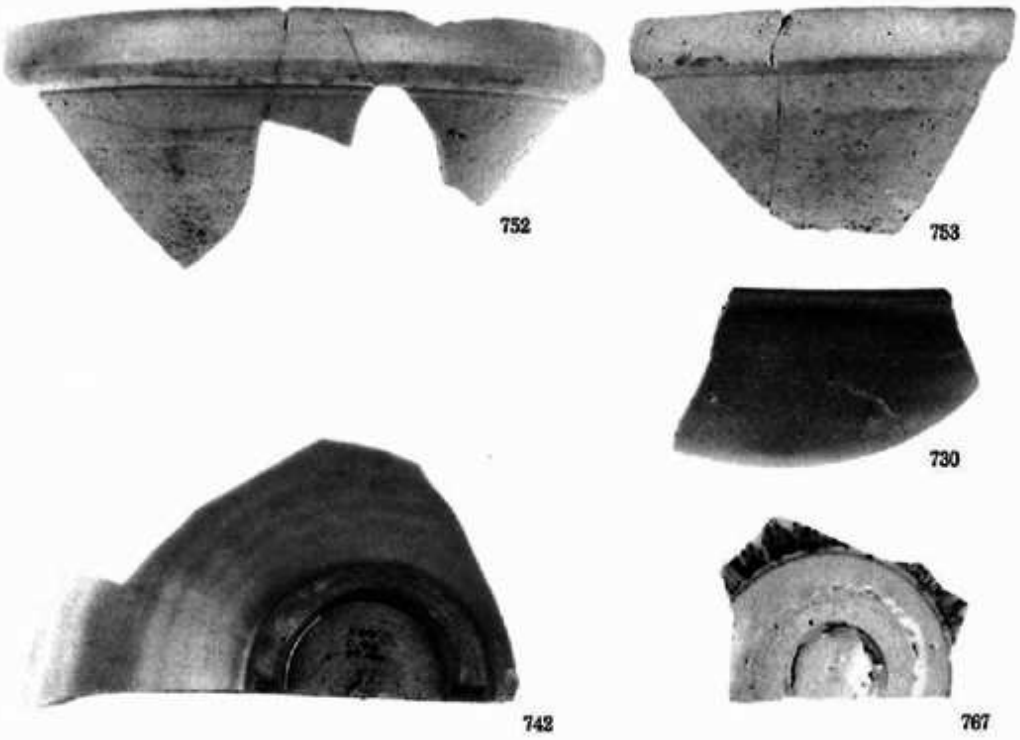
2　遺物包含層出土青磁碗・皿、白磁碗



1　遺物包含層出土青磁碗・皿、白磁皿

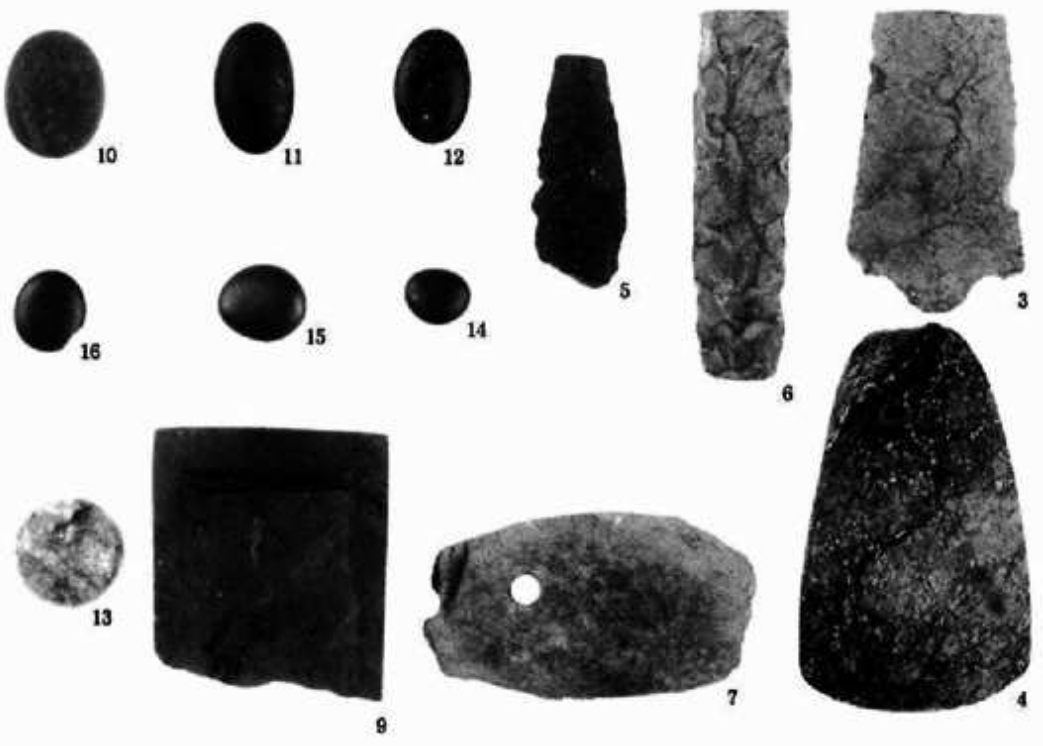


2　遺物包含層出土白磁碗・皿

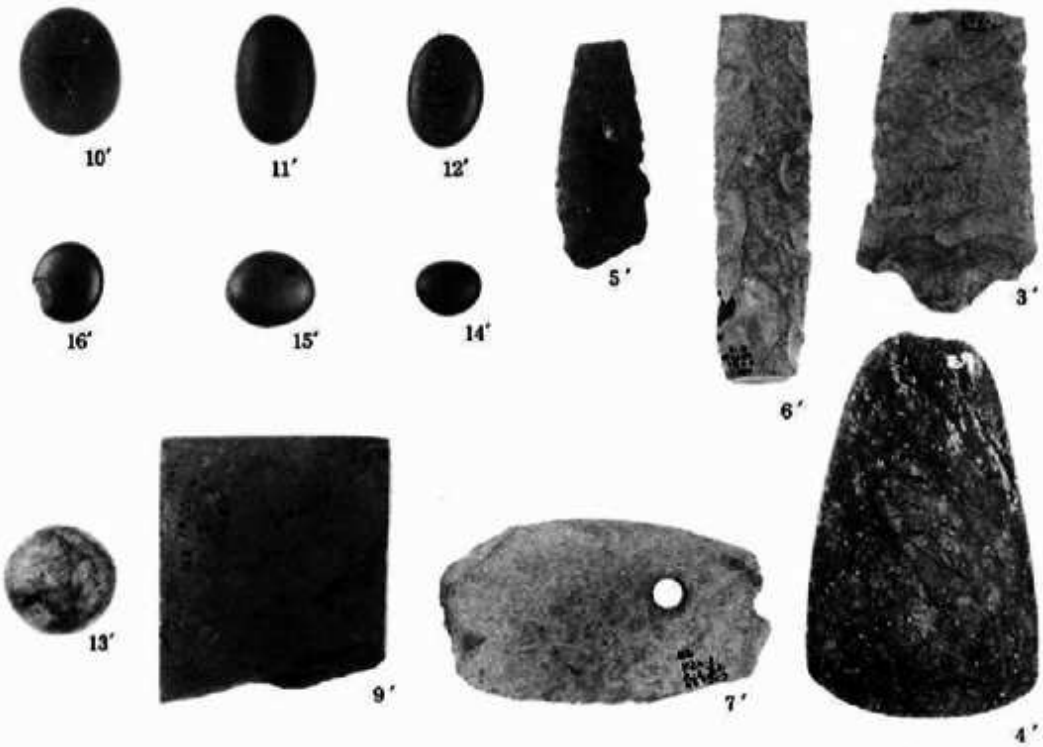


1　遺物包含層出土青磁碗・白磁碗、青花皿

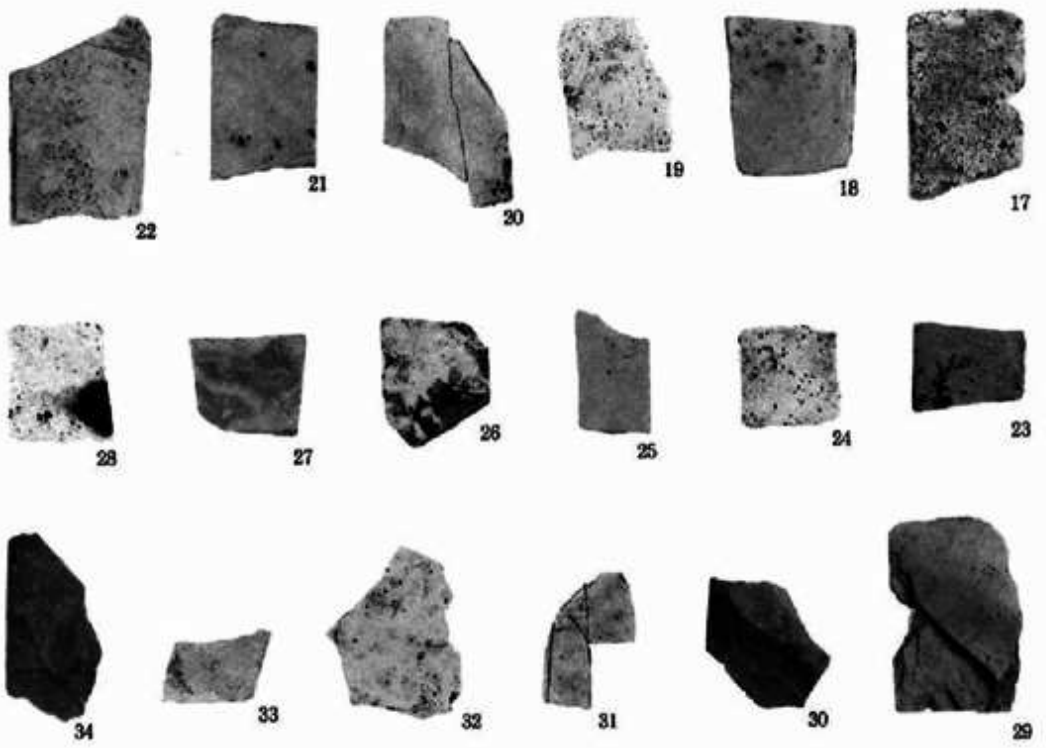
2　硯・石鍋



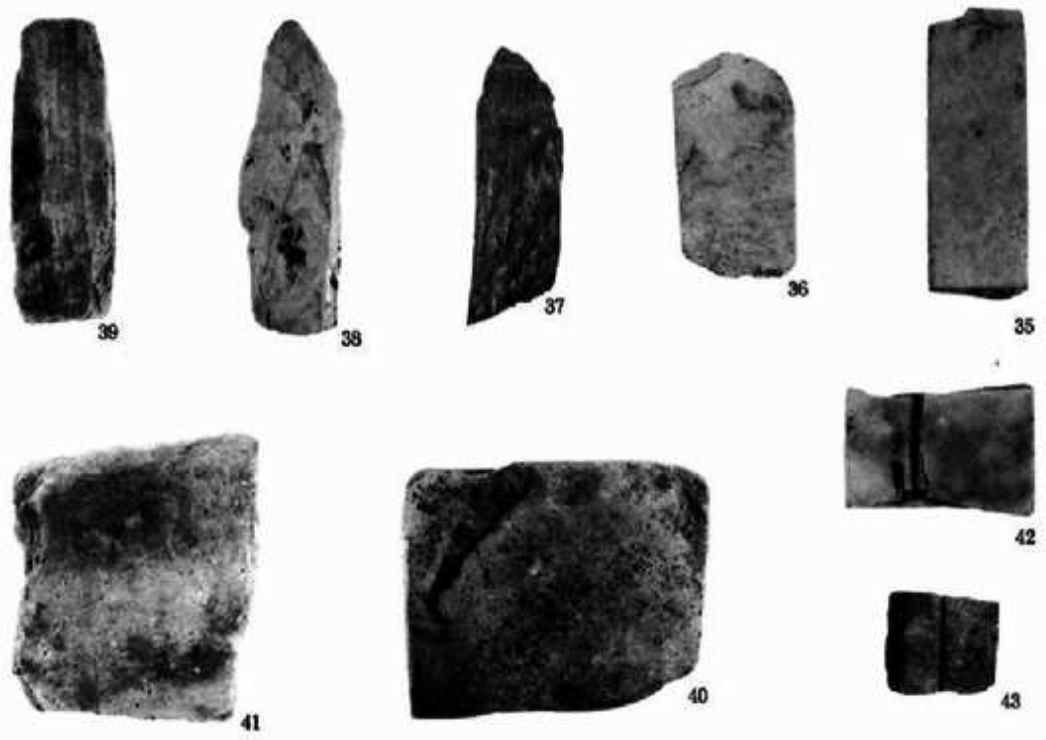
1　有舌尖頭器・石斧・石槍・石庖丁・基石・硯（表）



2　同　上（裏）

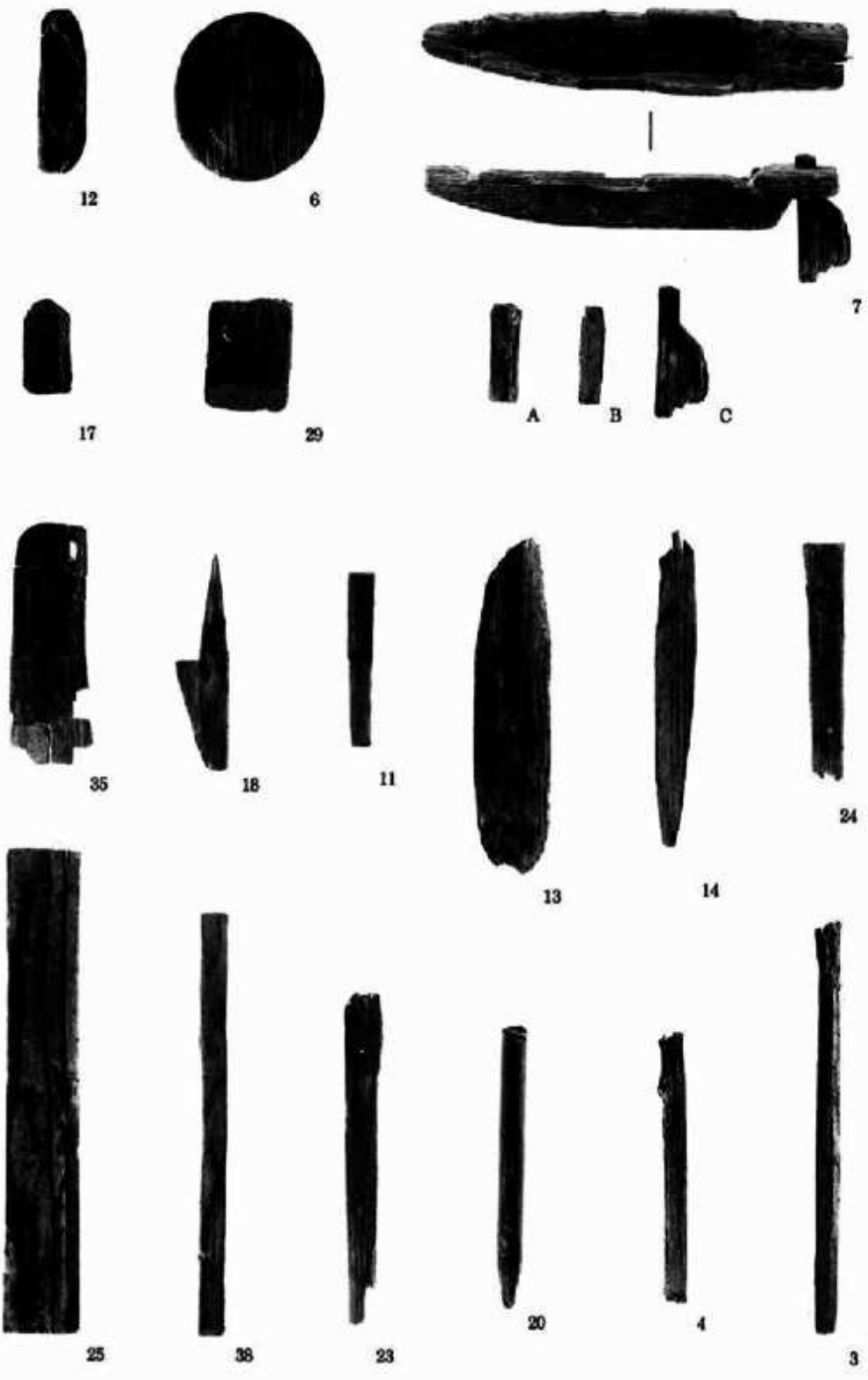

22
21
20
19
18
17
28
27
26
25
24
23
34
33
32
31
30
29

1　石器

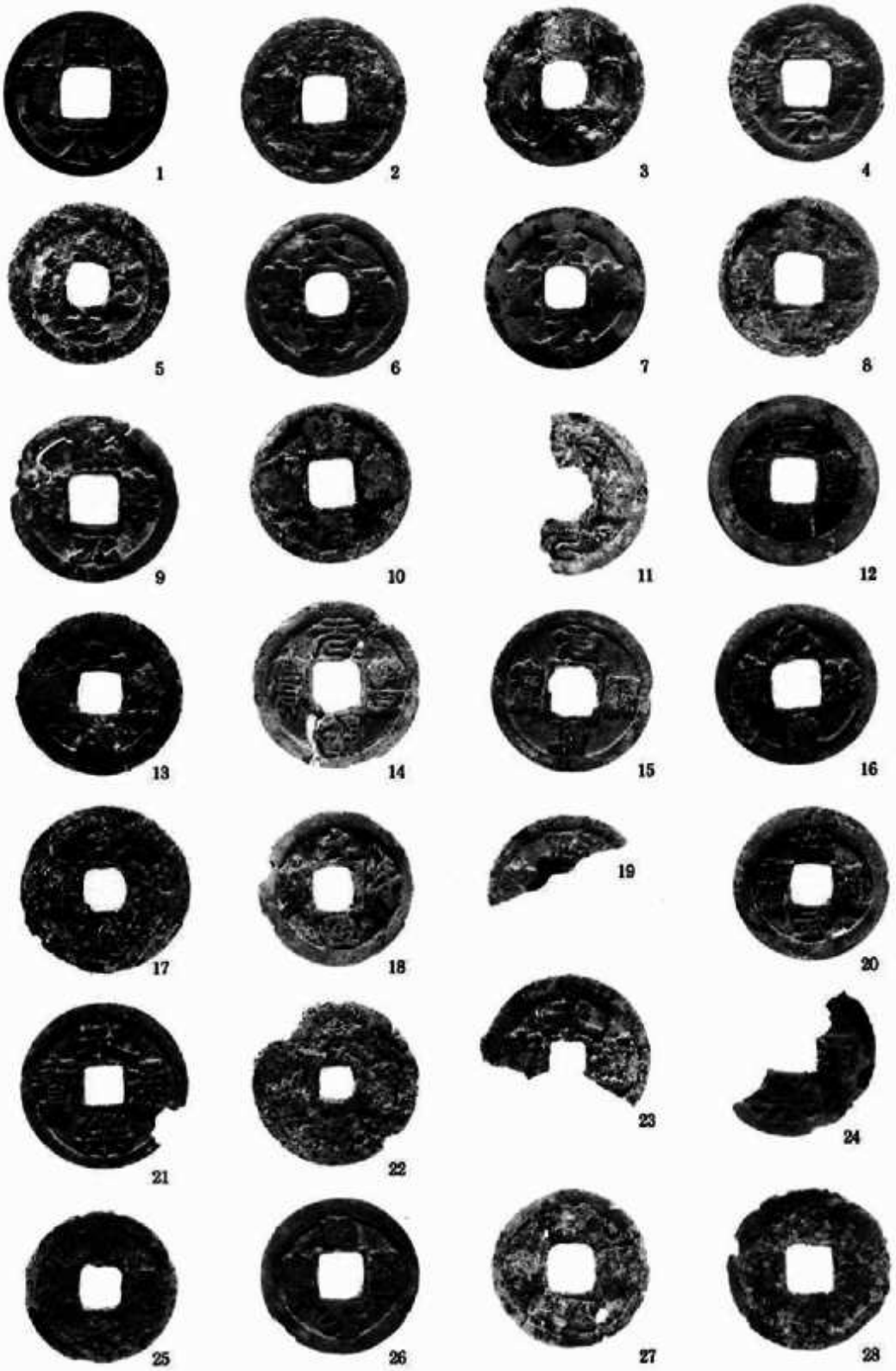

39
38
37
36
35
42
41
40
43

2　石器

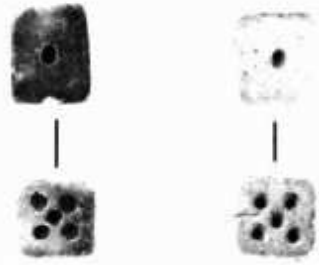
図版54　客坊山遺跡群第2次調査　遺物



木製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

2



2　1

1

9

4

10

7

5

4

サイコロ、当て具、土製品

4

1

6

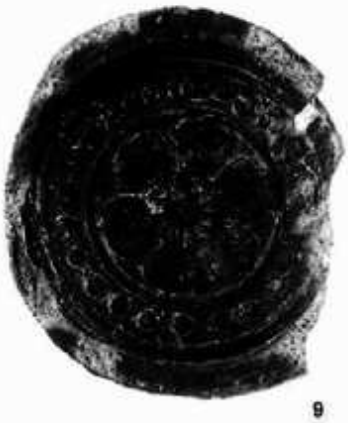
2

7

3

軒丸瓦

12



9

14

10

15

11

軒丸瓦

19

8

20

5

21

16

22

17

23

24

18

軒丸瓦・軒平瓦

図版60　客坊山遺跡群第2次調査　遺物

26

25

27

31

28

33

34

36

35

37

40

39

38

軒平瓦

44

45

46

47

50

51

48

53

飾り瓦

61

54

55

58

57

49

56

59

60

52

41

43

42

飾り瓦・文字瓦

報告書抄録

ふりがな	きゃくぼうやまいせきぐん
書名	客坊山遺跡群第2次発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	芋本隆裕・才原金弘
編集機関	財団法人　東大阪市文化財協会
所在地	〒577-0843　東大阪市荒川3丁目28−21
発行年月日	平成10年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査要因
きゃくぼうやまいせきぐん 客坊山遺跡群 （第2次調査）	大阪府 東大阪市 客坊町1065	27227			19870516 〜 19871014	2,324	宅地造成

種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項
寺院跡 城跡	平安後期 〜 室町時代	基壇跡 石垣・穴蔵 柱穴・土坑 溝・石段	有舌尖頭器・石鏃 弥生土器・須恵器 土師器・瓦 銭貨・木製品 石製品・骨角製品	・石垣をもつ平安〜室町時代の整地面 ・基壇跡周辺出土の大量の瓦 ・ヘラ描き文字瓦 ・客坊城に伴う穴蔵

客坊山遺跡群第2次発掘調査報告書

1998. 3. 31

発行　財団法人　東大阪市文化財協会

印刷　株式会社　中島弘文堂印刷所